# サクラビルを出て

彩杉　厚智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サクラビルを出て

【Ｎコード】
Ｎ３４８２Ｉ

【作者名】
彩杉　厚智

【あらすじ】
充実したキャンパスライフを送りこれからの人生の目的を探る。そのために始めた一人暮らしで村石保は様々な人に出会い、事件に遭遇して大人になっていく。

# 1

安物買いの銭失い。

値段の安いものにはそれなりの理由があって安いのだから、つまり質が良くないのだから、買っても気に入らなかったり使ってもすぐに壊れてしまったりして、結局長持ちせずかえって損をしてしまうこと。よく使う格言。まさに俺たち夫婦にぴったりの言葉だ。

毎朝のスーパーのチラシに血眼になって一円、二円の違いに一喜一憂する吝嗇家を嘲る人がいるだろう。謳い文句に踊らされて要りもしないものであっても次から次へと注文してしまう浪費家を蔑む人もいるだろう。しかし俺たちは嘲りも蔑みもしない。なぜなら彼らの心情は痛いほど理解できるからだ。

新婚の俺達夫婦は似たもの同士。二人とも安物には本当に目がない性分で、昔からその場のインスピレーションに忠実に行動しては、ただただ押入れに存分の肥しを与えてきた。嗚呼、失敗した。そう思う度に次からはもっと高くて良いものを買おうと心に誓うのだが、いざ簾のように並ぶ値札を目の前にすると自然と鼻が利いて大特価物を見つけてしまう。しかも二人が一緒にいると相乗効果が生まれるのか価格の下方修正はとどまるところを知らない。

今回の新居選びも、少しでも家賃の低いものを低いものをと様々な妥協を積み重ねたあげく、見かねた感じの仲介業者さんのフォローがあって何とかこのサクラビルに決めたのだが、結局入居三ヶ月の今、俺たち夫婦は再度の引越しの準備をしている。

当初の理想は高かった。

二人だけの甘い新婚生活をスタートさせる記念すべき愛の棲家なのだからと意気込んで互いに仲介業者が営業スマイルを引きつらせるぐらいに次から次へと希望を出し合った。実際、俺たち夫婦を担当してくれた岡本さんは途中で青ざめて俺たち夫婦の口を手で塞ごうとしたほどだった。

新築、３ＬＤＫ、フローリング、オートロック、大きな下駄箱つきの広い玄関、南向きで日当たり良好、ウォークインクローゼット、ちょっとした家庭菜園ができる広いベランダ、駅・コンビニ・スーパーの近く、車の騒音なし、アイランド型キッチン、オール電化、ウォシュレット付トイレ、床暖房、浴室暖房、二人でゆっくり浸かれる大きなバスタブ、駐車場完備、光通信、ペット可・・・。今思えば恐ろしく世間知らずだった。

俺も俺の奥さんもそれまで一人暮らしの経験がなかった。生まれてこの方ずっと両親兄弟と一つ屋根の下で暮らしてきた。幼いころは兄や妹と同じ部屋。俺は勉強机が兄弟に一つという時代もあった。

下腹を押さえてトイレに駆け込もうとしても先客が待っていたり、たかがテレビのチャンネル争いで生傷が絶えなかったり、自分の部屋から一歩出れば犬も食わない両親の夫婦喧嘩に出会ったり。家族同士といっても個性ある人間の集団である以上色々ままならないことばかりなのだ。

だから二人にとって一人暮らしは憧れの世界だった。見たいテレビを見て、寝たいときに寝る。食べたいときに食べ、トイレを我慢せずに使い、好きなときに風呂に入る。その風呂に入れる入浴剤も自分で選ぶ。そう言えば泡のお風呂に入ってみたいというのが奥さんの夢だったはずだ。俺も奥さんもずっと一人暮らしを夢想して生きてきた。玄関ドアのこちら側は全て自分だけの世界だと想像を膨らませるだけで思わず目眩がしそうになった。一人暮らしの友人が「料理が面倒だ」とか「朝起きるのがつらい」などといった一人きりでの生活の苦労について語るとき、俺も奥さんもその友人が直視出来ないほど眩しく見えたものだった。生活を苦しめるという家賃なるものを毎月滞りなく払って行く事にさえ恍惚とせずにはいられなかった。

三ヶ月前、婚姻という法的手続きを経ることによって俺たちが得たのは念願の「一人暮らし」ではなく「二人暮らし」だったが、積年の夢だった自分だけの城というものをようやく手に入れることが

できた。若い夫婦はこれから生活を送る新居に光り輝くベールに覆われた理想郷を夢見ていた。

現実を知ったのは希望を出し尽くしたときに返ってきた家賃の相場を聞いたときだった。今ではその値段は覚えてもいない。きっと忘れなければ先に進めないような額だったのだろう。あまりの驚きに二人ともまさに魂消て開いた口が塞がらなかった。放心状態から醒めたときには自分のあまりの世間知らずさに耳まで赤らめ、お互いに顔を見つめ合ってはにかんだのだった。

意を決した夫婦が繰り出したのは専売特許の妥協の嵐だった。二人がそろえば怖いものなどない。価格はどんどん下方修正されていった。

築年数など関係ない。部屋数は二の次。台所の設備など水と火さえ出れば何でも良くなり、コンビニの存在など気にしていられなくなった。駅まで自転車で行ける範囲なら文句はない。せめて風呂ぐらいは一人で入りたいと思えばバスタブなど小さくて構わない。ウォシュレットトイレが汲みとり式に変わっても耐えられないものではない。

希望条件にも切りがなかったが、妥協も延々と続く新婚夫婦に岡本さんがたじたじとなりつつ勧めてくれたのがサクラビルだった。あれはどうかこれはどうかと新居選びに疲れてきていた夫婦が捨て犬のようなすがりつく眼差しで見上げたとき彼は掛けている眼鏡のレンズを鈍く光らせ自信に満ち溢れたスマイルと流暢な口調でこのマンションの説明をしてくれた。

築年数は二十年と古いですが頑丈な鉄筋コンクリートの３階建て。夫婦二人だけならとりあえず６畳と４畳半の２ＤＫの間取りで十分でしょう。駅から徒歩８分という最高の立地。高台にあるので見晴らしは絶景。幹線道路からは外れているので車の騒音の心配はありません。広めのベランダは東向きですが朝方の日当たりは抜群。トイレとお風呂は別々ですからどちらもゆっくり使っていただけますよ。そしてこの内容で家賃はなんと、たったの・・・。

俺たち夫婦は動物園のサルが餌に飛びつくように脇目も振らず即座に食いついた。サクラビルはまさに俺たち夫婦のためにあるマンションのように思えた。売り込み言葉の響きを聞けば思わずうっとりとするほどで文句の付けようがない。ことは急げと岡本さんの運転する車でその日のうちにサクラビルを見に行った。

岡本さんの言ったことは全て間違ってはいなかった。

２ＤＫの間取りなら窮屈感はない。実際に歩いてみたわけではないから分からないが岡本さんの説明では駅はそう遠くはなさそうだ。そして何よりそこからは自分たちが生活している街並みが思うままに一望できるのだ。見渡す限り視界を遮るものが何もなく、西の果てに太陽が没していく赤い景色があまりにも雄大だった。

「地平線が見える」

空と大地の境を見つけた俺は柄にもなく感動してそうつぶやいてしまった。それはビルが乱立する都会で暮らす俺たちには新鮮な体験だった。同じ姿勢での作業に疲れたときに思い切り伸びをするのが気持ちいいように、地の果てに向かって視線を存分に飛ばせるという爽快さは胸がすく思いだった。

夜になればロマンチックな夜景が楽しめますよと言った岡本さんの言葉に今度は奥さんの方が柔らかく目を細めた。

少々外壁にコケが生えようが階段の手すりに錆が浮いていようが目に止まらなかった。これ以上の物件はないに違いない。俺たち夫婦は何かに急き立てられるようにその日のうちに契約を済ませてしまった。

高校時代に歌手を目指して四六時中狂ったようにギターを掻き鳴らしていた俺は音楽が好きでハードロックからクラシックまで幅広いジャンルのＣＤを集めていた。奥さんは幼い頃から本の虫だったらしく今でも欠かさず週に一度古本屋に行っては一冊百円ほどの文庫を抱えきれないほどたんまりと買い込んでくる。二人はこの部屋に引っ越してきてまずＣＤと文庫本を解き放った。

しかし俺は今、６畳の部屋の隅でそのＣＤの群れをダンボールに

詰め込んでいる。その中からなんとなく選んだメンデルスゾーンを聞きながら。

熱く重厚なメロディとヴァイオリン特有の細く切ない響きがもたらす計算ずくのアンマッチがあまりに耳に心地よくて思わず目を閉じ身体を揺らして陶酔してしまう。隣の４畳半で文庫本を仕舞っている奥さんにこの良さがわかるだろうか。

彼女の作業はさっきから一向にはかどっていない。覗き見ると本棚からダンボールまでのほんの一メートルの移動の間に文庫本の表紙が彼女の心を捉えて離さないようだ。どうしても一冊手にするごとにパラパラとページを繰らないと気がすまないらしい。ポテトチップスをそばに置いたらもうお終いだ。

今日中にある程度荷物の梱包を終わらせてしまい明日は朝からレンタルのトラックに積み込む予定なのだが、その梱包は大方俺の仕事になるだろう。まだまだ整理すべき荷物が部屋中に山ほどあるのを見て俺はため息をついた。

しかし奥さんを責めることは出来ない。彼女の気持ちは良く分かる。俺もジャケットの写真に懐かしさを掻き立てられてＣＤの整理が全くはかどっていないのだ。

ああ、このＣＤは俺たち夫婦がまだ付き合いだす前に俺が奥さんに貸してあげたものだ。不意に当時の互いに互いの好意に気付きつつも決定的な一言が言い出せずじまいの咽喉が痒くなるようなもどかしさや付き合い初めの頃に特有の全身が火照るような高揚感が胸に蘇ってきて俺は矢も盾もたまらず隣の部屋の奥さんに這いよりその背中に抱きついてしまった。そのまま後ろに引き倒す。なすがままの彼女の着ているものを一枚一枚はがしながら俺は考えた。

どうしてこんなことになってしまったのだろう。ついこの間、荷物を全てダンボールから出して並べつくしたところだったのに。

事の始まりは引越してきた日の翌日だった。

坂道がきついのだ。一日の仕事を終え、疲れた身体を引きずるようにして歩き、ようやく我が部屋までこの角を曲がったらあと少し

だというところまで来たときに俺の目の前に現れたのはだらだらと際限なく続く上り坂だった。サクラビルはその坂道の頂上付近にあった。俺は思わず座り込みたくなった。角度を数字で見ればたいした事のない坂なのかもしれないが厳しい肉体労働をしてきた後の俺の足腰には未開の秘境に続く峻峭たる山道に違いなかった。それでも愛する妻が待つ我が家に帰るには前に進むしかない。最後の力を振り絞りやっとの思いでドアにたどり着き奥さんの顔を見たときには思わず瞼を熱くしてすがりついてしまった。

高台にあるので見晴らしは絶景と岡本さんは言った。あのときは車で来たので何の苦痛もなくその眺望を堪能したが、若い夫婦にはまだ車がない。明日からの毎日の帰り道を想像すると俺はもう二度と部屋から出る気がしなくなった。確かに岡本さんの言葉は間違っていなかったが、もう少し言葉の意味の裏返しも視野に入れておくべきだった。部屋探しというのは奥の深いものだとそのとき初めて痛感した。

嫌なところが一つでもあると他のところもどんどん気に入らなくなってくる。それは男と女の間柄のことだけではない。この坂道の苦しさを知って以降この部屋、この建物には次から次へと問題点が見つかった。

道路からの騒音がないというのも間違いではなかった。確かに夜間の車の通りは全く気にならない。

しかしもっと身近なところに音源はあった。部屋と部屋との間の壁が薄く隣室の音が手にとるように聞こえてくるのだ。隣の２０２号の大学生風の住人は毎朝目覚まし代わりにタイマー予約でＣＤをかけているらしく決まった時間に結構なボリュームの音楽がかかる。こっちが夜遅くまで奥さんと愛を紡ぎあい気だるい遅寝を楽しむためにわざわざ目覚ましを解除しておくのにも関わらず、朝も早くから壁越しにハードロックの重低音が聞こえてきてはたまらない。

左隣の２０５号も性質が悪い。そこの住人はどういう仕事をしているのかさっぱり分からないが毎日深夜までパソコンのキーボード

を叩いている。ときおり気に入らないことがあるらしく、何かを打ち付けたり、苦悩の罵声を吐いたりするのがこちらの耳に入ってくる。タイプの音も気になるがそれ以上にそのうめき声が何だか気味が悪い。三十がらみの男性であるということ以外全く生態が知れないのだが、そのうちニュースで凶悪犯として顔がテレビで流れるかもしれないと想像し身の危険すら感じてしまう。

隣の部屋の音が漏れ聞こえてくるということはこちらの音声も隣に知れ渡っている事になる。そう考えると何とも落ち着かない。夫婦間の喧嘩などあまりにたわいなく恥ずかしいので絶対に他人に聞かれたくないし、夜毎奏でる奥さんの切ない声は誰にも聞かせたくない。当の本人はその点についてはあっけらかんとしたもので、逆に「壁の向こうで誰かが耳をそばだてて聞いていると思うとちょっぴり身体が熱くなる」などと平気な顔で言っているが、夫の俺にしてみたらたまったものではない。想像のしすぎかもしれないが夜な夜な奥さんとの愛の語らいに耳をそばだてている隣の得体の知れない男が興奮して俺が外にいる間に押し入ってきたらと思うとおちおち仕事もしていられないのだ。

どこかの部屋から幼い子供の泣き声と叱りつける母親のヒステリックなわめきが毎日のように聞こえてくるのも気になる。ひどいときには子供をベランダに出して閉じ込めてしまうらしく子供が「お母さん、ごめんなさい！お母さん、ごめんなさいっ！」と泣き叫んでいるのを耳にする。他人の家庭に口出しするつもりはさらさらないが、ベランダで泣いている子供を想像すると聞いているこっちが悲しくなってくる。少なくともこれから子作りに励もうと考えている夫婦にとっては良い影響などありはしない。「私も母親になったらあんなにヒステリックになるのかしら」と不安げな奥さんを見たときに俺は再度の引越しということを初めて考えた。

気に入らないところはまだまだ止まらない。

広いベランダが東向きで日当たりの良さは文句の付けようがないが、ついてないときは本当についてないものだ。新しいマンション

がサクラビルの東側に建つことになったのだ。それも十階建て。この部屋に引っ越してきたときに妙に広い更地があるなと思ってはいたのだが岡本さんが「駐車場になるようです」と言っていたので、まさかマンションが建つとは考えもしなかった。マンション建築予定の看板が立ったときに慌てて岡本さんに問い合わせてみたら「予定が変更になって十階建てのマンションが建つようです」と言われてしまった。岡本さんは本当に申し訳なさそうに謝ってくれたし、あくまで予定は未定であり決定ではないのだから変更は仕方ないとは思うがそれでもやっぱりやりきれない。十階建てのマンションが建ってしまったら二階にあるこの部屋のベランダから太陽は拝めるのだろうか。先日建築会社の人が「工事中は色々ご迷惑をおかけします」とデパートの包装紙で包んだタオルセットを持ってきたが、太陽が当たらないではこのタオルを洗っても乾かないじゃないか、と恨み言の一つも言いたくなる。

しかもその広いベランダに何故かしら鳩が寄ってくる。この鳩は害がなければ愛らしいとパン屑でも与えたい気持ちにもなるのだろうが、ベランダに糞をして汚しまくるから羽をむしって丸焼きにしたくなるほど憎らしい。干した布団に糞を落とされては動物愛護の精神もあったものではない。木の枝や針金などを集めて作られた巣らしきものをエアコンの室外機のそばに見つけたときは思わず背筋が寒くなった。鳩の雛の面倒など真っ平ごめんだ。

築年数もかなり重要な要素だと知った。このサクラビルは築年数が二十年になる。二十年も時を刻めばそれなりに古くなって当然だ。外観も内装もそれなりに年代を感じさせる。しかし重要なのは見た目ではない。二十年という年月が変えるのは外から目に見えるものだけではないのだ。

現代社会は二十年前と比べてはるかに便利になった。電化製品の多様化、情報機器の発展。部屋の中でできる事が実に増えた。特別な事をやろうと思っていたわけではない。ただ人並みに文化的な暮らしがしたかっただけなのだ。しかし二十年前の人並みと今の人並

みは全く違うということをここで暮らすようになって痛感した。
食べ物を買ったら冷蔵庫に入れる。料理をするには電子レンジは不可欠だ。暑くなったら冷房、寒いときには暖房が当たり前。テレビを買ったらビデオも必要だ。コンポで音楽も聞きたい。時代はパソコンでインターネット。ネットオークションで掘り出し物を見つけるのが俺の趣味だ。
しかしこの部屋にはコンセントの絶対数が少なかった。従って危険とは知りつつたこ足配線にしてしまう。それでも限界があって、携帯電話の充電をするためにビデオデッキのプラグを抜いたり、炊飯中は電子レンジが使えなかったりという事態に陥ってしまう。
さあ外は寒いから暖房付けて音楽を聞きながらインターネットだ。今日はホットプレートで焼肉よ。・・・とは当然いかなくなる。ブレーカーが落ちる。熱を出すというのは非常に電力を食うようだ。この部屋は電力が足りない。我が家では焼肉が非常に危険な作業になってしまった。
つまり部屋の中にいくら文化的な機器を持ち込んでも部屋自体が二十年前では不具合が生じてしまうのだ。何を贅沢な事を、と言われるかもしれない。もちろん俺だってこれぐらいの手間を厭うからマンションを変えたいと言っているわけではない。奥さんも文句を言わずに順番を考えて効率よく料理をしてくれている。
しかし、とうとう俺たち夫婦はこの部屋を出る事を決心した。その決心を固めさせたのは水だった。
人間の身体は七割が水でできているという。それだけ人間にとって水は重要なのだ。しかしこの部屋の蛇口から出てくる水は質が悪い。臭いも強ければ味もまずい。
俺は朝目が覚めたらコップ一杯の水を飲むのが幼い頃からの習慣だ。冷水が寝ぼけた食道を通って胃にたどり着くと一日の始まりが来たと全身にスイッチが入る。その毎朝の儀式をこのまずい水で執り行うのは大変気分が悪い。その日一日どうも身体の切れが悪い気がする。だから俺はミネラルウォーターを買うようにした。不経済

なことだとは思うが身体に大切な水だからこそ少しぐらい金を掛けても良いと思うことにした。しかし料理や風呂には水道水を使う。そこまでミネラルウォーターに頼っていてはいくらかかるか分からない。昨今都会の水は飲料用には適していないと言われたりもするが周りの人に聞いてみても料理にまでミネラルウォーターを使う人はいなかった。よって不承不承甘んじて水道水をそのまま使っていた。

異変に気がついたのは二十日ほど前だ。俺の目の周りや口角の辺りに湿疹ができているのだ。痒みも伴っている。

俺はすぐに近所の皮膚科に行ったが原因はわからないと言われた。とかく皮膚病は原因不明な事が多いらしいが俺の場合も血液を調べても何の異常も見当たらなかった。医師に何か心当たりはと尋ねられて俺はピンときた。水が悪いのだ。そう言えば風呂上りの頬に今まで感じた事のない肌のツッパリ感やかさつきを覚える。実家にいたときには感じた事のない違和感だった。奥さんに聞いてみると「最近髪がぱさつくようになった」と言う。自慢のストレートヘアーの手触りが良くないようだ。俺たち夫婦は試しに近くの銭湯に行ってみることにした。結果は案の定だった。風呂上りの肌に何の違和感もない。奥さんも髪の手触りが良さそうだ。俺は犯人を捜し当てた。

サクラビルは道路内の配水管から引き込んだ水道水を一度屋上の高架水槽にポンプで上げ、そこから重力で各部屋に水を供給している。銭湯と同じ水道水を使っているのに俺の部屋の水がまずいのはどうやら屋上の高架水槽や各部屋に繋がっている給水の管に原因があるようだった。

役所に聞いたりして調べてみるとどうしても高架水槽を使っているマンションは水の質が悪くなりやすいのだそうだ。しっかり清掃していないと高架水槽には猫や鼠などの死骸が浮いていたりすることもあるらしい。しかも高架水槽の清掃は役所への報告義務がなく大家任せというのが実情なのだ。

果たしてサクラビルの高架水槽は清掃がしっかり行われているのか疑問だった。もしかしたら俺たちは毎日鼠の死骸ジュースを飲んでいるのかもしれない。しかしそれを大家に尋ねるには少なからず勇気がいる。認めたくはないが俺は小心者だった。どうせ出て行くなら波風立てずに出て行きたい。奥さんも転居に同意してくれた。俺たちはこの三ヶ月間を良い経験ととらえすぐさま新しい引越し先を探し始めた。よく考えれば安さに惹かれてこのマンションにしたが夫婦共働きの今の生活水準から考えればもう少し高い家賃でも十分やっていけるのだ。今回のように引越しを繰り返すのは敷金礼金の無駄遣い以外の何ものでもない。

メンデルスゾーンのヴァイオリンが聞こえなくなっても当然荷造りは一向に進んでいない。半裸でうとうとまどろんでいた俺は窓に目を向けた。もう日は暮れている。今日の夜は出前で済ませることにしよう。

俺はすっかり眠り込んでいる奥さんを起こさないように服を着て出前してくれそうな近くのそば屋やラーメン屋を電話帳で探しながらふと考えた。他の住人は出て行くつもりはないのだろうか。このマンションは十五部屋あるが半分以上は埋まっている。みんな自分の部屋に文句はないのだろうか。隣の２０２号の大学生ぐらいには早く引っ越すように忠告してやろうか。

そう言えばこうやって引っ越す段になっても彼の名前は知らないままだ。待てよ。隣どころかマンションの住人誰一人として名前を知らない気がする。よくよく考えると一つ屋根の下に暮らしながら挨拶もほとんどしたことがないではないか。

次のマンションでもそんな薄ら寒い近所付き合いをしていくのだろうか。そう考えるとどうも物寂しい気持ちになってしまう。面倒なことなのかもしれないが、それでも壁一枚向こうに住んでいる人の名前も知らないのは異常なことのように思えてくる。

早く郊外に一軒家を持とう。一軒家なら壁の向こうにこんなに気を使わなくても済むのだ。それには金が要る。そう思うとやっぱり

普段の買い物は何でも安いものが良い。おっ、このラーメン屋は安そうだ。

「もしもし、ラーメンと餃子を二人前ずつお願いしたいんですけど。え？今日は二割引？じゃあラーメンはチャーシュー麺にしてください。あとチャーハンと青菜炒めも付けて」

届いた出前を目の前にして俺はやっぱり後悔していた。

チャーシューは脂身ばっかりだ。チャーハンも妙にべたべたしている。餃子も青菜炒めもとても美味いとは言えない。良く考えたら奥さんは小食だからこんなには食べきれない。少しぐらい高くても美味しいものを出す店にするべきだった。安さに釣られて何でもかんでも頼むんじゃなかった。やっぱりこの性格は全然変わってはいないようだ。

## 2

果たしてこの時間は充実しているのだろうか。

大学での講義を終え、スーパーで買い物を済ませて、僕は今、マンションまでの帰り道を歩いている。

眼前には夕刻の薄暗い東天に向かってどこまでも続きそうな坂道が伸びている。マンションは坂の頂上付近にある。この長い坂道は足腰にきついのだが、だからと言って僕はこの坂道が嫌いではない。だらだらと続く坂道を若干の前傾姿勢で足元に目を落としながら上る。時間にすれば三分ぐらいだろうか。この三分間に僕は色々なことを考える。

今日もテーマは「充実」だ。最近ずっとこのテーマで上っている。

充実とは何だろう。この前辞書で調べたら「内容が十分で豊かなこと」とあった。何ともあやふやな意味だ。「充実した時間を過ごしましょう」と人は言う。僕も常々そうありたいと思っている。その気持ちは人並み以上だという自信すらある。しかしその願望が大きければ大きいほどどうしたらいいのか分からなくなってくる。充実した時間とは何ぞや。「内容が十分で豊かな」時間。さっぱり分からない。

今、僕は両手に食材を抱え「充実」について考えながら坂道を歩いている。この時間は果たして充実しているのだろうか。

今日の講義をした大学の教授に「どんなときに充実していると感じますか」と問えば何と答えが返ってくるだろうか。「研究をしているとき」だろうか。「講義をしているとき」だろうか。それとも「趣味のテニスをしているとき」かもしれない。総じてみれば「好きなことをしているとき」と言えるのだろうか。だが「好きなこと」をしているからといって必ずしも充実しているとは言えないと思う。おしゃべりが好きだからといって、取るに足りない話題で延々と長話をしていても充実感はないような気がする。しかし密かに心に想

っている人が相手だったらほんの数秒の立ち話がえも言われぬ満足感をもたらしそうだ。だけどそれも周りからみれば単なる社交辞令の挨拶程度で、とても充実した内容には見られないのかもしれない。

他人がどう思うかなんてどうでも良いと言われてしまうだろうか。確かに僕が感じる充実の度合いなど他人には分からないのだから僕が充実していると思えればそれで良いのだろう。

しかし今充実していると思えてもその充実の連続が何年後かには何と無駄な時間だったのだろうと思うときがくるかもしれない。

同じ人間でも価値観は変わっていくのだからそれはあり得ることだ。だとしたらなおさら充実とは曖昧なものでしかない。追い求めても無駄なような気がする。それでもやはり人間として生きている以上生命あるときを大切にしたい。時間を大切にするということは充実した時間を送ることに繋がると思う。

特にこの大学四年間は二度とやってこないのだ。体力はある。頭の回転も人生のピークにあるだろう。この四年間を充実させるための体内のインフラは整備されている。後は僕次第なのだ。

僕は充実した大学生活を送っているだろうか。どうも自信がない。大学の講義は想像以上におもしろくない。友達づきあいも上手ではない。もちろん僕のこんな気持ちを癒してくれる恋人もいない。

いつかは小説を書いてみたいという思いがある。

小さい頃から作家になりたかった。そのために文章が上手くなるからと何かで読んだので新聞のコラムを毎日書き写したり、片っ端からいろんな本を読んだりはしているが、それは中学生の頃からやっていることであり、毎日ご飯を食べることと同じように習慣化していて好きな時間ではあるが特別自分が充実できているという自覚はない。

では、どうすれば僕の大学四年間は充実したものになるのだろうか。

僕は今、生きている。それは医学的あるいは生物学的な意味で。つまりこの世に生を受けてはいる。しかし、ただそれだけなのだ。

人生を謳歌しているとはとても思えない。そう意識する度に僕の心の中に焦りに似た気持ちが生まれてくる。
僕に残された時間はあとわずかしかない。
このままではいけない。今の自分の時間を今客観的に評価するのは難しいのかもしれない。しかし今の時間が充実していると思えなければ漫然と大切な時間を浪費しているようで罪悪感に苛まされさえする。ああ、僕はどうすれば良いのだろう。充実した時間を過ごしたい。
そうこうしているうちにマンションの前まで来てしまった。マンションの名前はサクラビル。築年数は僕と同い年の二十歳でベージュの色調の外観はくすんでしまって古ぼけてはいるが鉄筋コンクリートなので結構丈夫そうだ。3階建てで2階の202号が僕の部屋だ。
部屋を見上げると僕の部屋の南隣の203号から住人が大きな段ボールの箱を持ち出しているのが見えた。マンションの脇に目をやると小さめのトラックが停まっていて荷台に幾つか段ボール箱が積んである。どうやら引越しらしい。203号の住人は確か2，3ヶ月ぐらい前に越してきた若い夫婦だ。もう出て行くのだろうか。
階段を下りてきた夫の方が僕に気づいて会釈をしてきたので僕も軽く頭を下げた。
「引越しですか？」
「ああ。短い間だったけど、お世話になったね」
本当に短い間だった。名前も知らずじまいで、お世話をした覚えなど全くない。言葉を交わしたのもこれが最初で最後ということになる。
階段を上がっていくと奥さんの方も下りてきた。
思っていたよりも美しい女性だった。僕は思わず二日に一度は必ず夜中に壁越しに聞こえてくる若い女性の声を思い出した。
壁が薄いのもあるのだろうが、声もわざとかと勘繰りたくなるほど大きくてこっちが恥ずかしくなるぐらいに鮮明に聞こえてくる。

最近では少しは慣れてきたがやはり若い僕がそれを冷静に聞き流せるはずがなく、そっと耳をそばだてながら膨らみきった股間に右手をあてがうことはしょっちゅうだった。

あの声の主がこの人だ。

そう思うと僕は頬がカッと熱くなるのを感じて顔を起こすことが出来なかった。伏目気味に会釈して奥さんとすれ違った。彼女の髪から甘い果物のような匂いが漂って僕の鼻腔をくすぐる。僕は消えゆく薫りを追いかけるようにそっと思い切り鼻から空気を吸い込んだ。たちまち僕の股間はこらえようもなく反応してしまう。

僕は小走りで駆け上った。階段を上がりきって、トラックに向かう奥さんの背中に視線を落とした。服の下にある細身の裸身を思わず妄想してしまう。

もうあの鳴き声を聞くことも、その声に感じて股間を膨らませることもない。

僕は何だか大人への階段を一つ上がったような気がした。彼女のおかげで少し大人になれた。いやこの別れで無理やり大人にされてしまったのか・・・。

なんとなく寂しい思いとともに感謝に似た気持ちが湧いてきて名も知らぬ彼女の後姿をいつまでも見ていたかったが、夫の方が階段を上がってきたので僕は急いで自分の部屋の鍵を開け中に入ってドアを閉めた。

ドア越しに彼の力強い足音を聞くと切ないような気持ちがした。胸を刺激するぴりぴりとしたこの微かな痛みは何だろう。僕は後ろ髪を引かれる思いでドアから離れた。

スーパーの袋から食材を取り出す。玉ねぎ、人参、ジャガイモ、牛肉。今日のメニューは朝から決めていた。もちろんカレーだ。この料理は食べることも然ることながら作ることも僕は好きだった。幾つかの工程を経て少しずつ出来上がっていく様子はいつも僕を夢中にさせるのだ。

最後に茄子を取り出して全部だ。僕のカレーに茄子は欠かせない。

これもお袋の味と言えるのだろうか。母の作るカレーには必ず茄子が入っていた。茄子がカレーの味をその実に凝縮するのだ。噛んだときに溢れ出てくるその濃厚な味わいが何とも言えない。

米をとぎ炊飯ジャーをセットして、まずは人参とジャガイモに取り掛かる。ピーラーで気持ちよく剥く。ジャガイモの芽は逃してはならない。剥き終わったら少し大きめに切って水に浸しておく。

次に玉ねぎを切る。この玉ねぎというやつは曲者だ。切り出したら涙が止まらない。コンタクトをしている人は涙が出ないと聞いたことがあるが僕は現代人には珍しく裸眼を保っている。両目共に1.5だ。従って今日も涙を流しながら玉ねぎを切る。カレーには欠かせないのだから仕方がない。

肉を一口大に、茄子は輪切りにしておいて早速玉ねぎを炒め始める。弱火でじっくり炒めなくてはならない。

顔を上げると台所の窓ガラスが初冬の西日に紅く染まっていた。夕飯にはもう少し時間がある。ゆっくりと丁寧に作り上げよう。玉ねぎが狐色になってきたところでジャガイモと人参だ。牛肉も加えるとあたりに美味しそうな匂いが漂い始める。

炒めている間に鍋で湯を沸かす。湯が湧いたら勢いよくフライパンのものを鍋に移す。急に見た目にカレーらしくなってきた。後はジャガイモや人参が柔らかく煮えるまで待たなくてはならない。今のうちに洗濯物を入れてしまおう。

一人で暮らすということは日常生活における責任が全て自分に帰属することになる。毎朝誰が起こしてくれるでもなく、食卓にご飯ができているはずもない。掃除も僕自身がやらなければ部屋の中は際限なく汚くなっていく一方だ。部屋の隅に埃がたまるのは本当に早い。浴室のカビの繁殖力にはびっくりさせられる。洗濯をサボっていると明日着る下着もないというときもある。

自由を求めて一人暮らしをする人は多いだろうが、逆に自由から生まれる忙しさに縛られることにもなると気づくのは僕だけではないはずだ。しかし僕はその自由による束縛を心地よく感じている。

炊事洗濯は大変だということは分かった。だけどそのことで僕は生きていることを実感している。
　食べ終えた後に残る皿の汚れ、起きぬけのじっとりと湿っぽい布団、埃を吸い取る掃除機の音、籠にたまっていく洗濯物の山。それらは自由という名の足枷であり、僕の生命活動の証とも言える。外から戻ると、この部屋に染み付きつつある僕の匂いを感じて全身の細胞が落ち着きを取り戻し静かに呼吸するのが分かる。ああ、僕はこの部屋の中で間違いなく生きているんだと確認できることが嬉しく感じるのだ。
　つまりその分僕が一般社会から取り残された存在であるということが言えるかもしれない。恋人もなく友達も少ない僕にとってはこの部屋の外は見ず知らずの他人だらけの世界であり、一歩進むごとに異邦人としての疎外感を味わわせられる何とも生き難い空間だ。この２０２号だけが僕に自分の存在を実感させてくれる唯一無二の最後の砦なのだ
　洗濯物をとり入れ所定の位置に仕舞ってから鍋の中を覗き込む。菜箸でジャガイモを突付くと大分柔らかくなっているのが分かる。もうルーを入れてもいいだろう。箱からルーを取り出し小さく割って鍋に落とす。お玉でかき混ぜると慣れ親しんだカレーの臭いが台所中に広がった。最後の仕上げの茄子を浮かべる。これで一件落着。あと少し煮込んだら火を止めしばらく寝かせて置くだけだ。
　腕時計を見る。６時１８分。まもなく先生が現れるころだ。タイミングよくご飯も炊き上がった。
　予想に違わず台所の窓の前を人影が横切った。すぐに部屋の呼び出しチャイムが鳴る。やっぱり先生だ。
「んー、いい匂い。部屋の外までカレーの匂いが漏れてきてるよ」
「先生、すいません。また、カレーにしちゃいました。ほんと、レパートリーが少なくて」
「いやいや、とんでもない。こっちが無理なお願いをしてるんだから作ってもらえるだけで感謝してるよ。それに俺、村石くんのカレ

ーが大好物でさ。あの茄子が忘れられないんだよね」
先生は少し長めのさらさらとした髪を掻き揚げ鍋に鼻を近づけて大きく空気を吸い込んだ。眼鏡を曇らせながらも満足そうな笑顔を浮かべている。その顔を見ただけで僕もうれしくなってしまう。
誰かのために料理を作って喜んでもらう。僕はそこに何とも言えない喜びを覚えてしまった。
今まで気付かなかったが、料理は結構向いているのかもしれない。もしかするとこの感覚が充実感という奴なのだろうか。まだ確固たるものではないが、少なくとも先生と過ごす時間は無駄ではない気がしている。
「この匂いをかぐとあの日を思い出しちゃうね。ああ、急に腹減ってきた」
先生が大げさに顔を顰めて腹を抱えながら炊飯ジャーに歩み寄った。蓋を開けるともうもうと白い湯気が立ち上る。先生は嬉しそうに僕を振り返った。
あの日とは先生が初めて僕の部屋に訪れたときだ。思い返せばもう十日も前のことだが、何だか昨日のことのように思えてしまう。それだけ僕の中であの日の印象が強く残っているのだろう。

十日前の夕方も僕はここでカレーを作っていた。
もうすぐ出来上がる、火を止めて少し寝かせておこうと思ったそのときチャイムではなくドアをノックする音が聞こえた。それは身体ごとドアにぶつかったような重く硬い音だった。僕はドキッとして身体を強張らせてドアを見つめた。
僕の部屋に訪問者などめったにない。知り合いが僕を訪ねてきた経験などまるでないのだ。あるとすれば新聞や宗教の勧誘ぐらいで僕はその手の勧誘を無碍に断る術を知らないので大抵居留守を使うことにしている。
今は台所の明かりが外に漏れているので居留守は使えない。いったい誰だろう。勧誘だとしたら上手く断れるだろうか。あの押しの

強さにはいつも閉口してしまうのだ。どうにも断りきれなくて必要もないのに二紙も新聞をとっていた時期がある。

「決して、怪しい者やありません。強盗とか押し売りとかの類とちゃうんです。ほんまです。ちょっと開けてもらえませんか」

か細いが早口で切迫感のある男性の声だった。声色を作っている印象はなく芝居を打っているようには思えなかったが僕は玄関に出るのを躊躇った。

怪しい者ではない、と言われて素直に信じろと言う方が無理な話である。ドアをノックして「怪しい者だ」と名乗る人などいるはずがない。関西っぽい訛りがあるのも気になるところだ。関西人がみな怪しいというわけではないが耳慣れないイントネーションに親近感は湧いてこない。

僕はとりあえずドアの覗き穴から外を見た。

レンズの向こうには誰も見えなかった。確かに誰かがこのドアをノックして、開けてくれ、と言ったはずなのだが。いたずらだったのだろうか。深呼吸をした後に鉄製の厚く冷たいドアの向こうに僕は恐る恐る声を投げかけてみた。

「どちらさまですか？」

しばらく待ってみたが反応はなかった。

やはり誰かのいたずらだったのかもしれない。このまま放っておこうか。しかしそんなことは出来ないのは分かっていた。新手の勧誘術なら相手の思う壺だが、このままでは咽喉に刺さった魚の小骨のようにいつまで経ってもドアの向こうが気になって仕方ない。僕は意を決してゆっくりとドアを開けた。

顔だけを出して外を見てみると、眼鏡をかけた細身の男性が壁を背に両手を腹に当てて座り込んでいた。どうやらこの人が僕を呼んだらしい。寝ているのだろうか。ぴくりとも動かないその様子はマネキンのように生気がなく少しずつ濃さを増しつつある夕闇にそのまま同化して消えてしまいそうだった。

もう日は沈み西の空がかすかに茜色に染まって見えるだけだ。北

風にドアが押されて寒さに思わず身をすくめる。今にも雪が降り出しそうなこんな寒い日に玄関先でにらめっこなどしていられない。話があるなら早くしてほしい。いつまでもここに座り込んでいられるのは迷惑だ。

「あの・・・。どうかしました？」

僕の問いかけにその男はようやくゆっくりと顔だけを起こした。長めの前髪が風に揺れる。焦点の合っていないようなぼやけた眼差しで眼鏡越しに僕の顔を仰ぎ見ている。口の周りの無精ひげに違和感があるが男の顔に見覚えがあった。何度かこのマンションで顔を合わせている人だ。このマンションの住人というのは嘘ではない。だがそれ以上のことは知らない。その男が僕に何の用だろうか。回覧板は持っていないようだった。

「これから夕食ですか？」

男は咽喉の奥から搾り出すようにして掠れた声を出した。

「ええ、まあ」

「カレーですか？」

これだけ台所から匂いがこぼれてくれば聞かなくても分かるだろう。男は顔は憔悴しきっていたが僕が頷くと目だけは爛々と輝かせた。次の瞬間、男はさっとその場に座りなおして正座になり手をついて僕を見上げた。

「失礼は承知でお願いします。私にカレーをごちそうしてもらえませんか？」

驚くと言葉が出なくなるということを僕は生まれて初めて体験した。誰かに手をついて見上げられたことも、作ったものを食べさせて欲しいと言われたことも初めての経験だった。この人は一体どういうつもりなのだろうか。

グレーのセーターにジーンズという格好にくたびれた感じはなく食い物に困った物乞いには見えない。華奢な肉付きから強盗というイメージもわかない。彼の真意をつかめず返答にまごついていると、彼はジーンズのお尻のポケットから黒い皮製の財布らしきものを取

り出して僕に見せた。
「私、二件隣の２０５号の榊原、言います。一昨日の晩から何も食べてへんのです。何とか外に食べに行こうとドアを開けたんですけど、おたくの部屋からのカレーの匂いを嗅いだ瞬間もう動けなくなってしまいました。お金ならここにあります。どうか私にカレーをごちそうしてください」
男は僕の手にぐいぐいと財布を押し付けてきた。言葉遣いは丁寧だが必死の形相だ。
「怪しいもんやありません。他意もありません。このお金も私が働いて稼いだきれいなお金です。どうぞお納めください。どうぞどうぞ」
強引に財布を押し付けられて「それでは遠慮なく」ともらうわけにもいかない。僕は観念してとりあえず男を部屋に上げることにした。いつの間にか西の空も闇に包まれている。いつまでも日の暮れた寒空の下で押し問答などやっていられない。第一、こんなやり取りを誰かに見られたら恥ずかしくて仕方ない。
男を部屋に上げてからほんの数分で僕は人間の偉大さを知ることになった。
人はこんなにも食べられるものなのだ。そしてこんなにも食べられるほどお腹を空かせることが出来るのだ。
こたつに座った男の前に作りたてのカレーライスとスプーンを置くや否や彼はものすごい勢いで飛びついた。その勢いは暴走という言葉がぴったりで食べるというよりは飲み込むといった感じだった。正座で上品に座っている下半身とカレーを次々と頬張る上半身とのギャップがおもしろい。まるで手と口で行うスポーツのようだ。口の周りやセーターの下に着ている淡いブルーのカラーシャツの袖が飛び散るカレーで汚れていくのも彼は全く気づいていないようだ。
僕は目の前で巧妙な手品を見せられているように半ば口を開き加減で男の食いっぷりに見入ってしまっていた。この口はブラックホールにつながっているのかと思いたくなるほどそれは異様な光景だ

った。
カレーを作るときはいつもかなり多めに用意して食べ残した分は冷凍しておくことにしているのだがあっという間に鍋の底が見えてきてしまった。明日の分も炊いてあった炊飯器の中のご飯はすっかりなくなってしまった。四杯目のお代わりを出したとき、空になった炊飯器を見つめて僕は五杯目を要求されたらどうしようかと内心焦り始めていた。
しかしさすがにその事態は免れた。男は四杯目を食べ終えるとようやく我に返ったように皿とスプーンを置いてコップの水を一息に飲み干して大きく息をついた。
「こんなに食べたのは生まれて初めてです。いやぁ、大変美味しかった」
僕もこんなに食べる人を見たのは初めてです。
細身の彼の身体のどこにあれだけのカレーが入っていったのか不思議で仕方ない。
ただ、美味しいと言ってもらえると何だかむず痒いようなうれしさがこみ上げてきた。癖になりそうな喜びだった。僕は美食を追及する料理人の気持ちが何となく分かるような気がした。
男は急に居住まいを正し眼鏡のずれを整えさらさらの髪を撫で付けて僕を正面に見た。
「大変失礼いたしました。非礼をお許しください」
彼は丁寧に深々とお辞儀した。「いえいえ、とんでもない」と僕もお辞儀を返した。確かに僕の夕食はなくなったが不快な気分にはならなかった。何故だか清々しい感じさえある。
「私、榊原大輔と言います。三十二歳。一応、作家のはしくれです。大して売れてませんけどね」
さっか？
僕はこのとき生まれて初めて作家という職業を持つ人間に出会った。思わず頬が紅潮する。「作家」という言葉の響きだけで僕は目の前の人物に好印象を抱いていた。

僕は小さい頃から本が好きだった。小説を読めばその世界に浸れる。主人公になりきることで恋愛も出来るし、悪を挫くことも出来れば、友達もたくさん出来る。父の怖い怒鳴り声や母の悲しいすすり泣きも本の世界にいれば耳に入ってこない。大きくて暗い部屋の中で一人ぼっちでも本さえあれば寂しくなかった。

だから将来は小説家になりたいと思っていた。読んでいるときと同じように小説を書いている間はきっとつらいことや悲しいことを忘れていられるのだろうと自然と思うようになっていたのだ。

目の前に小説家がいる。僕にとってそれは天にも昇るような幸運だった。

僕は大学は文学部を選んだ。毎日必ず小説を読んでいる。文章の書き方を身に付けるために新聞のコラムをノートに書き写すことも欠かさない。それもこれも作家になるためだ。それが今、憧れの存在である作家と一対一で会話をしているのだ。宝くじを当てたような驚きに満ちた胸苦しい喜びに思わず目頭が熱くなるのを感じた。

さわやかな笑顔、鋭い視線、白く細い手と指のペンだこ。なるほど、よく見ればまさにこの人こそ小説家だ。眼鏡の銀縁が光り輝いてまぶしい。

「ぼ、僕は村石って言います。村石保。K大学の文学部二回生です」

思わず声が上ずってしまう。頭の中が真っ白だ。せっかく生で本物の作家と対面しているのだから何か話さないともったいないと思うのだが突然のことで何を聞いたらいいのかさっぱり思いつかない。

ちょっと待てよ。

この先生は205号に住んでいると言った。つまりは今まで同じマンションで作家大先生と生活していたのだ。ああ、僕は何と愚かなのだろう。そんな大事な事に気付かずにのほほんと毎日を送っていたなんて。知っていればきっとさぞかし充実した日々を送っていただろうに。

「私には珍しく大きな仕事が舞い込んできたんですよ。一昨日の晩、

雑誌に載せる小説を書いてくれって大手の出版社から依頼がありましてね。2日間で仕上げて欲しいと言われて、それで飲まず食わずでさっきまで小説を書いてたんです」

いつの間にか榊原先生の言葉から関西訛りは消えていた。出身は関西でたまたま先ほどは地の部分が出てしまったが普段は標準語を話すようにしているということだろうか。ふとそんな疑問が頭を掠めたが、それはすぐに消えてしまった。

締め切りに追われてペンを揮う。夢にまで見たシチュエーションだ。それを榊原先生は実践している。疲れを滲ませながらも満足げなその表情は仕事をやり遂げた男の顔だ。男の僕が見てもその横顔にうっとりしてしまう。

「それは、大変でしたね」

相槌を打ちながら、何かが足りないと僕は考えていた。

そうだ、コーヒーだ。小説家にはコーヒーが似合う。先生はきっとその美しい指で洒落たコーヒーカップをつまみ無限の彼方を眺める。そして凡人には理解できない深遠で哲学的な言葉を口にするのだ。僕は慌てて立ち上がり台所に向かった。

口惜しいことに我が家にはコーヒーを注ぐのにはマグカップしかなく受け皿の一枚もない。これでは雰囲気がまるでないではないか。僕は思わず舌打ちして地団駄を踏んだ。早速明日買いに行かなくては。

どうぞ、と僕は先生の前にマグカップに注いだコーヒーを差し出した。コーヒーから立ち上る湯気が先生には似つかわしい。先生が熱さに顔をしかめつつその苦い大人の飲み物を啜るのを僕は固唾を飲んで待った。

「申し上げにくいのですが・・・」

僕が出したコーヒーを前にして先生が眉根をひそめてうつむき加減だ。どうしたのだろう・・・。僕は先生の愁眉の原因を必死に考えた。

そうか。先生が飲むのはこんな安っぽいインスタントコーヒーで

はなく、豆を挽いて淹れる本格的なコーヒーなのだ。僕は自分の目線で物事を考えていたことを恥じた。何と浅はかなことをしてしまったのだろうか。僕は穴があったら入りたいほど自分の迂闊さを呪った。

「すみません。今日はこんなインスタントものしかなくって・・・」

消え入りそうな僕の言葉に先生は大げさにかぶりを振って否定した。

「そうではありません。・・・恥ずかしながら私はコーヒーが飲めないんです。苦いコーヒーを飲むと寒気がして全身に蕁麻疹が出てくるんです」

先生は背中を掻き毟り寒そうに自分の両腕を抱いた。

「えっ？」

猫がまたたびを好きなように小説家は皆コーヒーが好物なのだと僕は思いこんでいた。作家も人間なのだからコーヒーが苦手な人がいてもおかしくはないが・・・。またたびが嫌いな猫もいるのだろうか。

何となく僕は寂しいような残念な気持ちになった。興奮していた僕の頭の中に冷えた隙間風が吹き抜ける。急に部屋の中に気まずいような雰囲気がはびこってきた。

「お金・・・食事代払います。お幾らお支払いすればよろしいですか？」

「そんな、お金なんて結構ですよ。誰かに食べさせようと思って作ったわけではありませんから」

「そういうわけにはいきません。無理やり押しかけてこんなに美味しいカレーライスをごちそうになったんです。幾らか払わせてください」

先生は財布を手に僕の言葉を待っている。しかし、いくら？と聞かれてもお金をもらうつもりでカレーを作っていたわけではないから即座に返答できない。

レストランでカレーを頼んだらいくらぐらいだろうか。一皿で千

円もしないだろう。でも僕のカレーでレストランと同じ代金をもらったら日本中のレストランの店長に申し訳ない。
「本当にいいんです。こんなカレーぐらいでお金をいただくなんて・・・。それよりも僕は先生と知り合いになれただけでうれしいんです。僕もおこがましいですが作家志望です。だから先生のような本当の小説家の方とお近づきになれただけで、胸が躍るような気分なんです。カレーの代金は結構ですからこれをきっかけに僕と仲良くしてください」
「そんなこと言っていただけると私もうれしいんですけど、私なんか大した作家じゃありませんよ。その日暮らしの売れないダメ小説家です。私なんかと知り合いになってもきっとろくなことがない」
　そんなことを言われると余計に引き下がれない。第一、僕だって相手が今をときめく売れっ子作家だったら尻込みして「友達になれ」だなんてそんな大それたこと口に出来るはずがない。
「少ないですけど」
　先生は財布から一万円札を抜き出し僕の前に置いた。
「こ、こんなにいただいたら怒られちゃいます」
「誰に？」
　日本中のレストランの店長に、と言いかけて口を閉ざした。
「誰ってわけではないんですけど・・・でも僕のカレーが一万円だなんて、やっぱり」
「こんな時間におしかけた迷惑料も入っています。それに今回の仕事で次からも仕事がもらえそうですから今はちょっと余裕もあるんですよ。ここは黙って受け取ってください」
　優しい目でにこやかにそう言われても僕は受け取りたくなかった。
　先生とはこれから深い付き合いがしたかった。貸しを作りたいというわけではないが、ここで代価をもらってしまうことで今日限りでさよならという形になってしまうことが怖かった。それとも僕なんかと近所付き合いするのが迷惑なのだろうか。そうかもしれない。近所付き合いを大切にする人ならもっと昔から知り合いになってい

るはずだ。
「僕なんかと知り合いになるのは面倒ですか？」
「そんな・・・、とんでもない。私の方こそ村石さんとお話しすることができてうれしいんです。端くれでも作家なんていう商売をしてると家に引きこもりがちで一日中誰とも口をきかない日が珍しくないですから、時々自分の孤独さに気が狂いそうになるときがあります。世間から隔離された、どの組織にも所属していないふわふわとしたシャボン玉のような不安定さが何とも恐ろしいときがあるんです」
「分かります」
その気持ちは何となく分かる気がした。僕も布団に入って目を閉じるときに考えることがある。
このまま明日になって目を開けることなく死んでしまったらいったい誰がいつ気付いてくれるのだろうか。自由気ままな大学生。一人暮らし。友達も恋人もいない。大学という、あるのかないのか分からない曖昧で極めて大まかな組織に辛うじてしがみついてはいるが、はっきり言って僕という個体は世間から取り残されてしまっている。世の中の人は全てが他人で誰も僕を見てくれてはいない。すれ違う僕という人間が生きているか否かに興味はない。個としての僕はあまりにちっぽけで、消しゴムのカスのようにある程度集めなければ存在が成り立たず、つまんで捨てることすらかなわないような存在なのだ。
「ここでこうしておしゃべりをして久しぶりに血の通った人間と温かい会話をしてる気がしてるんですよ」
「だったらなおさらこのお金はいただけません」
僕は気持ちよく一万円を押し返した。これが友情の第一歩だ。
「分かりました。これは返していただきます」先生は一万円を財布に戻して今度は千円札を取り出した。「じゃあ、これで食事を作っていただけませんか？別に特別なものでなくていいんです。村石さんが毎晩食べるものを私にも食べさせていただければ。一食千円の

バイト。いかがですか？」
「僕が先生の夕食を？僕の、料理と呼べないようなものでもいいんですか？」
「村石さんの料理の腕前はなかなかのものですよ。さっきのカレーは味加減がとても良かった。お願いできませんか？」
　考えてみるまでもない。料理の腕に自信など全くないが、一人分が二人分になっても作る面倒は変わらない。普段から一人で食べる食事に侘しさを感じていた。憧れの作家先生と知り合いになれてしかも毎日食事を一緒に出来るなんて。僕の生活が一気に彩りを得ていくような気がする。
「喜んでお引き受けします」
「良かった。じゃあ、この千円は今日のカレー代です」
　先生は満足そうに微笑んだ。今度は僕も遠慮せずに押し頂いた。
「しかし、大変ですよね。二日間も飲まず食わずとは」
「今回は特別です。ピンチヒッターだったんですよ」
「誰かの代わりということですか？」
「ええ。本来は下根先生って方が書く予定だったんですが、ある事情で急にその先生の作品を載せることが出来なくなってしまったようで」
「ある事情？」
　僕が首を傾げると先生は僕の方に少し顔を近づけて小声になった。
「逮捕されてしまったんですよ」
「逮捕？」
「強制わいせつ罪で」
「きょうせいわいせつ？」
　僕が一オクターブ高い声で驚くと先生は満足げに口を開けて笑った
「こんなこと言っていいのか判りませんけど、聞くところによると先生は常習犯だったようでね。少なくないんですよ。やっぱり実体験は作家が作品を書く上で重要なファクターですから。よりリアルな描写に迫るには実際に体験するのがやはり近道なんです」

「でも、強制わいせつを常習していたってことは・・・」
僕の中で何かが崩れていく音がした。榊原先生の声がやけに遠くに聞こえる。
「下根太一先生はレイプモノのスペシャリストですから。僕はまだ何が得意っていうものがないんですが、今回はソフトＳＭで書いてみました。やはりＳＭは読者の食いつきが良いみたいですからね。女性も興味のある人が多いようで」
「官能小説なんですか・・・」
榊原先生が爽やかに笑っている。その笑顔はスポーツをした後の心地よい疲労感をイメージさせる。まるでポルノとは相容れない笑顔だ。僕には先生という人が全くつかめないでいた。

「２０３号の夫婦が引っ越したみたいですね」
僕はカレーライスを頬張る先生の横顔を盗み見ながらわざと世間話を切り出した。
一口目の先生の表情が気になって仕方ない。上手くできているかどうか。今日で十食目だが僕は毎回先生の顔色を窺っている。先生は僕の気持ちを知ってか知らずか毎回同じように美味しそうに食べてくれるのだが僕の作るものがいつも上手に出来ているとは思えない。時には口に合わないものもあるはずだ。そんなときはどこがいけないかはっきり言って欲しいと僕は思っている。
はっきり言われたら間違いなくショックだろう。泣きそうになるかもしれない。だがどこが悪いかも分からずに毎晩夕食を提供し続けるのも自分が納得できない。そういう葛藤を胸に抱きながら毎回息を殺して先生の顔色を窺っているのだ。
今日のカレーはどうやら先生の口にあったようだ。何となくだがスプーンの動きが軽やかに見える。先生は本当にカレーライスが好物なのかもしれない。
「ああ、そうそう。昨夜遅くまでごそごそやっていると思ったら引越しだったみたいだね。そう言えば深夜に聞こえてくるあの奥さん

の声は何とも艶っぽかったんだけどなぁ。もう聞けなくなるのかと思うとほんと残念だ」
職業柄か先生はこういうことを何の照れもなく平気で言う。
僕は思わず俯いてしまった。そうなんですよ、と相槌を打つわけにもいかない。かと言って平然と知らない顔を作れる自信もなかった。
あの奥さんの甲高い鳴き声が脳裏に響く。快感を訴えさらに快感を求める動物の咆哮。先生もあの声を聞いて自慰にふけっていたのだろうか。それとも先生ほどの大人になるとあの程度の刺激では僕が覚える我を失うほどの興奮とは無縁なのだろうか。
「実を言うとさ、あの声が俺の想像力を刺激してくれて、おかげで書けた作品もあったんだよ。そういう意味では大いに世話になったけど結局あの人の名前も知らないままだったなぁ」
「そう言えば未だに僕はこのマンションで先生以外に名前を知っている人はいませんよ」
僕は何とか話を変えることに成功した。少し顔が赤らんで脇の下に汗をかいているのを洞察力の優れた先生には悟られてしまっているだろうか。
「俺も村石君以外は知らないよ。ここに住んでかれこれ三年になるけどね」
三年住んでいても下の階の人の名前も知らないでいる。それでも何の支障もなく日々過ごしている。現代人は孤独だ。それは病的と言っても良い。自由を求めいつの間にか孤立し気が付けば四面楚歌に思えてしまう。他人が疎ましい。自分しか話し相手がいない。そんなときに一端マイナス的な思考に陥れば後は螺旋を描いて止めどなく落ちていくばかりという気がする。
「それって寂しくないですか」
「村石君は寂しいの？」
「そりゃあ、やっぱり一人暮らしは孤独ですよ。時々ふと実家に帰って母親や妹とたわいもない世間話をしたくなります。本当は家が

嫌で嫌で、半分飛び出してきたような形ですけど」
「確かに孤独で一人ひとりが孤立してるよね。でも俺なんかはこのマンションの住人全員が知り合いだったら息が詰まってやってけないな」
「え？どうしてですか？」
先生はうーんと唸って顎に手をあて考え込んだ。そんな格好が絵になる人だと僕は思った。
「現代は比較社会なんだよね。月収、財産、地位、名誉、出世、健康、環境。様々なものさしで人と人を比べてる。嫌でも社会に出るとこういういろんな種類のものさしと共に生活していかなくちゃいけない。そんな比較などしたくないって思っても周りが勝手に比較してしまう。他人と自分とを比較するということは自分と他人は違うという事実を鮮明にするよね。だから周りと比べながら生きていくということは自分をどんどん孤独に追いやるということになる。もしこのマンションの住人が全員知り合いだったとしたら、そういう比較を壁一枚隔てたところでやることになるんじゃないかな。朝から晩まで、下手をすると寝ているときまで自分を孤独だと意識していることになる。つまり知人と生活するということは自分を孤立させることになると思うんだ。想像するだけで指先から冷えてくるな」
先生の言葉の意味は良く分からなかったが、僕は先生の中に何か暗く冷たいものを感じた。常に冷静だがそれはときに冷徹ささえ感じさせる。先生は他人を一定の半径から近づけないように見えない障壁を身に纏い、心の動きを人に悟らせないような仕草を常に演じているような気が僕にはするのだ。
先生は不思議な人だ。先生はこのマンションにどうして引っ越してきたのだろうかと僕は思った。三年前に何があったのだろうか。消えてしまった関西訛りにはどういう意味があるのだろうか。
「話が変な方向に向いてしまったな・・・。もちろん村石君のことはかけがえのない友人だと思ってるよ。それに名前は知らないし付

き合いは無いとは言えこの三年間毎日マンションの周りを散歩してるからそれなりにこのあたりの住人のことについて知識もあるしね。仕事柄、人のことを観察するのは癖になってるから」

先生の仕事柄の観察というものは単なる他人の外見の観察とは違う。観察の後には必ず想像が付いてくる。

気の強そうな目もとの引き締まった女性を見ると荒い縄で縛って天井から吊るしてみたいだとか、あの汗をかいてあくせく働く腹の出た中年男性は夜になると赤ちゃんプレイで哺乳瓶をくわえているだとか・・・。真面目な顔をしてそういうことを口にするからこちらとしてはどういう顔をして良いのやらさっぱり分からない。

それでも先生はやっぱりよく観察していた。大学とマンションの往復だけの僕と違い気分転換に一日に何度もマンション周辺を散歩をしているからか住人の生活リズムが手にとるように分かるらしい。

先生によると引っ越していった２０３号は夫が肉体労働者で妻は公務員なのだそうだ。夫は毎朝の出勤時の極端に裾の広がったニッカボッカの格好で、奥さんは洗濯物の事務服で分かったらしい。

「コスプレしたらあの事務服の地味さが逆に淫靡な感じを醸しだしてそそるんだろうなぁ」

僕はまた返答に窮してしまった。

## 3

まずい、まずい。

自分の馬鹿さ加減が本当に嫌になる。今日は何をやってもうまくいかなかった。

事の発端は昨日まで今日の授業のレポートの存在を忘れていたことに始まる。思い出したのが昨夜の十一時過ぎ。それから慌ててノートを繰り、参考文献を広げて何とか書き上げたのが朝の五時少し前。出来上がって気が緩んだのか座椅子にもたれていたらいつの間にかうたた寝してしまい気が付いたら十時を回っていた。

慌てて部屋を飛び出し自転車をこいでも時すでに遅し。十時半からの授業は残すところあと三十分。もう教室には入れない。昼休みに教授の部屋に直に持って行ったら何とか受け取ってもらえたが、追加のレポートを課せられてしまった。今度こそ忘れまいと午後からの授業が終わった後に図書館でレポートを書いていたらいつの間にか外は真っ暗になっていた。

外へ出るとものすごく寒かった。木枯らしが吹きすさんでいて鋭く頬に突き刺さってくる。天気までが僕に意地悪だった。

今日ばっかりはこの坂が恨めしい。目の前の空に浮かんだオリオン座をキッと見据えて僕は両手にスーパーの袋をぶら下げだらだら坂を小走りに駆け上っていた。今日はテーマは無し。とにかく早く帰って夕飯の準備をしないと先生がお腹をすかせて待っている。

スーパーの袋に入っているのは白菜、白ねぎ、春菊、しいたけ、えのき、豆腐・・・。そう、今日は鍋にすることにした。これが一番手っ取り早い。しかもおいしいからこういうときにはうってつけだ。

サクラビルの方から女性が坂を下ってくるのが見えた。街灯の薄暗がりでもその毛皮のコートと水色の派手なスーツは目に付いた。どうやらこれから商売の時間らしい。高いピンヒールのコツコツと

いう音が過度な存在感を持って辺りに響いている。
「あら、お帰り」
意外にもその水商売風の女性が僕の顔を見て声をかけてきた。当然お水の人に知り合いはいない。僕を誰か別の人と間違っているのではないだろうか。近くによると目もとの化粧がおぞましいほど濃く紅く引かれた艶のある口紅がいやらしく見えた。夜に咲いた毒の花という印象だ。鼻の奥に甘ったるい香水の匂いがからみついてくる。僕は自然を装いつつ少し目を凝らして女性の顔を眺めた。
「あっ、こんばんは」
やっと分かった。１０２号の住人だった。朝たまにゴミをゴミ置き場に出すときに会うと声を掛けてくれるのを僕は思い出していた。
しかし、そのときの彼女はノーメークだし、くたびれたパジャマを着て髪をカーラーで巻いたままで気だるそうな雰囲気を漂わせている中年女性という印象しかなかったから眼前の良い意味で言えば大人の色気がぷんぷん漂う女性とは頭の中で結びつかなかった。女は化粧一つで化けるものだとつくづく感じる。この人はいったいいくつなのだろうかと僕は心の中で小首をひねった。
腕時計を見ると8時を過ぎていた。僕は年齢不詳女を見送って部屋へ急いだ。
先生は既に僕の部屋の前で寒そうに身を屈めて待っていた。何もそんなところで待っていなくても自分の部屋で待っていてくれれば呼びに行くのに。二階の通路は北風が強い。寒空の下、腹を空かせて待っていたのかと思うと何とも不憫だった。先生は僕を寒さに強張ったような笑顔で迎えてくれた。
「自分の部屋にいるとくさくさしてね」
だからってこんなところにうずくまっていなくても。僕はすぐにドアを開け先生の部屋の中に招き入れるとコタツとエアコンのスイッチを入れた。
「先生の部屋に土鍋ってありますか？」
「あるよ。何？今日は鍋？」

「そうしようかと思って」
寒さで強張っていた先生の顔が一気にほころんだ。
「そりゃあいい。今日はまた格別寒いからね」
日本人はつくづく鍋が好きだと思う。「鍋」という言葉を耳にしただけで皆顔がほころぶ。暖かい、楽しい、美味しい。鍋という響きに次々と良いイメージが浮かんでくるのは僕だけではないと思う。
先生は軽やかな足取りで自分の部屋に帰っていった。寒さも忘れたかのようだった。
僕は材料を次々と切っていった。何の考えも要らない。無造作に切るだけだ。ドアが開いて浮かれ気味の先生が土鍋を持って入ってきた。
「ずいぶんと大きな鍋ですね」
先生の持ってきた土鍋は一家族が食べられるぐらいの大きなものだった。
「そう？学生時代に買ったやつでさ、あのころは酔っ払って闇鍋で靴べら食べたこともあったなぁ」
先生も大学生のころは大勢の友達とはしゃいでは賑やかに鍋を囲んだのだろうか。靴べらを口にして目を白黒させる様子は僕が知ってる穏やかで周囲の物事に動じない先生からはどうにも想像できない。
押入れからカセットコンロを取り出してコタツの上に置いた。コンロに買ってきたカセットボンベをセットして点火する。紫がかった青い炎は輪を描くように広がり暖かい熱を勢いよく噴き上げた。
水炊き用のスープを注いだ鍋をカセットコンロの上に設置する。切った材料を次々に花を活けるように鍋の周りに並べる。
いざ並べてみるとどう考えても二人では食べきれない量だと分かる。
「鍋も大きいですけど、具も多すぎたみたいですね」
「なんなら明日も鍋でいいよ」
率先して白菜を入れながら先生が楽しそうにこっこり笑う。こん

なあどけない笑顔を見たのは初めてだった。鍋の持つ力は偉大だ。
コタツにカセットコンロと鍋。これだけで何となくほっとした気分になれるのは何故だろう。湯気越しに向かい合うと自然と笑いもこぼれてくる。
「鍋にソーセージ入れるの？」
シイタケの横に並んでいるソーセージに先生は驚いたようだった。
鍋には生まれ育った家庭独特の味がある。鍋にソーセージは我が家では欠かせない。鍋の様々な具からでる旨みを吸い込んだソーセージはお勧めの一品だ。
「入れたことないですか？おいしいんですよ。・・・ん？」
僕は先生の背後の窓の外に何か白いものが落ちたように見えた。一瞬のことで何が落ちてきたのかは判別できなかった。
「どうかした？」
先生が僕の目線を追って窓の外を振り返り、また僕に顔を戻した。
「今、上から何か白いものが落ちてきたような・・・」
僕は首をひねりながら答えた。
先生がコタツに足を突っ込んだまま身体を伸ばして窓を開けるとベランダの手すりに白い何かが引っかかっているのが見えた。辺りが真っ暗闇なのでその白い物体がまるでその場に浮いているようだった。
「何だろ？」
先生は寒そうに肩をすくめながら立ち上がってベランダへ身を乗り出し、その白い何かを指先に引っ掛けて手繰り寄せた。
先生が手にしているものは薄くピンクがかったブラジャーだった。花柄の模様があしらってあるようだが、ものがものだけに僕はそうしげしげと見るわけにはいかない気がした。悪いことはしていないのに何となく後ろめたさまで感じてしまう。
「Ｂの７８。ちょっと小さいな」
さすがは先生だ。このシチュエーションでも落ち着き払っている。
「上の階の洗濯物でしょうか」

先生は窓から外に出てベランダから少し身を乗り出して上の階を覗きこんだ。
「どうやらそうみたいだね。今日は風が強いから飛ばされてきたのかも」
「上の階は３０２号ですね」
３０２号は母子家庭だ。母親はまだ二十代前半に見える。まだ顔に幼さがあるような可愛らしい人で何も知らなければ彼女が一児の母だとはとても信じられないだろう。息子が三歳ほどの背格好だから、もしかすると十代で出産したのかもしれない。
僕は以前からその母子家庭に気になることがあった。母親が子供を毎日のように叱りつけているのだ。躾の一環なら僕も何とも思わないのだが、どうも彼女の声の響きには躾以上のものがあるような気がしてならない。夜中に子供の泣き叫ぶ声が辺り一面に響き渡ると僕は子供の身体を案じてしまう。
新聞紙上に「せっかん死」という文字が躍ることも最近は珍しいことではない。よその家庭のことに口出ししたくはないが、この寒空のベランダに泣きじゃくる幼児を閉じ込めたりしている様子は虐待という言葉を想像せざるを得ない。
「お母さんがよく子供を叱ってるよね」先生も泣き声は気にしているらしく真剣な顔で僕の言葉にゆっくり頷いた。「少し度が過ぎてる感じがするなぁ。お母さんの方に大分ストレスが溜まってる感じだね。育児ノイローゼなのかもしれない」
「育児ノイローゼ？」
「最近子供に暴力を振るう親が増えてるだろ？言っても聞かない子供にいらいらしてせっかんするんだってさ。自分に余裕が無いんだろうな。子供のすることだからとは思っててもも行動は逆になってしまう。優しく叱るんじゃなくて、暴力に頼って言うことを聞かせようとする。他人の俺たちには分からないことだけど、・・・きっと彼女の苦労も並大抵のものではないんだろうな」
僕と先生はブラジャーを目の前にして深くため息をついた。

果たしてこの女性の下着をどうしたらいいのだろうか。
「どうします？」
「この際だから天からの恵み物としてあり難くいただいとくか」
顔色一つ変えない先生の言葉は本心なのか冗談なのか分からない。
「そんなことしたらただの下着泥棒じゃないですか」
僕が慌てても先生はいたって平気だ。まるで僕が慌てるのを楽しんでいるようにさえ見える。
「じゃあ返しに行くしかないね」
「それはそうでしょう」
「そういうことなら、あとはよろしく」
先生は僕にブラジャーを放り投げた。
「ど、どうして僕なんですか」
慌ててブラジャーを押し返そうとしたが先生は受け取ってくれない。
「２０５号の俺が返しに行くのは変だろ。この部屋のベランダに落ちてきたんだからこの部屋の主である村石君が返しに行くのが筋ってもんだ」
先生の言うことは確かに理にかなっている。だけど、先生も一緒に居合わせたのだからついてきてくれても良いではないかと僕は目で訴えた。しかし先生は涼しい顔でカセットコンロの火加減を調整し野菜をどんどん鍋に入れている。腰に根が生えてしまったようで立ち上がろうという気などさらさらなさそうだ。
「鍋は俺が見てるから大丈夫」
先生はもう目さえも合わせてくれない。どうやら僕は先生に見捨てられたようだ。女性の下着など手にしたことのない僕はそのピンクの物体を手にしているだけでドキドキしてしまう。
「ベランダから投げ返すっていうのはどうですかね？」
先生は僕の言葉を無視して鍋の様子を眺めている。返事がないというのは否定されたということだ。
渋々僕は立ちあがった。僕の背中に、いってらっしゃい、と先生の

明るい声が届いた。間違いなく先生は僕の様子を楽しんでいるのだ。
しかしこの下着を僕はいったいどんな顔をして返せば良いのだろうか。
真面目くさっていてもおかしいような気がするが、下手に愛想笑いなど見せたら余計に悪い印象を与えるかもしれない。良心で届けているのに白い目で見られたらたまったものじゃない。あの金きり声で変態呼ばわりされたら果たして僕の手に負えるだろうか。警察を呼ばれでもしたら恥かしくて僕はもうこのマンションでは暮らしていけない。
畳み方も知らない女物の下着を手に僕は３０２号のドアの前でも暫く思案した。
首筋に容赦なく北風が吹きつける。お腹も空いてきた。こんなところでいつまでも突っ立っているわけにはいかない。僕はゆっくりチャイムを鳴らして覗き穴から僕の顔がよく見えるようにドアの正面に立った。耳を澄ますとドアの向こうに人の気配が近づいてきた。僕は息を殺して応答を待った。
「はい。・・・どちらさまですか？」
強い北風に紛れてしまいそうな女性のささやき声がドア越しに聞こえてくる。
「し、下の２０２号の者なんですが、見覚えのない物がベランダに落ちてたんで、ひょっ、ひょっとしたらこちらの洗濯物ではないかなって思って持ってきたんですけど」
清廉潔白をアピールするために出来るだけはきはきと答えようとしたのだが緊張して上手く話せたかどうか自信が無かった。証拠の品としてドアレンズにブラジャーを見せるかどうか迷ったがやめておいた。顔の前にブラジャーをぶら下げる自分の姿を想像するとあまりにも情けなかったからだ。今にも雪が降ってきそうなほどの寒さなのに極度の緊張で脇に汗がにじんでいく。
ゆっくりとドアが開いた。１５センチほど開いたドアのチェーンの向こうに突然の来客を訝る少し怯えた表情の女性が見えた。彼女

は事務職をイメージさせる襟の少し長い白のブラウスに落ち着いた感じの黒っぽいグレーのパンツスーツを着ていた。あまりくつろいでいた様子はない。仕事から戻ってきて間もない感じだ。彼女の足元には僕を睨み付けるような目で黒っぽいトレーナーを着た三、四歳の男の子が立っていた。母親を悪者から守るつもりなのであろうか。彼女は息子にすがるようにその手をしっかり握りしめている。

「これなんですけど」

今にも噛み付きそうな男の子にぎこちなく微笑みながら僕は淡いピンクのブラジャーを彼女の前に差し出した。

彼女は少し驚いた様子を見せ、僕の手から素早くブラジャーをもぎ取るように受け取ると何も言わず逃げるようにドアを閉めてしまった。バッターン、という大きな音が僕の鼓膜を痛いほど振動させる。ドア越しに男の子の「いいの？」というあどけない声がする。僕はあまりのあっけなさに寒さを忘れていた。

部屋に戻ると美味しそうに湯気を立ち上らせている鍋と僕からの報告を待つ先生がいた。

部屋の暖かさが心地よかった。僕は鍋を突付いている先生に事の次第を報告した。自分が受けた仕打ちを言葉にしていると徐々に顔が熱くなってくるのが分かる。

「やっぱり男の子は母親を守る気持ちが強いんだな」

先生は男の子の勇姿に妙に感動した様子だった。

「あんな閉め方しなくてもいいと思うんですけどね」

全てを話し終わって僕は先生に拗ねてみた。彼女からは礼の一つも言われるのが筋合いというものだ。それなのにあんな風に思いっきりドアを閉めるなんて。

「まあ仕方ないって。夜分に来訪者が自分の下着を持ってきたんだからびっくりしちゃったんだよ、きっと。女性の下着を手に出来たんだからこっちが礼を言っても良いぐらいじゃない？ベランダに落ちてきたブラジャーがきっかけで二人が出会う。面白いじゃん。こりゃ良い作品が書けほふはほ」

こんなことまで先生は官能小説のネタにしようとしているらしい。楽しそうに熱い豆腐を頬張っている先生が今日は何とも憎らしかった。

僕としてはどうにも納得がいかなかった。汗をかくほど緊張して届けてあげたのにあの仕打ちはない。あの男の子の目には僕は母親をいじめる悪者と映っていたかもしれない。今後階段ですれ違ったりしたときはどんな顔をしていれば良いのだろうか。こんなことなら先生が言ったように黙ってもらっておくべきだった。

鍋は良い具合に出来上がっていた。僕は緊張から解き放たれたせいか急に空腹を感じ鍋に向かって箸を伸ばした。そのとき僕の部屋の呼び鈴が鳴った。

「お客さんのようだね」

空耳であったらという淡い希望は先生の一言で霧散した。今度はどこかの誰かが僕の部屋を訪れたのだ。

どうもこのピンポーンというチャイム音には慣れない。いや、どんな音色でも誰かの来訪を知らせる音に慣れることはないのかもしれない。聞くたびに心臓が一気に縮む感じがする。友達も数えるほどしかいない大学生の僕の部屋を訪れる人に僕の生活に良い影響を与える人などほとんどいないと僕は知っている。榊原先生は例外中の例外なのだ。

あの母親も僕が押した呼び鈴を聞いたときにこんな胸苦しさを感じたのだろうか。母子家庭にもろくな来訪者はいないだろう。きっと僕よりも心細くてびくびくしながら玄関に出るのだろう。そう考えると少しは心のわだかまりも溶ける気がした。玄関に向かうと思いがけず女性の声が聞こえてきた。

「あの、上の３０２の橋本です」

慌ててドアを開ける。そこには先ほど僕が訪れた３０２号の母子が並んで立っていた。

彼女はジーパンにタートルネックのセーターを着ていた。先ほどの格好との違いからか少し幼くなったような印象だ。肩まで下ろし

ていた髪もポニーテールに括っていてどこかかわいらしさを感じる。
男の子は先ほどの挑戦的な眼差しではなく、はにかんだ様子で母親の太ももに抱きつき僕を見上げていた。彼の黒のトレーナーとスニーカーには同じテレビアニメのヒーローが描かれている。お気に入りのキャラクターなのだろう。
「先ほどはすみませんでした。お礼も言わずに。・・・その、あまり部屋に誰かが来るっていうのに慣れてなくて・・・。返していただいたものも、その、あんなもので・・・。動転してしまって何て言ったら良いのか分からず・・・」
恐縮しているのか何度も前髪を撫でつける様子がかわいらしい。彼女にまとわりついていた男の子は母親の様子が普段と違うのかきょとんとした表情で彼女の顔を見上げている。
「全然気になさらなくて結構ですよ」
そう言ったのは僕ではなかった。いつの間にか先生が僕の背後に立っていて彼女に向かって微笑みかけている。面白がっているのだろうか。きっとまた小説のネタを求めてのことだろう。今、先生は何を想像しているのだろうか。そう考えると少し怖かった。
「私はこの村石君の知り合いでこのマンションの２０５号に住んでる榊原です」
「初めまして、橋本です」
突然の挨拶に戸惑った様子を見せながら彼女は先生に会釈した。
「こんばんは」
先生は膝に手をやり目線を下げて男の子に挨拶をした。男の子は照れたように母親の後ろに回りこんで顔を半分覗かした。彼女が何回か促してようやく「こんばんは」と口の中で小さく返事した。
「お利口さんだね。もうご飯は食べた？」
子供の扱い方が分からない僕とは違って先生は妙に子供慣れしている。
「まだ」
彼は母親の顔を窺いながらそう答えた。

「そう。じゃあお腹空いたね」
先生はわざとらしく微笑み、顔を上げて母親の方を見た。
「ご飯はもうできてるんですか？」
「いえ、さっき帰ってきたばかりでまだこれからなんです」
「だったらどうかな。ね、村石君」先生は意味ありげに僕の名前を大きく呼んだ。先生の意図することが全く読めない。「一緒にどうですか？私と村石君も丁度今からご飯なんですよ。今日は鍋なんです」
「そんな、とんでもない。ご迷惑でしょう」
「そんなことはないですよ。ねえ村石君」
先生は僕の顔を見てにっこり笑った。
そういうことか。今日はやけに先生が積極的だ。余程面白い妄想が先生の頭の中に膨らんでいるのだろう。
小さな子の面倒をみるのは苦手だが慣れていないだけで迷惑というわけではない。材料も多いので二人増えたぐらいが丁度いい人数かもしれない。先生が望むなら僕はそれでも良かった。
「ええ、材料も多く買いすぎてしまって困っていたところですから。それに鍋は人数が多い方が楽しいですし」
僕は先生に合わせて母子を夕食に誘った。ブラジャーも何かの縁だと思えば上の階の人と仲良くなっておくのも良いかもしれない。それに何と言っても彼女はかわいかった。こんな美女と食事を一緒にできるなら単純に嬉しい。
それでも当然のごとく彼女はまごついていた。彼女にしてみれば今日の夕飯を下の階の人間と食べることになるとは今の今まで夢にも思っていなかっただろう。
「ここでご飯食べていかないかい？今から作ってたら遅くなっちゃうよねぇ？」
先生は慣れた口調で子供の方を懐柔しだした。どう返事したら良いのか分からないらしく彼は母親の顔と先生とを交互に見た。冷たい北風がドアを揺する。男の子は寒さに顔をしかめた。

「そこは寒いですから中へどうぞ」
僕の言葉に彼女は決心したようだ。しゃがみこんで彼に最後の決断を委ねた。
「りょう君。ここでご飯ごちそうになっていこっか？」
りょう君と呼ばれた彼が恥ずかしそうに小さく頷いたところで商談は成立した。
橋本朋子と名乗った母親は初めのうちは緊張した様子で口数も少なかったが、時間が経つにつれ少しずつ固さがなくなり僕たちと忌憚なく話すようになっていった。もともと明るい性格なのかもしれない。
先生と僕は彼女に軽く自己紹介をして夕食を毎晩共にするようになったいきさつを話した。先生のことだからほぼ初対面の彼女に対しても何も憚らずに官能小説家と名乗るかとも思ったが、作家ですと答えるに留まった。官能小説家と聞いたらどういう反応を示すだろうかと内心冷や冷やしていた僕はほっとした。
僕と先生は事前に相談していたわけではなかったが、互いに母子の境遇について触れようとはしなかった。彼女も自分の過去について深く語ることはなく、自分が二十四歳でりょう君が三歳だということと郵便局に勤めていることだけ話してくれた。
「榊原さんは関西のご出身ですか？」
「分かりますか？」
先生は驚いた様子でそう言った。僕も朋子さんの指摘に驚いていた。慣れてしまって分からないだけなのかもしれないが、今日の会話で先生の口調に関西方面のイントネーションを感じるところはなかったからだ。朋子さんの指摘で僕は先生と出会った日に先生が遣った関西訛りを思い出した。
朋子さんは一度少し首を傾げて考える素振りを見せたが小さく頷いた。
「仕事の関係でこちらに？」
朋子さんの質問に先生は照れたような笑いを浮かべた。僕は何気

なく鍋の中を突付きながら先生の言葉に耳を集中させた。先生が何故このマンションに暮らすようになったのかは前々から気になっていた。

「それもあるけど、・・・まあいろいろですよ」

全てが凝縮された「いろいろ」だった。本当に色々あったということだけは僕の心に強く伝わってきた。

「そうですね。いろいろありますよね」

朋子さんはそう言って何度もうなずいていた。

生きていれば人それぞれ「いろいろ」ある。僕だってその「いろいろ」を抱えて今を生きている。

三人は各自の「いろいろ」を頭の中に思い出しているかのように少しの間押し黙ったまま鍋を食べ続けた。

先生は子供好きのようだ。りょう君のために鍋から野菜や肉を取り分け、ふーふーと冷まして食べさせてやっている。りょう君が何かをこぼす度に朋子さんよりも素早くハンドタオルで汚れたコタツ布団を拭き、りょう君の口の周りを拭いてあげていた。りょう君はソーセージが気に入ったらしく取り皿の上で暴れるソーセージに悪戦苦闘しながらフォークでつき刺して何本も食べた。先生は野菜をあまり食べたがらないりょう君を優しく叱りソーセージをだしにして上手に野菜を食べさせていた。

よく見るとりょう君は靴下まで同じテレビアニメのキャラクターがプリントされたものを履いていた。余程このアニメが好きなのだろう。

僕は自分が三歳ぐらいのときの写真を思い浮かべた。その頃の写真に写っている僕は今のりょう君と同じように当時流行していたらしきテレビアニメのTシャツやらトレーナーやらを着ている。もう全く記憶にはないが、きっと母にねだって買ってもらったのだろう。子供服売り場であれがほしいと指差して母の袖を引っ張る自分が容易に想像できた。りょう君もきっとそうなのだと思うとりょう君が微笑ましく可愛らしく思えた。

大方鍋も食べ終わり、りょう君がうつらうつらとしてきたので朋子さんは慣れた手つきでりょう君を抱きかかえ丁寧に礼を述べて３０２号に帰っていった。

朋子さん母子がいなくなっても部屋には彼女たちの残していった温かい雰囲気が漂っていた。僕と先生は後片付けもほどほどにして缶ビールで乾杯した。僕はビールの味がまだよく分かっていないが鍋で火照った身体を潤す爽快感は堪能できた。先生は一気に半分ほど飲み干し美味しそうに息を漏らした。

「先生は子供好きなんですね」

「別にそういうわけじゃないよ。村石君ぐらいの年のころには本当に子供が苦手だったしね。ただ俺ももう三十二歳だからさ。昔のように子供の意味の分からない振る舞いにもいらいらすることはなくなったよ」

僕と先生は一回り年齢が離れている。しかし先生にそこまでの年齢差は感じない。一緒にビールを飲んでいると先生が頼りがいのある兄のような存在に思えてくる。

妹が一人いる長男の僕は昔から兄という存在に憧れがあった。長男として、誰かに頼るのではなく自分の力で生きていくことを小さい頃から求められてきた僕は兄がいたらと思うことが少なくなかった。頼るべき存在の父は物心ついた時から仕事で留守がちで、しかも2年ほど前に突然他界してしまった。もう頼りたくても頼りようがない。

会社社長の父は家族に厳しかった。父は三十代でそれまで勤めていた大手の食品会社を辞め、健康食品の会社を起こし当時のブームに乗って瞬く間に世間でもそこそこ名の知れた大手の企業にしてしまった。そんな有能な父は何事にもワンマン経営で会社でも家庭内でも何か自分の気に入らないことがあるとすぐにカッとなり、時に暴力も珍しくなかった。

家に帰ることの少ない父は家庭のことは全て母に任せ、家庭で何か問題が起こるとその度に母を叱りつけた。そんな時、僕はなんと

か母を守りたかったが、父の怒りが自分に向くことを考えると恐ろしくて足が前に出なかった。
父は僕に村石家の長男として、次期社長として大きすぎる期待を抱いているようだった。その期待に少しでも逆らうようなことを僕がしでかしてしまうと父からは常に罵声と鉄拳が飛んできた。優しい言葉など一切ない。だから僕は小学生のころから優等生を演じ父の前ではその表情に怯え、張り詰めた緊張感を胸に秘めながら指の先、言葉の端々に気を配って父の意にそぐわないことを回避するように生きてきた。頭ごなしに接してくる父のことが僕は嫌いだったが相手が親である以上嫌いだからと言って避けることのできる問題ではない。自分の感情は押し殺して父の顔色を窺いながら僕は毎日を生き延びてきた。
妹は僕や母に比べると自由奔放に育った。父から殴られることもなければ、人間性を否定されるようなことも言われない。妹が泣いているのを見るのは嬉しいはずがないが、いつもあっけらかんとしている彼女の境遇に嫉妬する気持ちが僕の中に育たないはずはなかった。
僕だって泣き言を言いたいときがある、親の目に怯えず自由を謳歌したい。僕は兄が欲しかった。男同士腹を割って話がしたい、そしてただ何も言わず愚痴を聞いて欲しい。僕は誰かに頼るということをしてみたかった。
思えば父以外の年上の男性と二人きりで言葉を交わすのは先生が初めてだ。先生のそばは何とも言えず心地よい。全てを許してくれそうな安心感が漂っている。幼いころから人の顔色を窺うのが習慣になっていた僕にとって常に微笑を浮かべているような先生は本心で何を考えているのか全く分からないのだが、僕はそのつかみ所のない懐の深さについついもたれかかって慕ってしまうのだ。
「離婚の原因は何だったんでしょうかね？」
僕はさっきからそればかりを考えていた。
家庭には家庭の事情がある。それは僕にも分かる。僕の家庭だっ

て事情だらけだった。しかしそれでも母は離婚しなかった。僕の目にも父の言い分があまりに身勝手に思えて何度も「離婚すれば」と真剣に母に持ち掛けたが母が首を縦に振ることはなかった。「子はかすがいなのよ」と母は口癖のように言った。「僕達がいるから離婚できないんだね」そのとき僕は目を伏せるしかなかった。自分が母の手枷足枷になっていると思うと僕はやりきれない気持ちだった。母の幸せを願う僕の存在そのものが母を身動きできなくしているのだ。しかし母は僕の言葉を優しく否定して言った。

「そうじゃないのよ。あなた達のような素晴らしい子供の父親だと思うからあの人とも暮らしていけるのよ」

母の言葉が今でも耳の奥に響いている。そんな風に考えられる母は誰よりも強いと思った。あんなにつらい思いをしている母が離婚しなかったのに、その離婚を選んだ朋子さんにはどんな原因があったのだろうかとどうしても思わずにはいられない。

「原因は分かんないけど、離婚をするにしろしないにしろそういう選択をしなくてはいけないというのはとてもつらいことだよね。彼女は週に何回か夜も仕事に出るみたいだよ。郵便局の給料だけじゃ生活が成り立たないんだろうね。離婚の選択をしたときに彼女が今の生活苦を想像していなかったとは思えない。それでも離婚を選んだ彼女の選択を俺たちが否定することなんかできないな」

先生はまるで僕の気持ちを見透かしているかのようだった。やはり先生は大人だと思った。先生の観察力には改めて恐れ入った。

「しかし、夜中に聞こえてくる金きり声が朋子さんの声だとはとても思えないなぁ」

先生は首を傾げて言った。僕も同感だった。

先ほどまで一緒に鍋をつつきあった朋子さんは美しく穏やかで慈愛に満ちた母親だった。彼女の今日の様子は毎晩のようにヒステリックなまでに声を荒げて子供を叱りつけている女性のイメージとはあまりにかけ離れている。あの声は別の部屋からだったのかもしれないと自分の耳を疑いたい気さえしてくる。

「昨日の晩もベランダに閉め出されてたよね」
何度言ったら分かるの、と叱りつける母親の声と、お母さんお母さん、と泣きじゃくる子供の声。夜の十一時を回り少しずつ明かりも消え始めた住宅地に聞いているのがつらくなるほどに響き渡っていた。
「僕も聞こえました。こんな時間に外に出さなくってもと思いましたよ」
「俺はあまりに不憫で外に出て見たんだよね」先生は二本目のビールのプルタブを開け一口飲むと俯いてしまった。「ベランダで泣いていたのは間違いなくパジャマ姿のりょう君だったよ。お母さん、お母さんって泣き叫んでるんだけど、部屋の中はカーテンまで閉められてた。カーテンの隙間から見えたのは間違いなく朋子さんだったな」
「そうですか」
先生が嘘を言っているはずがない。しかし僕はどうしてもあの金切り声をあげて子供を叱りつけている女性が先ほどりょう君の手を握り締めてドアの向こうから怯えるように僕を見ていた朋子さんだとは思えなかった。思いたくないというのが正直なところなのかもしれない。
僕は半分ほど残っていた缶ビールを無理やり飲み干した。ぬるくなったビールは炭酸が喉に痛いだけで全く美味しいと思わなかった。一口目に味わった爽快感などすっかり忘れてしまっていた。
先生が自分の部屋に戻ってしまうと僕の部屋は祭りの後だった。
過ぎた時間が楽しければ楽しいほど終わった後の寂寥感は心により大きな穴を穿つ。怖いほど静かな部屋の中でコタツの周りの座布団の上に寂しさという悪魔が形を成して見えるようだった。僕は思わずその場に座り込んでしまいそうで台所に戻って蛇口を思い切り捻った。勢い良く流れ出た水の柱がシンクを強く叩きつける。僕は痛いほど冷たい水に両手をさらしながら幸せの抜け殻のような大きな鍋を渾身の力を込めてゴシゴシと洗った。冷たさで徐々に指の感

覚がなくなっていったが僕は一心不乱にたわしを動かした。

## 4

今日もまただめだった。一体これで何回目になったのだろうか。そしてこんなことがあと何回続くのだろうか。あの面接官はいくつぐらいだろう。三十代だろうか。ひょっとすると二十代かもしれない。あんな若いやつらに好奇の目で嬲られるのはもうやめにしたい。

水野明彦はスーパーで二人分の惣菜を買い、家路をとぼとぼと肩を落として歩いていた。

今日の面接は社名も聞いたことのない、起業まだ間もない介護用品のメーカーだった。今まで明彦はある程度歴史のある企業に的を絞って採用面接を受けてきた。長い年月存続してきた会社にはそれだけ自分に同じぐらいの年齢の社員が多く、その分自分の価値を理解してくれる人がいるかもしれないと思っていたからだ。

明彦は同年代が相手ならまだまだ負ける気がしなかった。自慢ではないが今までいくつもの修羅場を潜り抜けてきたのだ。営業で培ってきた経験は伊達じゃない。体力的にも精神的にもスタミナなら自信がある。

しかしどこの企業の面接を受けても五十に手が届いてしまった人間を中途で雇う気はないようだった。コースから外れた中年を同情で雇うほどどこも景気は良くないのだ。給料は高く、パソコンは十分に使えず、新しいものを創造する力もない。それだったら給料が安くすむ高卒の人間を一から育てる方が利につながるというのは当然の発想だ。そのことは受けている明彦自身も当然理解している。理解はしているのだが、だからと言って自分と妻の口を糊していくためにはいつまでも就職しないわけにはいかなかった。

だから今回は考えた。ベンチャー企業の新しい発想を持った人間のほうが逆に自分の良さを理解してくれるのではないか、若さだけを売りにして勢いで社会の荒波に挑戦している彼らこそ熟年の経験と知識を求めるのではないだろうかと。

その会社の求人情報は三十歳までと謳っていた。そこを敢えて明彦は挑戦した。若さしか求めていない相手に自分を評価させてみたかったのだ。何となくだが、今回はうまくいくような気もしていた。

面接会場に行くと当然他の若い応募者から白い目で見られた。字が読めないのかとわざと明彦に聞こえるように揶揄する輩もいた。受付係の人間にあからさまに不快な顔をされても明彦は頭を下げまくって面接のチャンスをものにした。分かりましたよ、と相手が半ば呆れたように折れたとき、営業で培った根性はまだまだ捨てたものではない、と明彦の胸は久しぶりに高鳴り自分でも持て余すほどの熱を帯びた。見たか、と誰に言うでもなくひとりごちた。

しかし結果は惨憺たるものだった。もちろん淡い望みだったということは分かっている。面接を受けさせてもらっただけでも有難いと思うべきなのだろう。だが自分よりもはるかに若い人間に必要ないと評価されることは明彦に予想以上のダメージをもたらした。自分の半分ほどの人生しか経験していない人間に頭ごなしに要らないと言われることはこの上ない屈辱だった。

面接官は明彦に一分間の自己アピールをさせ、その場で間髪いれず不採用と宣告した。呆気にとられる明彦に面接官の一人が一枚の履歴書を手渡した。赤いボールペンで大きく「採用」と書かれたその履歴書の写真に明彦は目を疑った。そこには髪はぼさぼさでひげ面のTシャツ姿のむさくるしい男がいた。年齢は二十六歳と書いてあるがその写真の生気のない顔には二十代の若々しさは微塵も感じられなかった。

「何故この人が採用で、水野さんが不採用だと僕が判断したか分かる？」

その面接官はまるで友達に話しかけるような馴れ馴れしい口調で明彦に尋ねてきた。

明彦には全く理解不能だった。

履歴書の写真というものは面接官に対して第一印象を与える。限られた時間内での面接において優劣を付すにはその第一印象が大き

な意味を持つ。この履歴書の写真からは非常識、怠惰、傲慢といった悪いイメージしか窺い知れない。明彦が面接官なら面接を受けさせることなく不合格を決定しただろう。どうしてこんな写真を使うのかと説教の一つでもしてやりたいくらいだ。

明彦が答えに窮しているのを見て彼はその栗色の長い襟足をいじくりながら皮肉な笑みを浮かべた。

「水野さんってさ、あれでしょ？いわゆる昔ながらの『足を使ってかせぐ営業』ってやつの経験しかないんでしょ？これからはそんな経験なんか要らないんだよね。うちの会社は今後世界を相手にしようと思ってるわけ。足を棒にしてお得意先を何件も回ってせせこましく商品をアピールするなんて時代錯誤の手法はうちではやらないのよ。インターネットで情報を世界に配信して時刻に関係なく世界中の人から注文を受けるのがうちのやり方。この人はボランティアで世界各地を回って医療行為の補助を行ってきた。水野さんって海外に行ったことある？英語なんてしゃべれないでしょ。世界のニーズを理解し、しかも介護についての知識も彼は持ってる。失礼だけど水野さんを雇うメリットはうちにはないの。仮にこの人の半分の給料でも雇わないだろうな」

侍ならば刀に手を掛けただろうか、と明彦は思った。水野家は古くは武士の家系だった、と幼い頃祖母に聞いたことがある。武士は受けた恥辱屈辱を刀で返す。明彦は遠い祖先を思い描いた。このちゃらちゃらした面接官を一刀両断にし、すかさず自分の首筋に刃を立てる。それができない明彦にご先祖様は恥を知れと草場の陰で泣いているかもしれない。

しかし俺は武士ではない。リストラに遭った中年男は何の力も示せず我慢するだけだ。啖呵を切って椅子を蹴飛ばし会場を後にすれば少しは溜飲が下がるかとも思ったがそんなことをしても無職という苦境は改善されない。

明彦は面接官に深々と頭を下げて礼を言いきびきびとした動きで退室した。それが明彦なりの意地というものだった。

閉めたドアの向こうからは失笑が漏れ聞こえてきた。明彦は唇を噛締めて会場を後にした。
明彦はまだ太陽が見えるうちに家に帰るということがこんなに惨めだとは思っていなかった。お天道様に申し訳ないというわけでもないが、だらしない感じがして自分に嫌気がさしてくる。ばちが当たりそうな後ろめたい気持ちだ。しかし仕方がない。これも自分の人生なのだ。
明彦はこれから二ヶ月前に引っ越したマンションに帰り、買ってきた惣菜で妻と夕飯を済ませ、午後七時から道路の工事現場で交通整理をすることになっていた。最近めっきり冷え込んできてアスファルトの上での立ちっぱなしの仕事は腰に応えた。
冬の交通整理のつらさには明彦は内心驚いていた。天気が悪い日は最悪だ。本当に身体の芯から冷え切ってしまい、指先の感覚など全くなくなってしまう。まもなく冬の寒さはピークを迎えやがて雪も降ってくるだろう。もしこのまま職が見つからなければ雪の降る深夜に立ちっぱなしで交通整理だ。さすがに身体を壊してしまうかもしれない。
妻も最近顔色が優れない。自分が寝込んでしまっては誰が働きに出るというのか。そう思うとますます憂鬱になってくる。早く仕事を見つけなければ。しかし気持ちは焦ってもこの二ヶ月の間事態は何一つ好転していなかった。
「人でなしっ！」
明彦がマンションにさしかかったとき矢のような鋭い声が辺りに響き渡った。明彦は思わず顔を上げて声の方向を見た。聞き覚えのあるような女の声だと思った。
「誰が人でなしよ！あんた頭がおかしいんじゃないの？」
「まあまあ、二人とも落ち着いてくださいよ。ね、ゆっくり話し合えば分かるんだから」
どうやらマンションの一階で女性が二人言い争っているようだ。今にも相手に殴りかかろうとしている二人の女性の間に男性が二人

入り込んで必死になだめようとしている。
しかし一端火がついてしまった女性二人に冷静さを取り戻させるのは容易なことではない。男同士の喧嘩なら少しぐらい手荒に対応しても何とかなるが、間に入っている二人の若い男性も女性同士の喧嘩だけにどう収拾したら良いか分からない様子だ。
「夫を返しなさいよ。この、泥棒猫！」
「だから、あんたの亭主なんか知らないって言ってるじゃないのよ！何度言ったら分かるの！」
彼女たちは仲裁の二人を揉みくちゃにしながら互いに手を伸ばしとうとう相手の髪を鷲掴みにして引っ張り出した。四人が複雑に絡まりあって事態はますます混乱の度合いを深めていくようだった。間に入っている男性二人の必死に張り上げる声が空しく響く。
「抑えて、抑えてくださいっ！」
明彦は愕然とした。口論をしているうちの一人は妻の君江だったのだ。
こんな時間にまだパジャマ姿のままのその相手はどうやら隣の１０２号の住人らしい。最近マンションのゴミ捨て場で何度か立ち話をしたことがある三十代半ばの女性だ。
彼女には夜の商売をしている女性特有の怠惰な雰囲気がある。明彦も何度か仕事の接待でそういう場に足を踏み入れたことはあるが、何度行ってもどうも落ち着かなかった。自分が下戸だからということだけではなかった。金を使って女をはべらせ淫らな手を彼女たちに這わせながら浴びるように酒を飲み汚い言葉で下品に罵りあう男たち。そういう場にいると、「己の今の無様な姿を鏡に映して恥を知れ」と明彦は怒鳴りつけたくなるのだ。そしてそういう愚かな男たちにたかって金を搾り取るようなホステスという人種にもへどが出るような思いがする。この女も生理的に好きになれないと明彦は思っていた。
君江が人と喧嘩をしているところなど明彦は見たことがなかった。彼女は虫も殺せない性格の優しい人間なのだ。しかし二十年以上連

れ添った妻を見間違うはずがない。明彦はスーパーの袋を放り投げて駆け出し、仲裁している大学生ぐらいの男性に制されて手足をばたつかせている君江を後ろから抱きかかえた。
「何をやってるんだ？どうしたんだ、君江」
「あなた・・・。この女と一緒じゃなかったの？」
君江は自分を抱きすくめる明彦の顔を見て絵に書いたように分かりやすい驚きの表情を見せた。
「何を言ってるんだ。仕事に決まっているだろう」
「ほら御覧なさい。言いがかりを付けるのもいい加減にして頂戴よ。今度馬鹿なこと言い出したら本当に訴えるわよ」
１０２号の住人は髪を振り乱し鼻の穴を膨らませまるで仁王像のような憤怒の形相を浮かべている。しかし君江にはその怒りの声が全く聞こえていないようだ。
「ああ、あなた。良かったわ。私は心配で心配で」
「何を心配してたんだ」
「ううん。なんでもないの。あなたがいれば」
君江は目を閉じたかと思うと力無く明彦の胸にもたれかかった。
「君江！」
明彦は倒れ掛かる妻を両腕で抱きかかえた。君江は顔から完全に血の気が引いていて一人では立てない様子だった。
「夫婦漫才なら勝手にやってよね」
１０２号の住人は吐き捨てるように言うとそっぽを向いて部屋に戻って行った。明彦は彼女の背中に向かって、すみませんでした、と声をかけ、仲裁していてくれた二人の男性にも、ご迷惑をおかけしました、頭を下げた。
とりあえず妻を部屋に寝かせようと明彦は君江を抱えなおして玄関のドアを開いた。
このマンションに引っ越してから君江はどことなく様子が変だった。以前は常に物静かで穏やかな性格だったのだが、最近は思い込みが激しく、たわいのないことに過剰に反応するようになった。手

を滑らせてコップを割っただけで自分の愚かさを嘆き、死にたいとまで言う。その割れたコップの欠片で軽く指を切っただけなのに血が止まらないと青ざめる。

精神的に不安定なのだろうと思うのだが明彦には何もしてやれなかった。

明彦自身も自分の将来を憂えて何も手につかなくなるときがある。このまま当てもなく不毛な生活を死ぬまで続けていくのかと思うと心臓が締め付けられ耳障りなほど動悸を感じるのだ。正直明彦の方が慰めて欲しいぐらいだった。こんなときこそ妻にしっかりと内助の功を発揮して欲しかった。職を失って以降明彦のプライドはずたずただった。我が家にいるときぐらい心身ともにリラックスしたかった。

静かに眠る君江の顔をじっと見つめているといつの間にか皺が増えてしまったことに気付く。顔色が悪いせいか肌も潤いがなくカサカサとしているようだ。

苦労をかけているのだ。そう思うと明彦は自分の不甲斐なさが情けなく君江にわびたい気持ちになった。君江、すまない。思わず目頭が熱くなるが、客がいるのを思い出して明彦は大きく息を吸い込んで立ち上がった。

「先ほどは本当にご迷惑を掛けました」

明彦は静かに寝間の障子を閉めて二人の前に座った。

「様子はいかがですか？」

榊原と名乗った２０５号の住人が心配そうに尋ねてくれる。しかし明彦は複雑な気持ちだった。心配してくれるのは有難いが、妻は病人ではない。ただ疲れているだけだ。哀れみの響きを多分に含んだ言葉は許せなかった。

こう思ってしまうのは心が荒んでいるのかもしれないが今まで妻と二人きりで幸せに生活してきたのだ。心配される筋合いはない。それとも俺たち夫婦は他人が思わず同情を禁じえないというほどに落ちぶれてしまったということなのか。古ぼけたマンションの一室

で、最低限の家具調度しかない薄暗いこの部屋で砂を噛んでいるような冴えない顔をつき合わせていると気持ちはどんどん沈んでくる。
三十歳前後だろうか。この榊原という男もこんなまだ陽が出ている時間に家にいるということはまっとうな仕事をしているとは思えない。俺が彼ぐらいの年のころはそれこそ馬車馬のように外を駆けずり回り汗水流して血を吐くような思いで仕事をしていた。最近本当に理解の出来ないことが増えた。それだけ自分が時代に取り残されてしまっているということなのかもしれないが。
「顔色は良くないですが、静かに眠っています」
「そうですか」
ほっとしたような顔で村石という学生が明彦が淹れた茶を飲み始めた。
いかにも頼りなさそうな学生だ。目に力がない。明彦は自分が大学生だったころを思い出していた。あのころは誰にも夢があった。希望もあった。力強い目をしていた。こんなひょろっとした青二才に助けられている自分という存在が実に情けなく思えてくる。
「いったいどういういきさつであんなことになってしまったのでしょうか？」
明彦はずっとそのことが気になっていた。
君江の方から喧嘩を仕掛けたのだろうか。１０２号の女性の口ぶりだとどうやらそのようだが。しかし君江が誰かと口論するところなど結婚して二十年になるが初めて見る光景だった。実際目の当たりにしたのに未だに信じられない思いだった。
「私も事の始まりは分からないのですが、なにやら下の通路が騒がしいなと思って見てみたら、・・・そうしたら奥様と１０２号の方が、何と言うかその、取っ組み合いになっていましたので、慌てて止めに入ったという次第です」
榊原の説明に同調するように村石が頷いた。
「家内は大変大人しい性分で人と喧嘩するなどということは考えにくいのですが、原因は何だったのでしょうか？」

明彦の質問に二人は目を合わせて困ったような顔をした。原因が分からないという雰囲気ではない。分かってはいるが口にすべきかどうか躊躇っているという様子だった。やがて年長者の榊原の方が意を決したような表情で口を開いた。
「原因はどうもご主人のようです」
「私が？」
明彦は乗り出し気味に彼らの口元を窺っていた身体を思わず引いた。
全く身に覚えがなかった。君江が口論していた相手とはたまに朝に顔を合わせて、立ち話をすることはあるがそれ以上のことは何もない。お互いに名前も年齢も知らないのだ。何の接点もないのにどうして俺が原因なのだ。
「奥様はどうやら、その・・・」
先ほどから丁寧な口調の榊原がさらに慎重に言葉を選んでいる。明彦はまさかと思った。
「浮気を疑っていらっしゃるようです」
見かねた村石がはっきりと言い切った。
「私が、お隣さんとですか。馬鹿な。名前も知らないんですよ」
思わず言葉に力がこもる。冗談じゃない、と明彦は思った。しかし正面の二人はとても冗談を言っているとは思えない沈痛な面持ちで俯いている。明彦は怒りに頬を紅潮させた。どうしてそうなるのだ。俺が何をしたと言うのだ。
この二人にいらだっても仕方ない。しかしこの二人は火のないところに煙は立たないぐらいのことは思っているかもしれない。こんな見ず知らずの世間を知らなさそうな若い人間にあらぬ疑いを持たれるのは沽券にかかわる。
君江はいったいどうしてしまったんだ。妻の考えていることが全く分からない。明彦は言いようのない無力感に肩を落とした。
「たまにお見掛けするぐらいですが普段の奥様は上品で落ち着いた方だと思います。いつも清楚で立ち居振る舞いの美しい慎ましやか

な印象でした。ですが正直に申しまして私が見たところ今日は奥様の方が相手をしようとしないお隣の方に食って掛かっていたようです。私達が何を言っても聞いていただけませんでした」

たった二ヶ月の間にたまに見かけたぐらいで君江の性格を見抜く榊原の目は確かなようだ。明彦も半狂乱で罵り合っている妻を目撃してしまっている以上彼の言葉を信じないわけにはいかない。

「恥ずかしい話ですが、家内は最近精神的に参っているようで。事実、心ここにあらずということが多くなりました」

「失礼ですけど、その・・・更年期ということで」

榊原の言葉に明彦は力なく首を横に振った。

「それも無いとは言えませんが、原因は他にあるのです。・・・私のリストラが家内にかなりの心労を与えているようです」

明彦は自分が口にしている言葉に驚いていた。

どうしてこんな見ず知らずの赤の他人に、しかも世間の苦労も知らないような尻の青い若輩者に己の情けない境遇を話しているのだろうか。しかし明彦の意思に関係なく口から漏れる愚痴の奔流は留めようが無かった。

「私は某大手の食品メーカーに勤務しておりました。若いころから営業一筋で仕事に対し全身全霊を傾け、自慢ではありませんが営業成績も常にトップでした。そんな私に目を掛けてくれたのが当時の営業部長で、何かにつけて私を可愛がってくれました。私は部長を慕いその下で懸命に働き、その甲斐あって入社十年で課長になるという異例の出世をしました。その間部長もとんとん拍子で栄達され副社長になり次期社長の声も高まっていたのですが・・・」

物珍しそうな顔をして二人の若者が明彦の言葉を待っている。

明彦は胸が熱くなるのを感じた。誰かに話したかったのだ。話したくて仕方なかったのだ。しかし妻は精神的に参っていて夫の愚痴に付き合える余裕はない。夫婦の間には慰めとなる子供もいない。友人にも話す気などしない。彼らは上辺だけだ。表面上は同情しているが内心では他人事で、自分でなくて良かったと胸をなでおろし、

相手の不幸を面白がっているだけだ。
　結局今日の今日まで誰にも胸の内を明かすこと無く悶々と毎日を送っていたのだ。明彦は自分とは全く違う境遇の若い二人に導かれるように喋り続けた。
「ある日、私が指揮をとって手掛けていた製品が他社に出し抜かれてしまったのです。私達が売り出そうとしていたのは健康食品の一種で当時のブームを先取りして大幅に利益が伸びると確信していました。高額の開発費をつぎ込んではいましたが、近い将来社の主力商品に成長するだろうと誰もが期待していたのです。しかし我社が発売する2週間前にライバル社が全く同じものを突然発売したのです。どこからかうちの情報が漏れたとしか考えられませんでした。同じものを遅れて発売しても利益は上がりません。それどころかすでに出来上がっている商品は在庫となってしまい赤字は必至です。結局ライバル社の業績はうなぎ上りとなり、我が社は二番煎じの烙印を押されてライバル社の後塵を拝する格好になってしまったのです。私は責任をとらされて左遷されました。そしてさらに私を全面的にバックアップしていた副社長もポストを奪われ降格となりました」
「そんな・・・。どこから情報が漏れたかは分かったのですか？」
　村石が自分のことのように悔しがっている。興奮している彼を見て明彦は冷静さを取り戻していた。
「噂では・・・。しかしそんなことは後の祭りです。運がなかったと言うほかありませんが、私は負けたのです」
「それで良いんですか？自分のせいじゃないのに。どこかに訴えるとか出来ないんですか」
「民間企業の内部抗争です。こういう足の引っ張り合いは珍しいことではないんですよ。私も同じように失脚していった人間を何人も見ています。出る杭は打たれるということです」
「ですが、水野さんはまだ年齢的にお若いですよね。いくらでも挽回が利きそうですが」

興奮している村石とは対照的に榊原は落ち着き払っている。明彦は榊原に呼応するように冷静な視線を送った。
「確かに私はまだ若かった。チャンスがあれば今回のマイナスを補ってさらに上に行くこともできたでしょう。しかし・・・」
「さらに何か？」
まだ興奮冷めやらない村石が食ってかかってくる。
「副社長が急逝したのです。もう少しのところで頂点に立てたのに、その願いが叶わなかったショックが大きかったようです。あの方は年齢的にも最後のチャンスだったので・・・。私は中央に戻る足がかりを失いました。そして副社長の秘蔵っ子とも言うべき私の事を煙たがる取締役達は私をどんどん閑職に追い込んでいきました。いつの間にか私はリストラの対象になってしまい最後には人里はなれた地方の工場長として定年まで働くか、割り増しの退職金をもらって退職するかという選択を押し付けられたのです」
明彦がそこまで言うと若い二人は何も言葉に出来ずうなだれてしまった。明彦の心境も想像できず、掛ける言葉も見当たらないといった表情だ。
しかし明彦は妙に晴れやかな気持ちになっていた。今まで誰にも話すことが出来なかったことを話し、世間を知らない若い二人に傷だらけの惨めな自分の姿をさらすことで明彦は触り心地の悪い薄皮を脱ぎ捨てたような清々しさを手に入れた。それはべっとりと雨に濡れそぼった合羽を脱いで暖かく乾いた風に吹かれたときのような解放感だった。
障子の向こうから布団のこすれる音がした。君江が寝返りをうったのだろう。そのとき明彦は裏切り者の後ろめたさを感じた。自分だけ心を晴らしたことが気を違えてしまうほどに心労をかけた妻に対して申し訳ない気持ちにつながったのだ。
俺が君江に愚痴一つこぼさなかったように君江も俺に文句の一つも言うことはなかった。君江もどこかで心を裸にしておけば先ほどのように溜め込んだストレスを爆発させて他人と罵り合うことなど

なかったのかもしれない。
「君江にはつらい思いばかりさせてしまった」
明彦は懺悔の気持ちだった。教会で罪を独白する人の気持ちが分かるようだった。
「内側に溜め込んでしまわれたのかもしれませんね」
「その通りだと思います。・・・一番つらいのは君江なのです。帰る家まで無くなってしまったのですから」
「と、いいますと」
「彼女の母親は彼女が大学生の時に不慮の事故で他界していました。彼女にとって家族は父親だけになっていたのです」
「その父親というのが、まさか・・・」
榊原は全てを理解して明彦の目を見た。村石は何も分からない様子で絶句した榊原の横顔を眺めた。
「そうです。亡くなった副社長です。彼女は最愛の父を突然失い、さらに夫が出世街道から一転リストラの憂き目に合うのを目の当たりにしたのです」
社会の恐ろしさを知って暗い表情の二人は明彦と君江に何も言えず部屋を出て行った。外はいつの間にか日が没して闇に包まれている。北風が口笛を吹いている。今晩の冷え込みもかなり厳しそうだ。
玄関を出たところで二人がこのマンションの住人らしき若い女性と立ち話をしだしたのが聞こえてきた。
「あら。こちらの部屋の方とお知り合いなんですか？」
「あ、朋子さん、今お帰りですか。さっきね、ここの・・・痛っ」
「別に何でもないんだよ。少しお茶をいただいただけ。・・・りょう君、こんばんは」
「こんばんは」
「上手に返事が出来たねぇ。お利口さんだねぇ」
階段を上がって行く音が聞こえる。口止めはしなかったが榊原は察して他言しなかったようだ。明彦はほっと胸をなでおろした。彼らがいつ誰に喋るかは分からないが、今この場で黙っていてくれた

ことに感謝したかった。出来ればこのままずっと胸の内にしまっていて欲しいが・・・。君江を止めてくれたあの二人は当事者であり他人とは思えないところがあるが他の住人は全くの見ず知らずであり、そんな人達からリストラされた可愛そうなおじさん、更年期で頭が少しおかしくなった危険なおばさんだと思われるのは耐え難い。

障子を開けると君江がゆっくりと目を覚ました。

「気分はどうだ？」

「あなた。私・・・どうしたのかしら？・・・痛っ」

君江は眉間にしわを寄せこめかみに手を当てた。顔が紙のように白い。明彦は君江の横に腰を下ろし布団を掛けなおしてやった。

「少し疲れがたまっているんだ。今日はこのままゆっくり休みなさい」

「でも・・・今何時かしら。ご飯の準備をしなくちゃ」

「今、六時を過ぎたところだ。飯は気にしなくていい。スーパーで惣菜を買ってきたし勝手に食べるよ」

「そう、ごめんなさいね。お言葉に甘えて今日は休ませてもらおうかしら。何だか頭が割れるように痛いわ」

「ゆっくり休むといい。薬を飲んだ方が楽になるぞ。今、水を持ってくる」

明彦は立ち上がって台所に向かった。コップに水を汲んで君江のそばに戻ると君江は半身を起こし乱れた髪を撫で付けていた。明彦がコップを差し出すと君江は頭痛薬を二錠口に入れ水を全部飲み干した。

「あなた、もう一杯よろしいかしら。すごく喉が渇いているの」

明彦が頷いて水を運んでくると君江はまた美味しそうに一気に飲み干してしまった。

「そんなに飲んだら腹を下すぞ。体調が良くないときは冷たい水は身体に毒だからな。俺は七時からまた仕事だから暫くしたら行くけどお前はゆっくり休めよ」

君江は明彦の言葉に従って横になり、枕に頭を委ねた。顔に疲れがありありと出ている。今朝はこんな表情ではなかったはずだ。今日一日で一気に老け込んでしまった感じがする。明彦が布団を掛けなおしてやると君江が明彦の手を握った。

「あなた・・・私に何か隠し事してない？」

「何を隠してるって言うんだ。馬鹿なことを考えていないでゆっくり寝なさい」

「仕事って何の仕事なの？」

君江が冗談で言っているのでないことは目を見れば分かる。君江の目は明彦の言葉を待って怯えているようだった。

仕事のことは前にも説明してあるはずだ。昼間は職探しで夜に交通整理で働くと決めたじゃないか。君江は何をいまさら言い出すのか。

「本当に仕事なの？本当だったらあなたに今から出勤させるなんて許せないわ。あなた、もう課長じゃない。部下だってたくさんいるんでしょ？今度私から直接父にお願いするわ。誰か他の人にやらせてって」

明彦は目の前が暗くなるのを感じた。君江の顔がものすごく遠くに感じる。

何を言っているんだ。お前の父親は三年前に死んだじゃないか。課長だったのはもう十年も前のことだ。俺はリストラで仕事を辞めたんだ。

君江は急に堰を切ったように泣きだした。

「私、あなたが浮気をしているんじゃないかって心配なのよ。最近私を抱いてくれなくなったじゃない」

## 5

分かってるのよ。今日もそこで聴いているのね。

いけない人。私にはあなたの荒い息遣いや、抑えられない鼓動の高鳴りが手にとるように分かるのよ。もちろんその手がどこに向かって蠢いているのかもね。

仕方ないわ。聴かせてあげる。感じさせてあげるわ。私の声に感じて、そしてどんな景色を思い描いているのかつまびらかに教えて。

それにしてもこのおじさん、下手くそだわ。キスもろくに出来ないなんて。舌のからめ方も、吸い方もまるでなってないじゃない。それなのに自分だけ息を荒げて、興奮しきってるなんて。タバコ臭いだけで、こっちは全然盛り上がってこないのよ。髭ぐらいこまめに剃りなさいよ。この人、今までどういう生き方をしてきたのかしら。きっと玄人との関係しかなかったのね。だからこんな独りよがりのキスでもすまされてきたんだわ。ひょっとするとこの年まで結婚もしてないかもしれない。結婚していたとしても、こんなキスじゃ奥さんに逃げられちゃうわね。もうキスはいいからさっさと始めてちょうだい。

ごめんなさいね。こんな人が相手じゃ、今日は上手に鳴けないかもしれない。自信がないの。でも良かった、あなたがいてくれて。だってこの人との情事に集中しないで済むもの。あなたのことを考えていればこのおじさんの拙い動きでも我慢できそう。だから今日はあなたのために努力するわ。頑張って歌ってみせる。だからしっかり聴いていてね。

この人、胸の揉み方も知らないのかしら。もう、そんなに力を入れたら痛いに決まってるでしょ。乳首がつぶれちゃうわ。これじゃ、鳴き声どころか、悲鳴になっちゃう。

痛い。ちょっと、そんなに強く噛まないでよ。売り物の身体に少しでも傷をつけたら、たっぷり慰謝料払ってもらうんだから。

こういう人っているのよね。女は強引にされた方が喜ぶって思っている人。

そりゃあ、確かに興奮してくれれば多少は強引にされたり、痛い思いをさせられたりしてもその苦痛が身体を熱くすることだってあるわ。ＳＭだって嫌いじゃないのよ。全身を縛られて目隠しされたら、その分神経が過敏になっちゃって少しの刺激がたまらないほど気持ちよかったりする。でも今は全然だめ。だって興奮してるのはこのおじさんだけなんだもん。

どんなプレイでも雰囲気作りが大事なのよ。上手に雰囲気作ってくれる人が相手ならこっちもその気になるのに。

大体こういうセックスは子作りじゃなくてお互いの欲求を充たすことが目的なんだから楽しめなくちゃだめなのよ。こっちはお金をもらってるわけだから大きなことは言えないけど私を楽しませてくれたらその分相手を楽しませる自信はあるわ。二人の共同作業なんだから協力しあうことが大切なの。だからこんな雰囲気も何もないセックスは私だけじゃなくてお客さんももったいないのよ。やっぱり折角生身の肌を重ねるんだから満足して帰って欲しいじゃない。そのために私も頑張りたいから・・・、それにしてももう少し何とかならないのかしら。

知ってる。あなたは違うわよね。きっとあなたは私を楽しませてくれる。だっていつもそこで私の歌声を聴いていてくれるもの。私がどういうときに高く鳴くか、あなたは知ってる。私の事を知り尽くしているのよ。こんな今日限りの自分勝手なおじさんとは違うわ。

きっと今あなたはいらいらしてる。この人のテクじゃ私が高く鳴けないから。

まあまあ、今日のところは抑えてあげてよ。仕方ないわ。誰もが女を知っているわけじゃないもの。こういう人もいるのよ。可愛そうな男だと思って許してあげて。

私？私は大丈夫。これぐらい我慢できるわ。こう見えても私って尽くすタイプなの。母性本能も持っているわ。こういう可愛そうな

人には私からたっぷりサービスしてあげないと。
あっ。少し気持ちいいわ。その強情な髭が私のいい所に当たってるの。一番敏感なところに。これなら少し濡れちゃうかも。でも分かってるのかしら、このおじさん。ちょっとオーバーに鳴いて、腰も振ってあげるからしっかりポイントを抑えて勉強してね。もう少し続けてくれればきっと私も少しは興奮してくるのよ。
わざとらしいって？そりゃ、あなたにはそう聴こえても仕方ないわね。あなたにかかったら私だって嘘つけない。第一にそんな馬鹿なことはしないわ。あなたが相手なら完全に素の私を見せるつもり。
でもこのおじさんはここまでしてあげても分かってもらえるかどうか心配なのよね。現に中途半端に止めちゃってるじゃない。今は自分のモノを出すのに精一杯。ごつごつした手が少し震えてるみたい。自分でファスナーも下ろせないの？本当にがっかりしちゃうわね。もう、ちょっと貸しなさいよ。私が脱がせてあげるわ。はい。足を抜いて。ちょっとこけないでよ。しっかりつかまって。
足は引き締まってるのね。見かけによらず何か運動しているのね。筋肉質な人は嫌いじゃないわよ。
さて、問題のここはどうかしら？あらぁ。お世辞にも立派とは言えないわね。これじゃ奥まで届かないわ。まあ、いいわ。さっさと始めてちょうだい。
やっぱりだめだわ。ごめんね。私が悪いわけじゃないけど、あなたに対しては申し訳ない気持ちになってしまう。でも今日は鳴けない。だって全然気持ちよくないんだもの。入ってる感触もほとんどないし、奥まで届いてこない。もうこんなセックス早く終わらせたいわ。あなたに聴かせられるような声なんてまるっきり出てこないの。
あら？
何だかお腹が温かくなった。この白い物は何？終わったの？まさか、この歳で童貞じゃないんでしょう？いくらなんでも早過ぎない？でもタバコを吸いだしたってことは終わったってことよね。本当

に終わったのよね。あっさりし過ぎているけど一回は一回だからね。終わったならさっさと帰ってよ。まさか時間が余ったからもう一発だなんて言わないでよ。

しかしこの人普段はどういう生活してるのかしら。背は低い、足は短い、顔は不細工、挙句の果てにあれは早い。全く、どうしようもないわね。もう二度と来て欲しくないわ。

## 6

ここのところ見るからに先生は忙しい。
代役で雑誌に小説を載せて以降は次から次へと仕事が舞い込んできているようだ。余程ピンチヒッターの出来が良かったのだろう。先生の部屋にはひっきりなしに出版社の人が出没している。そのために先生があまり寝ていないことは一目瞭然だった。髪はぼさぼさ、服はよれよれ、いつも眠そうな顔で赤い目をこすりながらあくびを連発している。僕が作る夕食も時間が惜しいとばかりに一気にかきこみ食べ終えるとすぐに部屋に戻って行ってしまう。僕が作っていない朝、昼はしっかり食べているのだろうか。とてもそうは思えない。先生は日に日にやつれていっているように見える。こんな状態が続けば身体を壊してしまうのは明らかだけど、先生にとって今が一番大事な時期だと思うと僕は何も言えなかった。僕に出来ることは栄養たっぷりの夕食を作ることだけだった。
今日はニンニクたっぷりの餃子とうな丼と山芋のサラダの予定だ。食べ合わせにはこだわらず精力のつくものばかりを選んだ。これだけ食べればスタミナの補給は十分だ。先生には無理してでも全て口に入れてもらわなくてはいけない。
「村石君、居ますか？」
チャイムを鳴らし玄関で僕を呼ぶのは先生のようだ。腕時計を見ると4時前。夕食にはまだ早い。準備は今から始めようとしていたところだ。
しかし玄関を開けるとやはり先生が立っていた。心なしか先生の表情が明るい。目の周りの隈も無くなっている気がする。
「どうしたんですか？夕食にはまだ早いですよ」
「うん。今日は午前中に仕事が一段落ついてさ。小一時間ぐらい昼寝しようかと思って横になったら思わず爆睡しちゃったんだよね。で、さっき起きて、することないから遊びに来たわけ」

先生はいつもの先生に戻っていた。少し長めのきれいな髪、たれ気味の優しい目、さわやかな笑顔。
僕は先生を部屋に上げてホットミルクを出した。
熱めのホットミルクは先生のお気に入りだ。僕は熱を加えすぎることによって表面に出来る膜があまり好きではないのだが先生は全然気にしない。逆に膜の存在を楽しんでいるようで吹いたり吸ったりして遊んでいる。
「忙しかったみたいですね」
「おかげ様でここのところ立て続けに仕事が入っちゃって。この前のピンチヒッターで雑誌に載せた小説が好評だったみたいでさ」
「寝る暇もなさそうでしたもんね。目の周りに隈が出来てましたよ」
先生は苦笑して髪をかき上げた。指の隙間から黒い髪が雪崩れ落ちる。シャンプーの爽やかな香りが漂ってきそうだった。
「ホント、冗談じゃなく風呂もろくに入れなくてさ・・・。気がついたらキーボードに突っ伏したまま居眠りしてるってことが何回もあったなぁ。我ながらよく風邪ひかなかったと思うね」
「気が張ってたんでしょうね。逆に気が抜けた今が危ないですよ」
「そうそう。昼寝してから少し咽喉が痛いんだよね」
先生は真面目な顔で僕の言葉に頷いた。
一人暮らしの人間にとって風邪は馬鹿にできない大病だ。寝込んでしまっても誰もご飯を作ってくれない。買い物に行けなければ部屋の中の食料はなくなっていく。熱が出たところで氷枕を作るのが自分なら氷を入れ替えるのも自分だ。寝汗をかいて着替えるということを何度か繰り返していると洗濯物はたまっていくばかりでそのうち着るものが無くなってしまう。そして何よりも心細いのがいけない。このまま誰にも気づかれずに死んでいくのではないかと思うとあまりの寂しさに叫びそうになる。いつか死後冷たくなって肉も腐り始めたころに新聞の配達人がポストに溜まっている新聞を不審に思いドアに手を掛け部屋の中の僕の死体を発見するという惨憺たる光景を思い描いてしまったりもしてしまう。そんな死に方は嫌だ

と布団から這い出して誰かに電話を掛けようとするのだがそういうときに限って誰も捕まらないものなのだ。
よく考えるとこの部屋には薬らしいものが何一つない。風邪薬ぐらいは常備していた方が安心だと僕は思った。ついでに先生に咽喉飴を買ってこよう。
「この一週間で5本の短編を書いたんだけど、今度それが短編集の形で出版してもらえるらしいんだ。言うなれば処女作だよね。出来上がったら一冊あげるからさ、良かったら読んでみてよ」
先生の本が出版される。先生の本が日本中の書店に並ぶのだ。僕は改めて先生を尊敬の念をこめて見つめた。先生が何だか眩く見える。僕のような人間が先生と対等に話をしていても良いのだろうか。先生を近くに見ているだけでこそばゆいような快感を覚えてしまう。
「一応、『禁断の関係』ってのが全体を通してのテーマになってるんだ。親子に始まって教師と生徒、刑事と犯人、僧侶と尼僧、医者と患者・・・。一番書いてて面白かったのが教師と生徒かな。レズものにしたくって教師も生徒も女にして電車内で教師が生徒に触られるってのを描いたんだけど、これが我ながら自信作なんだよ」
思い出した。先生は官能小説家だった。濃い言葉をさらりと言ってのける先生のさわやかな口調が実にアンマッチだった。
「しかしよくそんなに次から次へとネタが思いつきますね」
僕はこれが不思議で仕方なった。
先生のように次から次へと作品を仕上げていく作家という人種の頭の中はいったいどうなっているのだろうか。書きたいことがどこからか無尽蔵に湧きあがってくるのだろうか。指が独自の思考回路を持ち、先生の脳とは無関係に勝手にキーボードを叩いているのかと思ってしまう。
「ちょっとついてきて」
先生はちょっと考え込んだ様子を見せると僕をどこかへ連れて行こうとした。一度決めると後には退かない先生はニヤニヤ笑いながら半ば強引に僕を外へ引っ張り出した。

先生が向かった先はサクラビルの三階だった。朋子さんとりょう君が住んでいる３０２号の前を通り過ぎ３０５号の前に先生は立ち止まった。

以前先生から３０５号の部屋には誰も住んでいないと聞いたことがあるのだが。

先生は口の前に人差し指を立てて僕に声を出さないように注意してからドアのノブの前に屈みこんだ。僕は先生が何をするのか想像もつかず、ただ言われたとおり物音を立てないように静かに先生の横にしゃがみこんだ。二人で声を押し殺していると何だか先生と秘密を共有しているような気がして僕はいったい何が始まるのかと先生の行動をわくわくして見守った。

先生がシャツの胸ポケットから取り出したのは二本の金属製の細い棒のようなものだった。先生はその二本の棒を素早くドアの鍵穴に差し込んだ。

ピッキングだ。

先生はこの３０５号の鍵を開けるつもりなのだ。いつになく真剣な眼差しで鍵穴を覗き込んだり音を聞いたりしている先生に無駄な動きはない。その慣れた手つきはこの方法での侵入が一度や二度ではないことを物語っている。

「ちょっと、先生」

思わず声が上ずりそうになる。これは犯罪ではないか。僕は慌てて前後左右に視線を飛ばし誰もいないことを確認した。

「止めましょうよ、先生。大体、どうしてピッキングなんか出来るんですか？」

先生は僕の問いを無視して作業を続けた。

僕は完全に怖気づいていた。当然ながら不法侵入の経験などない。たとえ空室であっても自分の部屋ではない以上見つかればただではすまないと思う。しかし何か言おうとすると先生はまた人差し指を立てて僕に沈黙を要求する。こうなると僕にできることは息を殺して誰か来ないか辺りを見回すことだけだ。

坂の中途にあるサクラビルの三階から見る景色はなかなかのものだ。眼下に開けた町並みが一望に見下ろせる。しかし見晴らしが良いということは自分の姿も周りから見やすいということだ。

坂を誰かが上ってくる。僕は咄嗟に姿勢を低くした。階下でドアが開き足音が聞こえてくる。僕はいたたまれなくなってさらに身を小さくした。嫌な汗が脇を伝う。

今３０２号の部屋のドアが開いたらどうしよう。朋子さんに見られたらこの状況を何と弁解したら良いのだろうか。もとより弁解の余地などあるはずがなかった。朋子さんは犯罪者或いは変質者を見る白い目で僕を軽蔑するだろう。そんなことになったらと思うと気が気じゃない。

ガチャリという小さく鈍い音に僕は振り返った。

先生は満足げに立ち上がりまるで自分の部屋に入るかのように澄ました顔でドアノブを捻った。軽いキィという錆付いた音とともに驚くほどわけもなく３０５号の鉄製のドアは開いた。

僕は先日回っていた回覧板に挟んであった「空き巣に注意」のチラシを思い出した。「まさか先生が・・・」と疑りながらもここまできたら先生について部屋に入るしかなかった。

部屋の中には何もなかった。空き部屋なので何もなくて当然なのだが、何一つ飾りのない部屋は見ていて気持ちが良かった。僕は二年前にサクラビルに引っ越してきたときのことを思い出した。

あのとき僕は何もない部屋の中央に座り周りを見回してどこに何を置こうかと空想に耽っていた。自分の好きな物を好きな場所に置き自分のためだけの空間を作れる喜びと真っ白いキャンパスに初めて色を落とすときのような緊張で妙に息苦しかった。真っ白いのは部屋だけではなかった。自分の生活そのものが「一人暮らし」という名の未知との遭遇だった。

先生はまた僕に喋らないように人差し指で合図をして壁のそばに座り僕を手招きした。僕が先生の側に腰を下ろすと先生は小声で話しかけてきた。

「ここが空き部屋だということは前にも話したから知ってるよね」
僕は声を出さずに頷いた。
どこからともなく御世辞にも上手とは言えない鈍いギターの音色が聞こえてくる。
「隣の３０３号は村石君と同じく学生さんで今部屋にいるようだから物音をあまり立てないように」
このマンションは壁が薄い。集中して耳を澄ませば隣の部屋の会話を聞きとることも出来るくらいだ。　聞こえてくるギターは３０３号の住人が弾いているのだろう。ならば少しくらいの物音では気付かないだろうが用心に越したことはない。かと言って物音を立てるようなものはこの部屋には何一つないのだが。
先生は黙って腕時計を見ている。僕が隣から覗きこむと先生は僕に腕時計を示した。
「今、４時半だね。あと３０分もしたら俺が何故ここに村石君を連れてきたか分かるよ」
そう言うと先生は壁にもたれ目を閉じて身動きしなくなった。どうやらこのまま時が来るのを待つ気らしい。
僕は先生に見放されたような気分で落ち着かず何もない部屋の隅々に目をやった。
暖房もない、カーペットも敷いてないこの部屋では吐く息も白い。こんなところで何を待てというのか。赤みがかった窓の外は一足飛びに暗くなってきている。冬の夕焼けははかない。あと３０分もしたら明かりのないこの部屋は闇に同化してしまうだろう。
１０分、１５分と過ぎていく。相変わらず先生は目を閉じたままだ。何が起こるんですか、と尋ねても先生は決まって微笑みを浮かべるだけで何も言ってはくれない。こちらが黙っていると先生は無表情に目を閉じたままなので眠ってしまったのかと不安になってくる。
３０３号からの相変わらずリズム感のないビートが僕の神経を少しずつ逆なでる。僕は所在無く立ち上がって窓の外を見下ろした。

三階から見る景色は二階の僕の部屋からのそれとは少し違って見えた。全てが少しずつ小さく見えて街の模型を見ているような感じがする。冬の寒さのせいだろうか。立ち並ぶ家々が白々しいほど人工的に見えて人の気配が感じられない。僕は背筋が寒くなった気がして再び先生の横に腰を下ろした。

部屋の中は加速度的に明るさを失い先生の輪郭がぼやけてきた。白い壁に先生の影が滲んでいる。

そのとき部屋の前の通路を歩く靴音が聞こえてきた。軽やかな足取りは若い女性を連想させる。その靴音は徐々に近くなり僕たちがいる３０５号を通り越して３０６号の前で止まった。鍵を開ける音に続きドアを開閉する金属音が聞こえてきた。僕の心臓は一気に高鳴った。先生がゆっくり目を開いた。いよいよ待ちに待ったものが現れたのだ。

「隣の３０６号は借主は居るけど、この部屋と同様誰も住んではいないんだ」

僕は先生の言った意味がよく分からなかった。誰も住んでいないのなら今の靴音は何だったのだろう。３０６号には何があるのだろうか。誰が何をするための部屋なのだろうか。

「不思議な話だろ？もう少しすれば分かってくるよ」

先生は僕の心理を見抜いてか、そう言うとまたすぐに目を閉じてしまった。先生は再び石像のように動かなくなった。

こうやって待つことが先生の作品のネタ作りに何の意味があるのだろうか。もう吐く息の白ささえ分からないほど部屋の中は闇に包まれてしまった。視界が遮られてくると余計に聴覚が敏感になる。僕は鈍いギターの響きの向こうに何かを聞きとろうと懸命に耳を澄ました。

まもなくまた靴音が聞こえてきた。今度はスニーカーだろうか。歩くリズムは早いが摺り足気味でだらしなく聞こえる。靴音はやはり３０６号の前で途絶え少し間をおいてドアをゆっくり３回ノックする音が聞こえてきた。

「また誰か来ましたよ」
僕は壁に近づけ耳をそばだてた。
スリッパのパタパタという音が聞こえる。
ドアの開く音。
「あら、随分と若いのね」
若い女性の声だ。
「だめですか？そっちだって高校生なんでしょ？大して変わらない」
後から訪ねてきたのは男性だ。声変わりはしているがどことなくまだ幼い感じがする。口調は大人ぶっているが中学生ぐらいかもしれない。女の方は高校生か。
「へー。真面目そうなのにね・・・。まあいいわ。どうぞ、中へ入って」
ドアが閉まる音がする。何やら後ろ暗い響きだった。
「それじゃ、いただくものを先にいただいておくわ。ちゃんと持ってきた？」
男と女。初対面の男が女に渡すもの。
「先生。ここって・・・」
先生のおぼろげな輪郭が小さく頷いたように見えた。
ここは売春宿。つまり先生は売春の現場を盗み聞きしてネタを得ていたのだ。同じマンションの一室で売春が行われていたのも驚きならそれを先生が知っていて盗み聞きをしていたのも驚きだった。
僕は胸が高鳴り手に汗が滲むのを感じた。それは売春という犯罪を知ってしまった緊張感からか、他人の情事というプライバシーを盗聴していることに対する罪悪感か、あるいは単純に性的な興奮なのか。いつの間にか３０３号からのギターの音色は僕の耳に入ってこなくなっていた。僕は３０６号に集中していた。
「三万円確かに。それじゃ始めよっか。ベッドがいい？それともお風呂？」
始まる。
女の慣れた口調が艶かしい。僕は生唾を飲んでカラカラに渇いた

喉を鳴らした。
　これ以上聞いてはいけない気がする。これは犯罪じゃないか。知らない方がいい。君子危うきに近寄らずだ。しかし僕の耳はどんなかすかな音も聞き逃がさないぐらい壁の向こうに奪われてしまっていた。あまりに興奮している自分が恥ずかしい。今ここでこの場を離れなければ自分がどうにかなってしまいそうだ。
「先生、僕失礼していいですか。こういうのはどうも・・・」
「折角だからもう少しどう？今出て行ってはばったり朋子さん達と会っちゃうかもしれないし」
　先生は聞かなきゃ損だとでも言いたげだ。確かにここで出て行って通路でばったり朋子さんと会ったら目を合わせられる自信がない。いつもならまもなく朋子さんが仕事から帰ってくる時間だ。もし朋子さんにこの階で何をしていたかを問い詰められたら僕は上手に嘘をつけるだろうか。
「じゃあキスしよっか」
　若い女が挨拶をするように言う。壁の向こうにいる二人のシルエットが浮かんで見えるような気がして僕は思わず目の前の壁に釘付けになった。３０６号の情景に虜になってしまっている自分を先生に悟られまいとすればするほど僕の息遣いは荒くなってしまう。他人がキスをするのをテレビでしか見たことがない僕は壁の向こうで行われていることに対してこんなに自分が興奮していることに驚き、そして羞恥した。
「３０６号は岡田という男性の名前で借りられてる。どうやらそいつが売春を仕切っているようだね。つまりまず女性を買いたい男性が岡田氏に仲介料の金を払う。岡田氏は女性に連絡してこの部屋にスタンバイさせる。岡田氏からここの住所を聞いた男性がこの部屋を訪れる。岡田氏は手広くやってて他にもこういう部屋を何件か借りているみたいだよ。今日の彼女の声は何回も聞いたことがある。高校生のようだけどベテランだ」
　先生は相変わらず怖いくらい冷静だ。聞き慣れているからだろう

か。それとも仕事柄これぐらいの刺激では興奮することはないのだろうか。
「キスぐらいでそんなに固くならないで。ここに座って」
ベッドを軽く叩く。すぐにベッドがきしむ音がした。女の言葉に男が素直にしたがったようだ。「童貞なの？」という問いかけに男は返事をしなかった。返事をしないのは認めたということだ。
「いくつ？」
「15」
「中3？受験シーズンじゃないの？」
「別にいいだろ」
中学三年生。僕も中学三年生の時はまだ童貞だったがセックスをしたいからと春を買うようなことは思いもよらなかった。多感な時期ではあったがセックスという行為や女性の身体に得体の知れない恐怖感も抱いていた。それだけ心も身体もまだ未発育だったのだろう。しかし彼はセックスがしたくてここに来た。中学生の頃の僕が持っていた恐怖心にはすでに打ち勝っているのだ。彼がませているのだろうか。それとも今の中学三年生はセックスを経験していて普通なのだろうか。
隣の部屋で行われていることが売春であり、売春は犯罪であるという意識は僕の中で完全に遠のいていた。もっと音を、もっと声をという欲望にいつの間にか僕は支配されていた。
「いいわ。力を抜いて。怖がらなくてもいいのよ。私が全部教えてあげる。ほら手を貸して」
僕は少年のまだ節くれだっていない白く頼りない手を想像した。色情に染まったその手はどこに向かっているのか。不器用に震えるその指は何を捉えたのか。
「ゆっくりよ」「焦らずに」「優しくね」と諭すような女の口調がまるで壁を隔ててこちら側にいる僕を老獪にリードするようでいらだたしい。時折上げる喘ぎ声まで計算づくのようで憎らしかった。生身の女に向かって初めて漕ぎ出した少年の必死の荒い息遣いが聞

こえてくる。
「痛いっ！ちょっと、痛いわ」
「あっ、ごめん」
「っもう。もっと優しくしてって言ってるでしょ」
突き放すような女の言葉で３０６号の熱されて右肩上がりに膨張していた空気が一気に冷えて萎んでいくのが分かる。沈黙が気まずい。
こうなると少年が可愛そうだった。人間には余裕が大事だと僕は痛感した。
「こういうケースは初めてだなぁ。いつもはおじさんが相手だから彼女も戸惑っているみたいだね」
中学生が童貞を捨てるために金を集めて娼婦に走るなんて聞いたことがない。売春とはやはり金を持ったおじ様が若い女を買うというのが一般的な構図なのだろう。
壁の向こうから金属がこすれる音がした。
「タバコ吸うの？」
「悪い？」
「・・・」
女の取り付く島のない返事が帰ってくる。言外の「あんたが下手だからいらいらしてくるのよ」という響きが文字となって目に見えるようだ。
「・・・でも未成年でしょ。良くないよ。健康にだって悪いし・・・」
「あんた、売春だって犯罪なのよ。そっちの方が罪が重いわ」
女の言うとおりだった。ここに来てタバコを咎める少年の発想は幼かった。
「きっと彼はタバコに対して悪いイメージを持ってるんだね。僕は絶対にタバコを吸わないって心に決めているような感じがする。きっと根は真面目な子なんだな」
言われてみれば僕もタバコに対して悪いイメージを持っている。

僕の父はチェーンスモーカーでそれこそまさに次から次へとタバコに火を付けた。父と一緒にいるとたちまち部屋の中は白い煙で充満し毒されていない空気は部屋の隅のほうに押しやられ僕や妹は吸うたびに咽喉に痞える空気を仕方なく甘受していた。父の側に行くといつもタバコ臭く、空気が悪い。顔をしかめて見せると不遜だと父に怒鳴りつけられるので平然を装っていたが内心はむせ返りたくなるほど辟易としていた。ヤニで黄色くなった父の歯を見るたびに寒気がして鳥肌が立ったものだ。だから僕は小さい頃からタバコだけは吸うまいと心に誓っていたのだ。この少年も似たような経験をしてきたのかもしれない。

「したいんでしょ。だったらしっかり私の言うとおりにしてよね」

女の口調が命令的になった。主導権は完全に女のものになっていた。

「返事は？」

「・・・わかったよ」

男というのは悲しいほど単純な動物だ。初めて女の裸を目の前にしながらお預けを喰らっている彼には抗う術はない。彼は自分が金を払って春を買っているという事実を忘れてしまったようだ。

「じゃあ、こっちへ来て足を舐めなさい」

「足を？」

「嫌なの？」

少年は言うことを聞くしかない。少年は女の足を爪の先から舐めることになるだろう。この女にはサディスティックな性癖があるのかもしれない。

「ほら、今度はこっちの足よ」

「はい」

「丁寧に舐めなさいよ」

女は女王様気分で完全に調子に乗っている。僕は金を払ってまでして女に跪き足を舐めさせられている少年の普段の生活を察してみた。

元来気の強い性格ではないのだろう。両親の言うことをよく聞いて、真面目に中学三年間学校に通い、夕方からは塾にも行き、有名高校、有名大学に進学するために毎日毎日机にしがみついて勉強しているのかもしれない。そんな受験勉強の最中に夜な夜などうしても下半身に神経が向いてしまう。目の前の問題に集中しなくてはいけないのだが分かっていても手が股間に伸びてしまう。友達が話している猥談が気になって仕方がない。そうしていつの間にか妄想だけが肥大して他の事が手につかないほどになってしまったのだろうか。

「もう舌が痛いよ」

余程熱心に舐めまわしているのだろう。唾液が枯れてしまうほど一心不乱に。しかし一度優位に立った女は許そうとはしない。

「つべこべ言わないの。ほら。今度は太腿を舐めさせてあげるわ」

女の官能的な口調が僕にその柔い大腿を思い浮かべさせる。白く芳しく瑞々しい脚。舌と唇に伝わるその弾力を想像して僕は初めて少年をうらやましく思った。今すぐこの壁を叩き割って少年にとって代わりたい。しかし僕は物音一つ立てられない。僕はただの聴衆でしかない。

「ねえ」

「ん？」

「フェラって知ってる？」

「・・・知ってる」

「して欲しい？」

女が絡みつくような甘い声を出す。僕はじれったい少年の答えを待った。

はいと返事をしろ、して欲しいと言え

僕は思わず声に出しそうになってぐっと咽喉に力を入れた。

そのとき反対の壁の方から子供の泣き声が聞こえてきた。どこかで聞いたことのある声。声は壁からではなかった。りょう君がベランダで泣いているのだった。

「何回言ったら分かるの！どうして一人でできないの。お母さんは忙しいのよっ！」
朋子さんが声を荒げてりょう君を叱っている。りょう君の泣き声は一段と大きくなった。
あの朋子さんがまるで叫ぶようにりょう君を叱責している姿はどうしても僕には想像できない。何かにとりつかれたような朋子さんの声は僕の知っている彼女とはまるで別人だった。
こんなに固くしちゃってるのね
おかあさん！おかあさん！
あっ、ごめんなさい。
何よ。もういっちゃったの？こんなに出しちゃって。ちょっとそこのティッシュで拭きなさいよ
りょう！静かにしなさい！
僕は急にいたたまれなくなってしまった。りょう君の泣き声と淫靡な嘆息とは相容れない。屠殺場で断末魔を聞きながらフランス料理を頬張る気にはなれないように僕はこの部屋にこれ以上いることができなかった。
「僕、帰ります」
僕は言うや否や部屋を後にした。先生は僕を止めようとも追いかけようともせず声もかけなかった。３０２号の前を僕は泥棒が逃げるように足音を消してこそこそと走った。
部屋に帰るや否や僕は空き腹にビールを注ぎこんだ。食道がカッと焼けた。
内側から濡れたトランクスが冷たかった。二人の会話に感じてしまったのだ。興奮が冷めていくにつれ傷ついた自尊心が顔をもたげ僕は何だか泣きたくなった。先生はまだあの情事に耳をそばだてているのだろう。僕には官能小説家の気持ちは分からない。
窓の外からは相変わらずりょう君の泣き声が聞こえる。僕は冷蔵庫にもたれてりょう君が泣き止むのを待った。今日はまた一段と寒い。三階の風はりょう君にとって身を切るような冷たさだろう。い

つまでもベランダで泣いていては身体が冷え切ってしまう。僕は早く朋子さんが優しく窓を開けてりょう君を暖かい部屋の中へ迎えてくれるよう願った。

しかし、ただ願うだけで何も出来なかった。

## 7

キャンパス内の食堂で昼食をとり、いつものように大講義室に向かうと人影はぽつぽつとしかなかった。まだ時間が早かったかと思ったが、そうではなかった。教壇のホワイトボードに赤色で大きく「本日の阿部教授の講義は休講」と書かれている。僕は立ち止まってその癖のある極端に右肩上がりの字を眺めながら考えた。

今日の講義はこれで終了してしまった。夕食を作るにはまだ早すぎる。買い物は昨日済ませてあるから必要ない。食堂に戻ってコーヒーでも飲み直そうか。図書館に行ってレポートを仕上げようか。それともこのまま講義室に残って昼寝でもするか。

結局僕は帰路に着くことにした。

今日は昨日までの寒さが嘘のような小春日和で柔らかい日差しを浴びながらとぼとぼと歩くのも気持ちがいい。南天の鈍い陽光が裸の木々の隙間を縫って僕の背中を包むようにじんわり脚を伸ばしている。キャンパス内にある緑地の日光に暖められた土を踏みしめるとこの季節特有の湿っぽい匂いがふんわりと立ち昇ってくる。真冬の底に眠る自然の微かな胎動を聞いたようだった。周りの冬枯れの景色が今日は薄化粧を施したようにほんのり色づいて見える。

僕はわざと摺り足気味に大きな歩幅で闊歩しその足音で時を刻んだ。こんな日に急いで帰るのはもったいない。時の流れに耳を澄ましてゆっくりと足を摺ればそれだけ時間がゆっくりと流れていく気がする。目を閉じれば空中遊泳しているように足先が軽い。僕は思わず地面に寝転がりたくなった。寝転がってあの太陽を抱きかかえてみたい。温かくて無邪気な太陽がしつこく僕の顔を舐めまわしてきたらどんなに気持ちいいだろう。

部屋に着いたのは午後2時過ぎだった。相変わらずインスタントだがコーヒーを淹れて僕は窓際に腰を下ろした。少し遠回りをして寄った本屋で買った二冊の本を鞄から取り出す。

一つは名も知らない外国の作家のものだ。有名な人なのかどうなのかさえも分からないが何となく買って欲しそうな顔をしているように見えたから手にとってみた。

もう一冊は先生の小説だ。本屋の隅にある官能小説の小さなスペースに先生の処女作品が何冊も積んであるのを見て僕は改めて先生が本当に作家だったことを実感した。街中の普通の本屋にこうして他の作家と同じように先生の本が並んでいるのを見ると僕の知っている先生が非現実的な幻のように思えてくる。本の裏表紙に載っている白黒の先生の写真は緊張していたのか表情の固い横顔を撮ったもので、どことなく普段の柔和な先生とは印象が違うように思った。

このまま売れっ子になってしまったら

先生はあの古くて薄汚いサクラビルから出て行ってしまうだろう。もう気軽に話しかけられるような人ではなくなって遥か遠い声も届かないところへ駆け上がっていってしまう。先生の処女作を喜ぶべきなのに僕は寂しいような苦い気持ちさえ味わいながらレジに向かった。店員のおばさんに代金を払うときに僕は作品の中味を思い出して、恥ずかしいと人間は本当に顔から火が出るものなのだと初めて知った。本の表紙は白衣を纏った半裸の女性がずるそうにこちらを見つめている絵だった。

一昨日先生は出来上がったばかりの短編集を僕にくれようとしたが僕は丁重に断った。「こういう内容のものは嫌い？」と先生は今にも泣き出しそうな顔で肩を落としたので僕は慌ててそれを否定した。

僕は本屋で先生の小説を買いたいと思ったのだ。本屋に並んでいるものを買うことで先生を作家として尊敬したかった。そしてその本に先生がサインしてくれたら何と素敵なことだろうか。僕がそう言うと先生は僕の気持ちを分かってくれたようだった。

「今のうちに格好いいサインを考えておくよ」

先生は今頃サインを一生懸命考えているだろうか。僕は本を裏返しにしてコタツの上に置いた。表紙の艶かしく舌を覗かせ流し目を

送ってくる半裸の女性がまるで僕を挑発しているようでどうにも落ち着かないのだ。
僕は窓を背にしてコーヒーを一口飲み未知の外国作品の一ページ目を開こうとした。
そのとき誰かが部屋の呼び鈴を鳴らした。しかも立て続けに二回。僕は瞬間的に時計を見た。二時半になろうとしている。この時間に先生が来ることはあまりない。先生が呼び鈴を鳴らすときは必ず一回、ゆっくりと鳴らす。僕は直感的に先生ではないと思った。
新聞か宗教の勧誘だろうか。とりあえず僕は座ったまま息を潜めてドアの向こうの物音に集中した。訪問者はもう一度呼び鈴を今度は続けざまに三回軽やかなリズムで鳴らした。小学生ぐらいの子が友達の家に遊びに来た時のような無邪気な鳴らし方だ。これは新聞屋ではない。妙に親近感を感じさせる。しかしこんな馴れ馴れしい人を僕は知らない。
僕はりょう君のことを思い出した。りょう君ならこういう鳴らし方をするかもしれない。だとすると朋子さんもいるのだろうか。僕は急いでドアの側まで行った。
ドアレンズから外を覗いて見たが誰も見えなかった。やはり新聞の勧誘だったのだろうか。胸の高鳴りが急速にしぼんでいく。冷静に考えれば朋子さんはこの時間は働いているはずだ。りょう君も保育園にいるだろう。こんな時間に遊びに来るはずがない。
僕は小さく息をついてドアに背を向けようとした。そのときまた鈴がなった。今度は一回。ゆっくりと。
先生がふざけているのだろうか。作品が出版されて少し浮かれているのかもしれない。僕は鍵を外してゆっくりドアを開けた。すると向こうから不意に誰かがドアを引いた。結果、ノブを掴んでいた僕は体勢を崩して靴も履けないままドアの外に投げ出されてしまった。コンクリートの堅く冷たい感触が靴下を通して伝わってきた。慌てて何かに掴まろうと手をばたつかせている僕を見て誰かが笑っている。

「由紀！」
笑っているのは妹の由紀だった。高校の帰りなのか、制服に水色のダッフルコートを着ていた。コートの裾からまぶしいほど白い脚が伸びている。いまどきの高校生らしくこの季節にもかかわらずミニスカートに紺色のハイソックスだ。寒さのせいだろう。よく見ると太腿がうっすら紅い。
「どうしたんだ、急に？」
僕は許してもいないのに「寒い、寒い」と勝手に部屋に上がっていく妹の背中を追った。
「やっぱりね。想像どおりだわ」
僕の質問は完全に無視してバーバリーチェックのマフラーを首から外しながら由紀は部屋の中を見回して大きく頷いている。コートを脱ぐと制服のブレザー越しに豊かな胸のふくらみが分かる。ちょっと見ないうちに由紀の身体は大人の女性のものになっていた。
ふと僕は先日の３０５号での出来事を思い出してしまう。あのときの娼婦も確か高校生だった。由紀と同じ高校生が自分の性を売り物にして男から金をせびり取っている。いまどきの高校生は精神的な面はわからないが身体はもう立派な大人になっているのだ。僕は久しぶりに会った由紀に女を感じてしまい思わず目を反らしてコタツに入った。
「何が想像どおりなんだよ」
「殺風景な部屋。女っ気が全然ないのね」
「ほっとけよ」
こいつはいったい何をしにきたんだろうか。まさか母に頼まれて晩御飯の差し入れを持ってきたわけでもないだろう。由紀はこちらの詮索など知らん顔でコタツの中に脚を伸ばして一息ついている。
「お母さん、お兄ちゃんがいなくて寂しそうよ。会社の方も上手くいってないみたいだし。早く卒業して帰ってきなよ」
「無茶言うな」
こちらがいくら頑張ったところで大学というところは四年が経た

ないと単位がそろわないシステムになっていることぐらい由紀にもわかるだろうに。しかし母のことを引き合いに出されると僕はそれ以上強く言えなかった。

母は今、父が遺した会社の社長をしている。父は生前、僕に社長職を継がせることを公言していたし、母もそのつもりだったようで父が急逝すると母は僕に社長職に就くように説得したが、高校生の僕は固辞した。

父は当然知らないままだったが僕は会社の社長になんかなりたくない。好きでもない父の跡を継ぐなんてまっぴらだと思っている。それにいきなり高校生の僕に大手企業の社長を任せると言われても土台無理な話しだ。母は毎日顔を合わすたびに僕を説得したが、何とか大学を卒業するまでは自由にさせてくれという僕の希望に渋々承知した。しかし村石家以外の人間に会社を任せることを驚くほど頑なに拒絶した母は自分が父の跡を継ぐことを決意したのだった。

父は愛人宅で死んだ。死ぬときまで身勝手な父の存命中には何度も離婚を考えたであろう母がどうしてあれほど父が遺した社長の椅子にこだわるのか僕には分からない。今でも僕は会社のことは会社のことを良く知っている人に任せれば良いと思うのだがどうしても母は肯んじないのだ。

母は思いのほか簡単に社長に就任した。元々父が亡くなる前から母も肩書きだけは取締役だったし、母名義の株も少なからずあったので父名義の株も合わせると取締役会や株主総会で母に対抗できる人間は誰もいなかったようだ。父の社長職を僕が継ぐということは、生前から父が口を酸っぱくして言っていたので、社内の重役連中にとっては高校生のガキが一応大人の女性になったということで、少しホッとしたというところかもしれない。

しかし会社の経営というものは当たり前のことだが簡単ではないようだ。世間は不況だし、ライバル社は軒並み増えてきて生存競争は激化する一方だ。父には従っていた重役達も母に対しては態度が違うということも耳にする。父の死があまりにも急だったために今

は静かにしているだけで、隙あらば社長の座を奪ってやろうと思っている人間は少なくないのだろう。妹に言われなくても母が相当苦労しているということは風の便りで十分分かる。そんなことは今に始まった事ではないのだ。

「で、何しに来たんだよ」

「理由なんて何だっていいじゃない。可愛い妹が会いに来てあげたんだから少しは喜んでくれてもいいんじゃない？」

由紀が少し拗ねたような甘えた顔つきになる。僕は妹のこの表情を何度も見てきた。僕には妹の考えていることが手にとるように分かった。

「金か？」

返事がない。図星のようだ。母のことは話の切り出しに過ぎないのだ。こちらの弱みに付け込んでくる妹のやり方は熟知している。

「お前にやる金なんてないぞ。こっちは生きていくだけで精一杯なんだから」

「そんなこと言わないで。お願い、お兄ちゃん。5万、いや3万でいいの。友達とスキー旅行に行きたいの。頂戴なんて言わないわ。少しの間だけ貸して」

由紀は僕に向かって手を合わせてねだってくる。無論「少しの間貸してほしい」ということは「半永久的に返さない」ということだ。

由紀が僕に金をせびるのは今までにも何度もあった。こいつは昔から誰に対しても甘え上手で、病的なほど厳格だった父も由紀のおねだりにはいつも目尻を垂らしていた。手を合わせ、頭を下げて、最後には足元にすがりついてでも金をせびってくる。二人きりの兄妹なので今まではある程度は要求に応えてきてやったつもりだがもう僕は妹にはびた一文渡すつもりはなかった。由紀だってバイトをして稼いでいるのだ。その給料だけで十分楽しい高校生活が送れるはずだ。

僕はまたあの売春婦を思い出した。彼女はどうして身体を売ってまでして金が欲しいのか。一度贅沢を知ってしまうとそれまでの生

活にはなかなか戻れなくなってしまうと言う。豪奢な暮らしに首までどっぷり浸かって彼女は金がなくては生きていけなくなっているのかもしれない。

「3万なんて余裕あるかよ。大体ボードもウェアも最近買ったばかりだろ。何でそんなに金が要るんだよ」

高校生のうちから月に何万もの金を自分の自由にしていては余程自分で自分を規律できないと瞬く間に金に溺れてしまう。由紀には分別のある人間になってもらいたい。意識しすぎかもしれないが僕が由紀に金を渡すことでこれから由紀が転落の一途を辿らないとも言い切れない。ここはたった一人の兄として、父親の代わりとして由紀のために心を鬼にしなくてはいけないと僕は思った。

「最近じゃないわ！三年も前よ。中学生の頃のウェアなんてもう着れないわ」

「少しは我慢しろよ。バイトしてるんだろ。その金で買えばいいじゃないか」

「バイト代は毎日の生活費で消えちゃうの。・・・ねえ、一生のお願い。今回だけ」

何と軽い「一生」なのだろう。由紀の「今回だけ」は耳にタコが出来る。

「どんな生活してたら生活費で消えちゃうんだよ。俺みたいに少しは質素な暮らしを経験してみろよ」

自分で言うのもなんだが、僕は質素な暮らしをしていると思う。御世辞にも贅沢とは言えない。母からの仕送りは必要最低限にしてもらっている。バイトをすればもう少し楽な暮らしが出来るかもしれないが、そんな時間があったら本を読んでいたい。大学の授業はとれる限りとっているので、そのために毎日レポートを書いたり予復習をしたりしていると、あっという間に時間は過ぎていってしまうのだ。先生に食事代をもらってはいるがこれはどうしても使う気がしない。儲けるために料理をしているわけではないし、何だか先生にもらったお金を使うのはもったいない気がするのだ。

「嘘。何て言ったってお兄ちゃんは御曹司で次期社長なんだから、お母さんからお金一杯もらってるんでしょ。質素なはずないじゃん」
「どんだけたかってもだめなものはだめ。諦めろ」
妹の要求をここまで頑なに断ったことはない。さすがの由紀も断念したのだろうか。少し口を尖らして口惜しそうに僕を見つめている。
「けち」
「何とでも言え」
「あーあ、こうなったら援交でもするしかないか」
僕はカッと頭に血が昇り目を見開いた。
「由紀！お前・・・」
「じ、冗談よ。そんなことするわけないでしょ」
由紀は僕の剣幕にびっくりした様子で慌てて手を振り大仰に否定した。僕は何とか冷静さを装いつつ由紀を睨みつけ精一杯の威厳を誇示した。由紀は何故か目を合わせようとしない。
「お前、そんなことしている友達でもいるのか？」
「そんなことって？」
由紀は完全にしらばくれて左手を顔の側で開いて爪を見ている。全ての爪にはピンク色のマニキュアが淡く光っていた。よく見れば眉は形を整え描き足されている。うっすら化粧もしているようだ。頬の辺りも少し紅い。耳には花をあしらった小さなピアスをしている。由紀はもう自分が女であることを知っているのだ。
僕は不安だった。女である以上由紀が女としての美しさを求め、女性の艶やかさに憧れ、色香を身に付けていくのは仕方のないことだと分かっている。分かってはいるのだが、由紀が大人の女性として歩きだそうとしているのを目の当たりにすると僕は何故か落ち着かない気がする。
「その・・・援助交際してる友達がいたりするのか？」
こういうことは実の妹には聞きづらい。家族の中では得てして性的な話題は暗黙の了解でタブーになる。言っている自分が妙に照れ

てしまい、兄としての威厳が保てなくなってしまう。
「さあ、どうでしょう？」
由紀は張りぼての威厳で照れをひた隠しにしている兄をおちゃらかしているようだった。僕の問いを無視してコタツの上のものを次々に手にとって弄んでいる。これ以上何を聞いても答えないつもりらしい。
「お兄ちゃん、こんなの聞いてるの？印象ないわぁ」
由紀が手にしているのはアメリカのハードロックグループのＣＤだ。妹の中では僕とハードロックは結びつかないらしい。毎朝目覚まし代わりに聞いてると言ったらさぞかし驚くだろう。
「何これ！」
由紀は一冊の本を手にして歓声を上げた。見ると先ほど買ってきた先生の本だ。つまり由紀は官能小説を手にしていることになる。僕はさっと血の気が引いていくのを感じた。由紀はにたにた笑いながら表紙の絵を食い入るように見つめている。
「違う！それは、違うんだ」
「何が違うの？」
由紀は慌てる僕を意地悪そうな目で見つめた。金棒を持った鬼のように自信満々の顔だ。僕は無駄と知りつつ抵抗を試みた。
「知り合いの人が書いたものなんだ。知ってる人が本を出したんだから買わなきゃまずいだろ？」
「へぇー、こういうエッチな本を書く友達がいるんだぁ」
「そういう言い方するなよ」
「お兄ちゃんもこういう本を読むんだね」
由紀は笑うのをやめ、神妙な顔つきになって頷きながらパラパラとページを繰っている。僕のイメージとこの手の本はハードロック以上に由紀の中では相容れないものらしい。俺だって男だからな、などと妹に対して開き直るのも何か違う気がする。僕はこの状況をどうやって打破するか必死に頭を巡らせた。
「『彼女はゆっくりと自分の茂みの向こうに手を這わせていった。

一番敏感な部分を自ら露わにして俺に示そうとしている』、だって
ー。お兄ちゃん、エッチ」
「返せよ！」
僕が手を伸ばすと由紀は背中に本を隠した。
「返して欲しい？」
由紀の目が怪しく光る。次に何を言うかは兄の僕でなくても分か
りそうだ。
ピンポーン。またしても玄関のチャイムが鳴る。僕の考えが正解
だと言わんばかりのタイミングだ。
「誰か来た！」
何故か由紀が嬉しそうに立ち上がった。
おそらく先生だろう。今日はいつもよりも少し早い登場だ。あま
り先生に妹を見られたくはなかったが仕方ない。何を思ったのか由
紀は僕に先んじて小走りでドアに向かった。
「はーい」
由紀がドアに手を伸ばそうとしている。
「おい。何でお前が出るんだよ」
「いいじゃない、兄妹なんだから」
言うが早いか由紀は鍵を外しドアを開けた。
そこには案の定先生が立っていて、ポカーンと口を開けて僕と妹
を見比べている。
「お取り込み中？」
どういう意味ですか、と問い返したくなる。先生はきっとまた淫
らな想像をしているに違いない。
「初めまして。いつも兄がお世話になっています」
由紀がしおらしく先生に向かってお辞儀をする。何を勝手に挨拶
しているんだ。
「妹さん？」
「まあ、そんなものです」
仕方なく僕は先生に妹を紹介した。

「そんなものって何よ」
由紀は口を尖らせて睨むように僕を見上げた。その光景に先生がにこにこと微笑んでいる。
「榊原と言います。お兄さんにはいつもお世話になっております」
「村石由紀です」
先生も由紀に付き合ってお辞儀をしている。
何となく居心地が悪い。家族を知人に見られるのは恥ずかしいものだ。
「あれ？その本は」
「あっ、これは兄が買ってきたエッチな本です。兄もこっそりこういう本を読んでるんですよぉ」
妹は恥も外聞もない。初対面の男性に臆面もなく大きな声で、エッチな本です、と言い切ってしまう。こんな娘を持つ母はきっと大変だろう。
「余計なこと言うなよ。お前、もう帰れよ」
僕は妹を小突いた。由紀が不愉快そうに眉根を顰める。
何とかして妹を帰らさないと。これ以上由紀が同席していると何を言われるか分からない。これも由紀の作戦なのかもしれないが。
「本当に買ってくれたんだね」
先生の言葉に僕は小さく頷いた。嬉しそうに微笑んでいる先生と僕を妹は交互に見つめた。
「あっ、この人がこのエッチな本を書いた人なの？爽やかな感じなのに、人は見かけによらないわぁ」
「お前、失礼だろ」
僕は慌てて先生に謝った。出来の悪い妹を持つと本当に困る。後でもう一度しっかり謝っておかないと。
「正直で面白い妹さんだね」
「よく言われます」
由紀は頭を掻いてにんまりと笑った。さすがに先生は全く機嫌を損ねることなく楽しそうに微笑んで由紀を見つめていた。

僕は背筋が寒くなるのを感じた。今、先生はあの微笑の裏で何を考えているのだろう。先生は人を見るとき必ずその人の性生活について妄想している。今もきっと由紀の淫らな姿を想像しているに違いない。僕は先生に「ちょっと」と目配せをして由紀を部屋の奥に引っ張った。

「もう、お前帰れよ。これやるから」

僕は財布の中からなけなしの福沢諭吉を一枚取り出して由紀に握らせた。

「これだけ？」

由紀は不満そうに財布の中を覗きこんだ。財布の中にはもう数千円しか入っていない。由紀が思っているような贅沢な暮らしなど僕は無縁なのだ。由紀は諦めたようでブレザーの胸ポケットに一万円札をねじ込んでコートとマフラーを身に付けた。

「それじゃ、帰るね」

由紀は僕に手を振ると先生にお辞儀してさっさと帰っていった。冗談ではなく金をせびりに来ただけなのだ。何とドライな妹なのだろう。本当に血のつながった妹なのだろうかと不安になる。

「可愛らしい妹さんだね。村石君を慕ってるのがよく分かったよ」

「生意気なだけですよ。今日も金をせびりに来たんです」

僕はため息交じりでそう答えた。

「お金なら俺が貸してあげたのに・・・」

先生がまた良からぬことを考えている。僕の妹まで作品のネタにするつもりなのだろうか。

「先生！」

「冗談だよ。冗談」

全く冗談には思えない。

僕は夕食の準備にとりかかった。野菜を冷蔵庫から取り出し蛇口をひねる。水が勢いよく飛び出してステンレスの流しを叩きつける。僕はふと妹の言葉を思い出した。

母が寂しがっている。僕の帰りを待っている。

大学に入って一人暮らしを始めてから電話は何度かしたことがあるが実家に帰ったことは一度もない。電車で小一時間もすればすぐに実家なのだが僕の足はどうしてもそちらには向かなかった。したがって、もう二年近く母の顔を見ていないことになる。僕が帰らない理由は簡単だ。母の顔を見ると決心が揺らぐと分かっているからだ。

幼い頃から絶対的な父の教育方針の下、父の顔色ばかりを窺って生きてきた僕には自分の意思など存在しなかった。高校を卒業したら父の会社に入り、いずれ父の跡を継いで社長になる。それ以外に僕の存在価値は無いかのごとく父は振舞った。僕もそれ以外に考えることが出来なくなっていたし考える必要もなかった。父のロボットのような僕は、父の希望を叶えるためというよりも父の制裁から逃れるために父の意に反するような行動や結果を無くすためだけに専念した。年齢を重ねることによって僕の内部に細々と根を張り出した自我もそれまでの強力な刷り込みの前には無力だった。高校を卒業したらもう後には退けないとは分かっていたが、僕は高校に入学しても相変わらず父の目を正面に見ることすら出来ない従順なロボットだった。

その父が急逝して僕は飼い主を失った犬のようになすすべなく立ちすくんだ。手かせ足かせが無くなった自由の身と言うよりは、糸の切れた凧のように、あるいは大海原に漂う枯木のように自分が何とも不安定な存在に思えた。そうして僕は決心した。初めて勇気を奮い起こして自分の欲求を抱いたのだ。

何とか母を説得して僕は大学に入学し、その四年間に自分の人生の全てを賭けるつもりで一人暮らしを始めた。一人で生活をして百パーセント自分と向きあえる環境を作りたかったのだ。大学の自由な空気に触れて、死してなお僕の心を喰らい続ける父の呪縛から解き放たれたいと思った。

はっきり言って僕は父の会社に対して興味なんか全く無い。自分に会社を経営していく能力があるとも思えない。

父が作ったレールを僕は一つの生きる道だとは思っていた。しかしそれは僕の前に伸びている数ある道筋の一つにすぎない。ただ流れに任せて父の後を継ぐということだけはどうしても避けたかった。大学四年間で自分の選択肢を見極める。それが僕の決心だった。

母の苦労は知っているつもりだ。風の便りだけでも親子だから十分に想像できる。できることなら父の鉄拳から僕を庇い続けてくれた母にこれ以上苦労なんかさせたくない。悠々自適の生活を送って欲しい。しかしそのためには僕が母に代わって社長にならなければならない。

母ももう若くはないし、もともと丈夫な方ではない。神経をすり減らす仕事に就いて気苦労が絶えないだろう。きっと白髪も増え、やつれて、皺も隠し切れないぐらいに深くなっているに違いない。そんな母を見たら僕はもう我儘を言えなくなってしまう。自分の身勝手さに罪悪感でいっぱいになってしまうだろう。

僕は何かで読んだ野口英世の母のことを思い浮かべた。歴史に名を遺した偉大な医学者の老母はろくに読み書きができなかったという。しかし異国で暮らす息子に手紙を書きたい一心で老いた彼女は一生懸命勉強をして何とか平仮名でなら文章を書けるようになった。そうしてその彼女がやっとの思いで綴った息子宛の手紙の末尾は「かえってきてくだされ、かえってきてくだされ」と結んであったという。

「西日がきれいだね」

いつの間にか台所は窓から差し込んでくる紅い光で包まれていた。先生は、ちょっと部屋に忘れ物を、と言って出ていった。

僕は冷たい水に手をさらして野菜を洗った。すぐに指が赤くなって鈍く痛み出したが僕は執拗に野菜を洗った。指の骨まで冷え切っていくのがわかった。

## 8

今にも何か降って来そうな鉛色の空だ。その不吉な空に突き刺さるように真っ直ぐレールが伸びている。どこまでも続く赤銅色のレール。後ろを振り返ると同じように線路が遠近法の絵の如く紅く燃え盛る大地の一点に向かって走っていた。

どうしてなのか分からないが気がつけば僕の足は線路に同化して僕は身動きがとれないでいた。両手をじたばたさせるのだが足は全く動かない。どれだけ揺すっても鋼のレールは微動だにしなかった。このまま僕は一生レールの上から抜け出せないのだろうか。そう思ったとき僕はゆっくりと前に進んでいた。動きたいと思ったからでもなく、かと言って動きたくなかったわけでもない。ただ足が勝手にレールの上を前に進んでいくのだ。レールの上からは外れることが出来ない。後ろに戻る術も見当たらない。このままあの不気味な空に向かって行くだけだ。僕は動きたくないと思った。少しの間とどまって考えたい。しかし足は言うことを聞かずただただ前進を続ける。

僕はだんだん焦ってきた。このままレールに身を任せていたらいつかあの暗い空に飲みこまれてしまう気がする。色とも言えない無表情の鉛の空にたどり着いても何も見当たらないに違いない。満足感も、達成感も、挫折感さえも。

嫌だ

このままだと僕は灰色に染まり灰そのものになってしまいそうだ。燃えることなく燃え尽きてしまうのだ。僕は何とかしてレールから逃げ出したくなった。脱線したい。それがたとえ事故であってもいい。身を滅ぼすような大事故でもかまわない。何とかしてこのレールから外れなくては。

いつの間にか僕の右手には大きなハンマーが握られていた。いや、握っているのではなく右手そのものがハンマーになっていた。そん

なことはどっちでもいい。とにかくこれで殴りつければこのレールは壊れるだろう。僕は右手を大きく振りかざした。ずしりと身体全体に重量感を覚える。振り下ろせばこのレールはひとたまりもない。そのとき一瞬僕の頭の中を、レールが壊れればどうなるのか、という疑問がよぎった。僕は右手を下ろしかけて躊躇した。このレールを殴りつけると僕はどうなるのだろう。線路端に投げ出されても前にレールはない。この足ではレールがなければ進みようがない。

しかし僕はもう一度右手を大きく振りかざした。そんなことは後で考えればいい。とにかく今はこのレールから抜け出すことが大切だ。

一思いに僕はハンマーを線路に殴りつけた。大きく高い金属音とともに全身に鈍い感触が広がる。しかし眼下にはびくともしない鋼のレールが横たわっていた。

僕は不意に背後からかすかな振動を感じた。地面に膝をつきレールに耳を近づけると、振動は確実に大きくなっていく。

僕は焦った。間違いない。電車がやってくるのだ。

僕は右手のハンマーで何度も何度もレールを殴りつけた。このままでは僕は電車の下敷きになってしまう。しかしレールは僕をあざ笑うかのように鉛色の鈍い光を変わりなく発し続けていた。

僕は前方に目をやった。眼前で線路が二又に別れている。その向こう数メートルのところに切り替えのポイントレバーらしきものが立っていた。

後ろを振り返ると遥か彼方から電車が進んでくるのが見えた。煌々とライトを照らして猛然と僕を追いかけてくる。僕は前に急いだ。結局レールの上を進んでいる自分に嫌悪の気持ちはなかった。とにかく今は生きなければ。

僕がポイントを超えたところで背後すぐ間近から巨大な電車の猛り狂う警笛が聞こえてきた。僕を喰らおうとする猛獣は恐るべきスピードですぐそこに迫っているのだ。

もう間に合わない。僕は伸ばせるだけ手を伸ばしてレバーに向か

って倒れこんだ。
小指にだけレバーが引っかかるのが分かった。その左手の小指に全力を注ぎこみレバーが倒れるのと指の股が裂けるのを感じたとき背後でポイントが切り替わる音がした。

誰かが僕を呼んだ気がして僕は目覚めた。見渡せばいつもの僕の部屋だった。
もうまもなく日が暮れるということはカーテン越しの赤褐色の光で分かる。全身に不快な汗をかいていた。胸の奥でざわざわした感触の何かが蠢いている。
脇に転がっている先生の処女作と一緒に買ってきた本を見て僕は記憶を辿った。
「寝ちゃったんだ」
べたべたした額を手の甲で拭う。しかし焦りにも似たざわついた気持ちまではなかなか払拭できない。
嫌な夢だった。しかし驚きはない。同じ類の夢は小さい頃から何度となく経験している。そして目覚めるたびに今のような気分を味わってきたのだ。
チャイムが鳴っている。先生だろうか。
最近僕は玄関の呼び鈴に悪いイメージを抱くことがなくなっていた。僕はふらふらする身体を起こして玄関に向かった。
ドアを開けると冷気が入り込んできて一瞬にして眠気が吹き飛んだ。
「良かったね、りょう君。お兄ちゃん、いたよ」
先生と手をつないでいるのはりょう君だった。りょう君は嬉しそうに僕を見上げている。僕は思わずしゃがみこんでりょう君に微笑みかけた。
「いらっしゃい」
「何だか顔色が良くないよ。体調悪いの？」
先生が僕の顔を心配そうに覗く。

「あ、いえ、ちょっと昼寝してて、急に起き上がったら立ちくらみがして。多分そのせいです」
「だから出てくるのが遅かったのか。何度も鳴らしたんだよ。大丈夫？」
「大丈夫です。それよりも今日はどうしたんですか？朋子さんは？」
僕は朋子さんがドアの影から顔を出すのを期待していた。
「ママ、お仕事」
りょう君がつまらなさそうに報告する。
「今日は日曜日だから休みの予定だったんだけど、急に仕事が入っちゃったんだって」
「そうなんですか」
僕は極力がっかりした様子を見せないように振舞いながらも先生に妬みを感じていた。どうして先生が朋子さんの予定を知っているのだろうか。どうしてりょう君と一緒にいるのだろうか。
駆け足で部屋の中に入っていくりょう君を見送って先生は僕に耳打ちしてきた。
「３０５から戻る途中で、出てきた朋子さんにばったり会っちゃったんだよね。肝をつぶしたよ」
どうやら先生は盗聴帰りに、急な仕事で呼び出された朋子さんと遭遇して部屋に残されるりょう君の面倒を申し出たようだ。りょう君が一人、部屋で朋子さんの帰りを待つことは珍しいことではなかったようだが、それでも一人は寂しいに決まっている。りょう君が先生に飛びついて喜んだのは先ほど僕がドアを開けたときのりょう君の屈託ない笑顔から想像に難くない。これからりょう君が一人になることがあったらこうやって遠慮せずに遊びに来て欲しいと僕は思った。りょう君の来訪で朋子さんと話す口実ができることを期待している部分は否定できないが、子供嫌いの僕も天使を想像させる笑顔のりょう君だけは素直に可愛いと思えていた。
それにしても先生はあっけらかんとしている。二階の住人が三階にいる不自然さを朋子さんにどう説明したのだろうか。

「ここからの景色が好きなんだって答えたよ」
りょう君に絵本を読みながら平気な顔をして先生は言った。嘘ではないからね、と先生は平気そうな口ぶりだが僕にはとても真似できない芸当だと思った。僕だったら朋子さんにどういう応対をしただろうか。ろくに挨拶も出来ず逃げるように部屋へ戻ったことだろう。日曜日の昼間から商売に励む高校生の女の子にもびっくりだが、図太い神経の先生に僕は改めて驚いた。
りょう君は先生になついている。僕の存在など忘れてしまったかのように先生の膝の上で無邪気に飛び跳ねて笑っているりょう君を見ていると先生に嫉妬すら感じてしまう。
先生はどうしてあんなにりょう君に好かれているのだろう。この部屋で鍋をやったときから初対面なのに先生とりょう君は仲が良かった。先生の独身らしからぬ子供のあやし方のせいなのだろうか。それとも単純に馬が合うというやつなのだろうか。
そう考えているうちに僕は一つの答えに達した。りょう君は父親を求めているのだ。りょう君にとって、僕と先生とではどちらがより父親に近いかと言えばそれは間違いなく先生の方だ。彼の目から見れば先生の方が年齢は上だし、外見的にも僕よりは父親の落ち着きを持っているだろう。
先生の膝の上で目を輝かせて持ってきた絵本に見入っているりょう君を見て僕は父を思い出した。
はっきり言って僕は父親が嫌いだった。嫌いと言うよりも恐ろしいという表現が正しいかもしれない。こんな乱暴で傲慢な父親はいらないと思ったことは数え切れないぐらいあった。出来ないと知りつつ子供心に完全犯罪による父親の殺害を考えたこともあった。いっそいなくなればと思わない日はなかったが、それは父親を持つ人間の言葉だ。
口には出さないがりょう君は父親のいない寂しさ、心細さを感じているのかもしれない。先生の膝に座ってりょう君は背中から父親の大きさ、強さ、温かさを存分に味わっているのだろう。出来るこ

とならその役を自分が務めたいと僕は思ったが、先生とりょう君の様子が本当の親子のようにしっくりいっているように見えていつの間にか、うらやましさも消えていた。絵に描いた様な美しい父子の姿がそこにあった。

朋子さんが帰ってきたのは十時過ぎだった。ドアを開けたときに見えた朋子さんの顔はひどく青ざめて見えた。夜の暗がりや、部屋の光の加減でそう見えるのかと思ったが、口数の少なさや何となく気だるそうな仕草がやはりいつもと違っていた。

お仕事大変ですね、と声を掛けようとして躊躇った。朋子さんが排他的なオーラを身に纏っているのが分かったからだ。放っておいてと背中が言っているように思えた。

りょう君は遊びつかれたのか夕飯を食べるとすぐに先生の傍らで眠ってしまっていた。朋子さんはぐっすり眠っているりょう君を少し乱暴に抱きかかえた。急に抱き起こされたりょう君は手足をじたばたさせてぐずり、朋子さんが、静かにしなさい、と太腿辺りを叩くと突然火がついたように泣き出した。それでも彼女は強引にりょう君を抱え小さな声で僕と先生に礼を言うとさっさと自分の部屋に帰っていった。朋子さんが出て行ったときにドアから忍び込んできた冷気が一層暗然たる気持ちにさせる。

「朋子さん、少し様子が変でしたね。風邪でもひいたのかな」

りょう君に掛けていた毛布を畳みながら僕が言うと先生は珍しく難しい顔をして小さく頷いた。

「最近本当に寒い日が続いてるからね」

先生は心配そうに天井を見上げた。そこからは部屋に戻ったりょう君の泣き声が微かに漏れてくる。

「先生」

「何？」

「朋子さんのことが好きなんですか？」

僕は思いきって聞いてみた。前々からはっきりさせておきたかったのだ。

僕は朋子さんのことが好きになりかけている。それは先ほどドアを開けて朋子さんの顔を見たときにはっきりと分かった。あの何かに疲れきったような朋子さんの顔に胸を焦がす愛しさを感じたのだ。すばやく彼女の手を引いて胸に抱きしめたかった。その冷え切った頬で僕の火照った心を静めてほしかった。僕のものにしてしまいたかった。それが出来なかったのは先生とりょう君の存在だ。先生の方がりょう君の父親に向いている、朋子さんの夫にふさわしいと分かっているからなのだ。

「どういう意味かな？」

先生は小首を捻って僕を見ている。朋子さんの顔色、この空気、僕の表情。先生なら僕の言わんとすることが分かっているはずだ。

「朋子さんを愛していますか？」

僕は真っ直ぐに先生を見つめた。相手をコーナーに追い詰めるボクサーの気分だった。答えを聞くまでは逃がしはしない。意味を問い返した先生の真意はこの場から遠ざかりたいということだ。落ち着いては見えるが僕の言葉に先生は怯んでいるのだ。それはつまり先生も朋子さんを好きだと言うことに他ならない。

「いや、困ったなぁ。ハハハ」

頭を掻いて笑う先生を僕は冷ややかに見つめた。先生は真剣な僕を見て気まずそうに笑顔を引っ込めた。

僕は先生からの一撃を待った。心の中で奥歯をしっかり噛みしめ左の頬を先生に向けていた。その一振りで僕はノックアウトされるのだ。先生の口からはっきりと「朋子さんのことを好きだ」という言葉が聞ければ僕はここで朋子さんを諦められる気がしている。それは僕が先生のことを敬愛しているからだ。悔しいけれど朋子さんには、そしてりょう君には先生こそが必要なのだと僕は納得してしまっている。

「愛しているのかどうかと問われれば、答えははっきりとノーだよ。俺は朋子さんを愛していない」

僕はぽかんと先生を見つめた。そんな馬鹿な。実は１＋１＝２で

はないんだよと教えられたような、自分の根底にある常識が揺さぶられた思いだった。
「嘘だ」
僕は吐き捨てるように言った。嘘でなければいけない。先生と朋子さんが結婚するという確定した未来は明日も明後日も太陽は東から昇ることと同じ自然の摂理でなくてはいけないのだ。僕は半ばむきになって先生に食ってかかった。
「先生は朋子さんと結婚して、りょう君の父親になるべきです」
僕は自分の気持ちを棚上げにして息巻いた。心の中の葛藤が余計に平常心を失わせる。しかし先生は明らかに困惑の態で天井を見上げたり窓の外を眺めたりしている。
「愛してないものは愛してないから」
「僕に遠慮してるんですか？」
「そういうことじゃなくて、・・・村石君は朋子さんのことが好きなんだね？」
「好きです」
勢いとは恐ろしい。
先生は僕の返事にさもありなんという顔つきで頷いているが、僕は口にして自分の耳で聞いて初めて自分の気持ちを疑った。しかし今さら、冗談です、とは言えない。あまりに真剣に断定してしまった。気がつけば後には退けないジェットコースターに乗ってしまっていた。
僕は本当に朋子さんを好きなのだろうか。好意を抱いているのは間違いないが冷静に考えれば愛情と思っていたものは実は同情だったのかもしれない。そして朋子さんとどういう関係になりたいのか自分で分かっていない。結婚したいとまで考えているわけではない。ただ、そばにいたい。そして彼女を癒してあげたい。この気持ちを言葉で具体的に表現するのは僕の語彙力では不可能だった。僕はどうしたいのだろう。僕はもやもやとした霧の中にいた。視界ゼロ。足元も見えない。迷子になったような焦りが僕の中に渦巻き始めた。

そのとき階上から何かが落ちたような鈍い音が響いてきた。間違いなく音の源は朋子さんの部屋だった。聞こえていたりょう君の泣き声がぴたりと止んでいる。

「今の、何の音かな」

先生は小首を傾げた。

「まさか倒れたんじゃ」

ごまかしようのないほど青ざめていた朋子さんの顔色が思い出される。先生は僕の言葉を聞いた瞬間に飛び出していた。僕は先生の背中を追いながら、やっぱり先生は嘘をついていると確信した。

いつの間にか外は小さな雪が音も無く降っている。風に乗って降りかかってくる雪を掻き分けるようにして部屋の前まで駆け上がると先生はドアを叩くようにノックした。

「朋子さん！大丈夫ですか？」

部屋からの返事はなかった。もう一度先生がノックをしたが一向に誰も出て来る様子がない。ノブに手を掛けると軽く回ってドアが開いた。チェーンも掛かっていない。部屋の中からは一条の明かりも漏れてこなかった。

先生と僕は目で頷きあった。

明らかに何かがおかしい。じっと中の様子に目を凝らしても暗闇の中に人の姿は見あたらない。咄嗟に強盗という言葉が頭を過ぎった。この闇の中で飢えた強盗が母子を人質にしてこちらを見ているかもしれない。空気は肌を刺すように冷たく部屋着のトレーナーだけの格好なのに僕は手にじっとりと汗を感じた。

「朋子さん、大丈夫？入るよ」

先生と僕はゆっくりと部屋に足を踏み入れた。

部屋のつくりは僕の部屋と全く同じなので先生も僕も明りがなくてもそれほど不自由なく動ける。しかし部屋の中の様子は全く窺い知れない。

とにかく明りを点けなければ。僕は壁にあるスイッチに手を伸ばした。隣に居ると先生の息遣いがはっきりと分かる。先生は息を詰

めて頷き、僕はスイッチを押した。
パッと明りが点いてきれいに整理されているキッチンが僕の周りに浮かび上がった。奥の部屋に台所の光が差し込んで誰かが壁にもたれて立っているのが分かった。
「朋子さん？」
声を掛けても彼女は身動きせず俯いている。僕は駆け寄ってコート姿のままの彼女の肩に手を掛けた。
「朋子さん。何かありました？」
僕が揺り動かしても彼女からの返答はない。先生が部屋の明りを付けてあっと大きな声を出した。振り返ると木製の四角いテーブルの上にりょう君が寝転がっていた。白目を剥いている。意識をなくしていることは明らかだった。先生がりょう君の口元に耳をやり手で脈をとった。
「大丈夫。息はしてる」
僕は慌てて朋子さんを振り返った。
「朋子さん！どうしたんですか！」
僕の声にようやく顔を起こした朋子さんは笑っていた。彼女は僕の手を振り払って腹を押さえて奇怪に笑い出した。キャハハハハ。りょう君を抱きかかえた先生も僕も彼女の様子に呆気にとられて立ちつくした。
「投げたのよ。放り投げたの。私が、ぽいっとね」
僕は耳を疑った。
彼女は気がふれたように大きな声を出して息苦しそうに笑いながら壁にもたれてずるずると倒れこむように腰を下ろした。笑いながらもハー、ハーと大きく息を吐き出して呼吸を整えようとしたが、笑い上戸の酔っ払いのようにまもなく彼女はこみ上げてくる笑いをこらえ切れない様子で肩を揺すり再びクククと不気味に押し殺すように笑い出した。
僕は気付いたときには彼女の正面にしゃがみこんで彼女の頬を平手打ちしていた。乾いた音と共に笑い声がぴたりと止んだ。

「村石君！」
いつも冷静な先生だがさすがに今回は僕の行動に驚いたようだった。朋子さんは僕に殴られた頬に手を添えて固まっていた。乱れた髪が顔を覆っていて彼女の表情が全く掴めなかった。
ポタッと微かな音がした。ベージュ色のカーペットが何かで滲んだ。よく見れば彼女の顎に光るものが伝っていた。
僕は自分の右手と朋子さんの涙を交互に見た。
僕は初めて自分のしたことに驚いていた。今までの人生で女性を殴ったことなど一度もない。新聞の家庭内暴力の記事を読んでも自分は万に一つも女性に手を上げることなどないだろうと思っていた。しかし、間違いなく僕が朋子さんを殴ってしまったのだ。痣になってしまったらどうしようか。これが原因で朋子さんが男性恐怖症になってしまったら。僕は持ち前のマイナス思考で次々と自分を追い込んでいった。先生の顔を見上げられなかった。
すると朋子さんが急に僕の膝に抱きついてきた。そして大きな声をあげて泣き出した。それこそ走り回って転んだ子供のように。
ずっと彼女は泣きたかったのかもしれない。誰かを頼って頼りきって我儘に泣きたかったのだろうか。
僕が撫でるように彼女の頭の上に手を添えると彼女は僕の腰に抱き付いた手に一層力を込めて泣き出した。
「とりあえず病院に行ってくるよ。大丈夫だとは思うけど頭を打ってるみたいだから。一段落ついたら朋子さんの保険証を持って来て」
先生は近くの病院の名前を僕に告げると、りょう君を毛布に包んで抱え雪の中へ出て行った。
朋子さんは何年分かの涙を一気に流しきるかのように止め処なく泣いている。その泣き声は梅雨時の雨のように止む気配がなかった。僕の膝は絞れるぐらいになっているだろう。僕の手の下で泣いている朋子さんは小さくて愛しかった。今彼女はこの広い世界で唯一僕だけを頼りに涙を流しているのだ。そう思うと僕が彼女を泣き止ませ幸せにしてあげなくてはいけないという気持ちになってくる。諦

めて先生に全てを託そうとしていた僕はもうどこにもいなかった。
好きです、と言い切ったことにも後悔の気持ちもなくなっていた。
今は自分の気持ちに一点の曇りもなかった。
「さあ、病院に行きましょう」
朋子さんは涙を拭き、鼻をすすりながら何度も頷いた。保険証を持つと朋子さんは走るように外に出た。タクシーはすぐにつかまった。
「あの子の父親に会ったの」
「え？」
「別れた前の夫に会ったの」
朋子さんは少しずつ言葉を紡ぎだすように選んで話し出した。
離婚前からノイローゼになってしまい精神科に通っていること。前夫に今日いきなり電話で呼び出されたこと。彼が寄りを戻したいと言ってきたこと。
朋子さんは自分の心の中を整理するようにゆっくりと筋道立てて話していく。
「朋子さんは何て言ったんですか？」
「絶対に嫌だって。これ以上あの人に私の人生をかき回されるのは耐えられないから。やっとりょうとの暮らしにもリズムが出てきたところなのよ。あの人が現れたら私もりょうも無茶苦茶になってしまう」
朋子さんの話から推測すると離婚の原因は前夫にあるようだった。
彼は全てにおいてだらしなかった。朋子さんの知らないところで遊ぶ金欲しさに多額の借金を作り、朋子さんの妊娠中に不特定多数の女と関係を持った。そのうちの一人には半ば力ずくで行為に及び妊娠させたうえで中絶させている。朋子さんは借金返済に加え中絶させた相手への慰謝料のためにも身を粉にして働きりょう君を流産しかかったらしい。彼から暴力を振るわれたことも少なくなかったようだ。
「これ以上あの人と関わるのが怖くて仕方ないの」

一度は恋に落ちて将来を誓いあった二人なのに今は相手に恨みさえ抱いている。悲恋とはこういうものを言うのだろうと僕は思った。たとえ別れることになってしまったとしても、相手のことを好きだったという気持ちまでは否定したくないと思う。その気持ちを否定することはそのときの自分を否定することになる。過去の己を否定するのは今の自分を否定することに繋がる。過ぎ去った恋は大切な思い出として心の隅に美しく飾っていて欲しい。二人の思い出が恐怖や絶望の灰色に染まってしまっている朋子さんの恋は本当に悲しいものに思えた。

「もう、少しも愛してないんですか？」

僕の問いに返してきた朋子さんの薄紅い目は何だか悲しそうに見えた。

「今思えば馬鹿みたいなんだけど、私、あの人のことが好きで好きで家出するようにして彼についてこっちに来たの。私、このあたりの出身じゃないのよ。もともとは関西の人間なの」

僕は朋子さん母子と初めて一緒に鍋を突付いた日、彼女が先生を関西出身だと言い当てたことを思い出していた。あのとき朋子さんも、いろいろある、と言っていた。

「私が元には戻れないって言ったときあいつ何て言ったと思う。『だったら、金よこせ』って。私、鞄振り回して叫びながら走って逃げてきちゃった」

彼は朋子さんのことを金づるとしか思っていないのだ。朋子さんは震えていた。それが恐怖からなのか悔しさからなのかは分からなかった。

「私、もう狂っちゃいそうなの。気を抜いたら自分が何をするか、自分のことが分からないの。本当はもう狂ってるのかもしれないわ。何もかもが怖くて不安で一思いに死にたくなるのよ。胸が詰まって息が出来なくなって涙が止まらなくて私・・・」

朋子さんは震える手で頭を抱えた。僕は黙って見ていることに耐えられずそっと朋子さんの肩に手を掛けて抱き寄せた。小さな朋子

さんは僕の腕の中で小刻みに震えるばかりだった。
「これから一人でちゃんとあの子を育てていけるのか、あの男がまた現れて私を殴らないか、私の気がふれてしまわないか、あの人の血が流れているりょうを愛し続けられるのか・・・。りょうには何の落ち度もないのにどうしても冷たく接してしまうの。毎日何かに心を縛られているような圧迫感を感じたり、身体が中から張り裂けてしまうような感覚に襲われたりする。耐えられなくなるのよ」
「大丈夫ですよ、大丈夫」
僕は優しく朋子さんの肩を抱き頭をなでた。
僕は何となく満ちた気分だった。力なく僕の肩にもたれかかる朋子さんが全てを僕に預けてくれたようでその重みが僕の心に喜びをもたらしている。タクシーがこのまま二人を乗せてどこまでも運んでくれればと思った。これからは僕が朋子さんを支えていこう。
程よい暖房と優しい振動が眠りを誘うほど心地よかった。窓越しに見える夜空に雪が舞っている。真っ黒の空から白い雪片が無尽蔵に生み出されてくる様子は神のいたずらかと思えるほど美しい。黒いアスファルトの上に氷の結晶はもろくはかなく溶けていく。その脆弱な美しさはまるで朋子さんのようだった。
りょう君は大丈夫だろう。根拠はない。だが先生が大丈夫だと言ったから僕は何も心配していなかった。先生の優しい口調にはいつも揺るぎない自信の裏打ちを感じる。りょう君は何事もなかったようにすぐに元気に母の胸に飛び込んでくるだろう。きっと明日にはあの無邪気な笑顔を見せてくれるはずだ。
タクシーが病院に着いてしまった。朋子さんはドアが開くと、りょう、と一言つぶやいて雪を掻き分けるように駆け出していった。

## 9

「におうなぁ」

いつもより早い時間に現れた先生は僕の部屋に上がってからずっと眉をひそめて腕組みをしている。

僕は先生にマグカップでホットミルクを出して自分の部屋の中を見回した。別段臭気を発するようなものは無いように思う。

「何か臭いですか？」

最近風邪気味の僕は鼻が詰まって思うように臭いを嗅ぎ取れない。そんな僕には分からなくても先生には何か臭いがするのかもしれなかった。

僕はティッシュで思い切り鼻をかんだ。少し鼻が通るようになる。しかし次の瞬間にはもう鼻水が空気の通り道を塞いでしまう。鼻が詰まると頭もぼうっとしてくる。今日は朝から頭の中に靄が張ったような状態だった。

風邪のひき始めは1週間前、朋子さんとタクシーでりょう君と先生を追いかけて病院に行ったときだ。あのとき僕は部屋着のままで防寒具と言えそうなものは何も着ていなかった。朋子さんの様子に気をとられていて自分のことまで気が回らなかったのだ。雪の中へ飛び出した朋子さんを追いかけたときに僕は風邪をひくことを覚悟していた。首筋から入り込む雪の冷たさと言ったらなかった。

検査の結果、予想通りりょう君には何の問題も見当たらなかった。検査が終わって母親の顔を見つけたりょう君は元気に朋子さんの胸に飛びついていた。二人の微笑ましい様子に安心したときには既に僕は背筋に悪寒を感じていた。そして予想通り僕は風邪をひいたのだった。

朋子さんに笑顔が戻ったのは嬉しいが、この風邪は長引きそうで気が滅入る。寝込むところまではいかなかったのだが、その分いつまでも治らない。常に鼻が詰まっていて息苦しい。今日は特に身体

全体が重い気がする。僕は先生の向かいに座りコタツの中に足を伸ばした。
「お隣さんのことだよ」
「お隣さん？」
そう言えば今日から隣の部屋、つまり僕の部屋と先生の部屋に挟まれた２０３号に誰か引っ越してきたようだ。朝からひっきりなしに家具やら電化製品やらが届いている。入居者ともそのうち通路で顔を合わせることになるだろう。今度は独身者だろうか。それともやはり夫婦だろうか。
ふと前の住人だった若夫婦を思い出した。彼らが出て行ってもう一ヶ月以上が過ぎている。彼らは元気にやっているだろうか。今度は愛し合っても隣に音が漏れないところに引っ越したのだろうか。
今度入居する人は前に住んでいた若夫婦のことはきっと知らない。僕や先生もそのうち新しい入居者を見慣れ彼らのことは忘れてしまうに違いない。そういうことを繰り返してサクラビルは２０年の歴史を重ねてきた。いずれ僕もこの部屋を出て行くときが来る。僕もこのサクラビルの歴史の一部になるのだ。そのときがどういう形で訪れるのか今はまだ想像もつかない。
「餃子でも作ってるんですか？」
においの強いものとして僕の頭にまず浮かんだのが餃子だった。引越し餃子とは聞いたことがないが。何が面白いのか先生は僕の言葉にぷっと吹き出した。
「そのにおうじゃないよ。何だか怪しいってこと」
僕はますます分からなくなって先生と同じように眉をひそめた。すると左の鼻から鼻水が垂れそうな感じがして慌ててティッシュに手を伸ばした。気を抜くと鼻水がつーっと出てくる。かんでもかんでも切りがない。いい加減鼻の下がひりひりしてきた。
「どこらあたりが怪しいんですか？」
別段怪しいところなど思い当たらない。当人に会ったこともないのだから怪しいも何もないのだが。先生は小首を傾げてぶつぶつと

言い出した。
「今ここに来る途中に顔をあわせたんだけど、四十歳ぐらいのカップル二人きりだった。子供はいなかったんだよね」
それがどうしたと言うのだろう。たまたま今日は二人きりだっただけかもしれないし、百歩譲って子供に恵まれなかった夫婦だったとしてもそんな夫婦など珍しくない。現に１０１号の水野さんも中年夫婦で二人の間に子供はいない。
「十代の恋人同士のようにぴったり寄り添いあってさ。言葉なんていらないって感じで見つめ合ってどこかへ出かけていったよ」
先生は納得いかない表情だ。口から十センチぐらいのところでマグカップを持ったまま、おかしい、おかしい、と連呼している。思案顔で一向にホットミルクには口をつける様子がない。
そういう夫婦がいてもいいと思う。中年になっても十代のように愛し合っているなんて素敵なことだ。無言で母を睨みつけている父を見ることはあったが、言葉もなく愛を秘めて見つめ合っている両親を僕は見たことがない（そんな二人を見たら気持ち悪かっただろうが）。その夫婦は子供がいないからいつまでも恋人同士の感覚でいられるのかもしれない。
先生は何が気に入らないのだろう。四十代の夫婦間に愛など無いと思っているのだろうか。他人の幸せに嫉妬するような器の小さい人ではないと思うのだが。
「二人とも左手の薬指に指輪をしてたな」
結婚しているなら当たり前だ。先生の言いたい事が未だに見えてこない。先生が手にしているホットミルクから立ち上る湯気のように掴み所が無かった。その湯気にも勢いがない。ミルクはそのまま冷めてしまいそうだ。
「男はゴールドで、女はシルバーの指輪」
なぞなぞだろうか。先生は次第に僕を試すような目になってきた。
「引越しの業者を見てないんだよね」
引越しの業者が引越しの日に来ていないのはおかしい。しかも夫

婦は先ほど昼の三時頃に出かけていったのだから今日はもうこれ以上何も来ないと言える。僕は何となく先生の言わんとすることが分かってきた気がした。
「家具やら電化製品やらは全て新しく買い揃えたみたいだったな」
これで僕にも全て理解できた。先生は「夫婦」とは言わずに「カップル」と言った。妻でも夫でもなく男と女なのだ。
「お隣さんは恋人同士のような夫婦ではなくて、夫婦のような恋人同士なんですね」
先生は大きく頷いて冷めかけのホットミルクをすすった。
「あれはきっとダブル不倫だよ。２０３号は秘密の隠れ家として使うつもりなんだな」
「隠れ家、ですか」
先生が言うのだから間違いないだろう。さすが先生だ。ここに来る途中にすれ違っただけでそこまで見抜いてしまう。
「きっと、ベッドの中では熱く燃えるんだろうなぁ」
また始まった。先生の中でお隣の中年カップルはあられもない姿にされているのだ。
長めの髪を掻きあげ目を細めて遠くを見る先生は一見爽やかだが、その実、考えていることは爽やかさとは対極にある。急に僕の身体から力が抜けていくのは風邪だけのせいではないようだ。
「おっと、もうすぐ四時になるね」
「何かあるんですか？」
「ちょっと約束があるんだよ。３０５号に行く約束が」
３０５号と言えばあの隣室を盗聴するための部屋だ。今日もどこかの男があの部屋で女を買うのだろう。そんなところで先生は一体誰と待ち合わせているというのだろうか。
「俺が約束したわけじゃないんだよ。再会を約束しているのをこの前盗み聞いたんだ」
先生はにっこりと微笑むと湯気も立たなくなったホットミルクを一気に飲み干し、やおら立ち上がると僕に向かって、じゃあ、また

後で、と軽く手を挙げた。
先生はこれから一仕事するような精悍な顔つきで部屋を出て行った。
僕はもう盗聴はこりごりだった。僕にとって盗聴は性欲の充足と言うには刺激が強すぎる。良心は痛むし、何といってもそわそわして落ち着かない。先生が作品づくりのための参考資料に使う分には何も言うつもりはないが、僕はもう３０５号に足を踏み入れるつもりはなかった。
今日も外は寒い。昨晩のニュースでタレント気取りの女性天気予報士が「明日はとっても寒くなります。昼過ぎからは雪が降り出します。平野部でも大雪に注意してください」と深刻さの欠片も感じられないとびきりの笑顔を湛えて伝えていたのを僕は思い出した。
今日は起きてからというもの時間が経てば経つほど悪寒がひどくなってきていた。風邪をひきながらも週末まで寝込まずに乗り切れたことで気持ちが緩んでしまったのか、全身が気だるく頭も痛い。先生が出て行って部屋に一人残されるとさらに身体が重く症状が悪化したような気がしてくる。僕は体温を測るために押入れから救急箱を探り出してきた。熱があれば今日はこのままゆっくり寝ることにしよう。申し訳ないが先生には出前でもとってもらうことになるだろう。
僕は体温計のボタンを押して電源を入れ先の方を口に含んだ。そのとき携帯電話が鳴った。
どこで鳴っているのか携帯電話は見えるところにはなかった。耳を欹ててみるとどうやら通学に使っているリュックの中のようだ。部屋の隅に横たわるリュックまでの２，３歩の距離が今の僕にはものすごく遠くに感じられる。僕はコタツに足を入れたまま倒れこむようにして手を伸ばした。
日頃滅多に鳴ることのない電話がこういう日に限って存在意義を誇示するようにけたたましく鳴り響く。身体を思い切り伸ばし爪の先に引っ掛けてどうにかリュックを手繰り寄せる。どうせなら切れ

てしまわないだろうか。こんな日は先生以外の人とは話すことも億劫だった。緩慢な動作でファスナーを開けごそごそと携帯電話を取り出した。

「はい。村石です」

寝転んで体温計を銜えたまま誰から掛かってきたのかも確認せずに電話に出た。こんなときはどうしても不機嫌な声になってしまう。自分でも嫌になるほど不快感をあらわにした声だ。仕方ない。今日という日に掛けてくる方が悪いのだ。

「橋本ですけど・・・。もしかして寝てました？」

僕は自分の耳を疑った。全く予想していない人の声だったのだ。

朋子さんと話をするのは一週間前の病院以来だ。慌ててトーンを上げようとするから咽喉に何かが絡まって変に上ずったハスキーな声が出てしまう。

「い、いえ。そんな事はありません」電話を握る手が一気に汗ばんでくる。体温がさらに何度か上がったようだ。僕は慌てて口から体温計を出した。「間違いなく起きてます。ええ。こんな時間には寝られませんよ」

僕の慌てぶりが分かったのか電話の向こうで朋子さんが声を殺すようにして笑っているのが分かる。

「そんなに否定しなくても・・・。でも、それにしては、ものすごく不機嫌そうな声でしたよ。鬱陶しいっていう感じがひしひしと伝わってきました」

朋子さんは僕を困らせようとするのか「ひしひし」に力を込めた。

「いや、あの、その、ちょっと風邪をひいてしまいまして。いや、大したことはないんですが、咽喉が少し痛くて、声が出しづらいかなって感じで」

「風邪ですか？そんな時に電話なんかしてごめんなさい。ゆっくり休んでください。すみませんでした」

朋子さんの態度がころっと変わった。慌てて低姿勢になったかと思うと電話を切ろうとする。僕は少しでも電話を長引かせようとさ

らに慌てて元気を装った。
「いや、本当に大したことないんです。熱も大したことないですし」
「熱があるんですね？」
「あ、いや、その・・・」
「分かりました。今は出張先から電話してるんですけど今日は定時に帰れますから看病させてください」
「えっ？そんな、お構いなく。本当に大丈夫ですから」
「いえ。一週間前のお礼をしたいなと思って電話したんです。申し訳ないことしたなってあの日からずっと気になってて。だから風邪の看病ぐらいさせてください」
朋子さんは僕に断る隙を与えずにまくしたてて電話を切ってしまった。
僕は寝転がったまま天井を見上げて放心していた。つい今まで電話越しに朋子さんと話しをしていたと言うのが夢の中の世界だった気がする。あまりに意外すぎて現実感がない。僕は夢心地で再び体温計を銜えた。するとその瞬間また電話が鳴った。
僕は慌てて携帯電話を掴みなおした。朋子さんかもしれないと思ったが液晶画面の表示には先生の名前が出ていた。
「村石君！」
通話ボタンを押すと電話の向こうから噛み付くような勢いで先生が呼びかけてきた。
「ど、どうしたんですか、先生」
「村石君、すぐに三階に上がってきて。大変なんだ」
「何が、大変なんですか？先生。先生？」
電話はすでに切れていた。
常に冷静な先生が慌てている。それだけでただ事ではないのは分かる。早く駆けつけなければ。しかし身体がいうことを聞かない。恐ろしく身体が重い。身体全体が床に引っ張られているような感覚がある。僕は立ちくらみに耐えながら這うようにして外へ出た。
今にも雪が降ってきそうな暗い空だ。針のように鋭い寒風が頬や

手に痛みを伴って突き刺さる。触れば冷気で指が引っ付いてしまいそうな階段の金属製の手すりに手をかけながら動かない身体に鞭を打って三階に辿り着くと先生が３０６号のドアを激しく叩いているのが見えた。

「開けなさい。警察だ！」

先生は気でも違ったのだろうか。いつもは自分がピッキングで不法侵入しているくせに、今は警察を騙って他人の部屋に入り込もうとしている。それも鉄製のドアを蹴破りそうな勢いでだ。あまりの迫力に気圧されて僕は目の前の様子を映画の一場面を観ているように呆然と眺めた。

「開けろ！開けないなら無理やり開けるぞ」

先生はドアの前にしゃがみこんでポケットを探っている。おそらくまたピッキングで開けるつもりだろう。いったいどうしたと言うのだろう。あの部屋の中で何が起きているのだろうか。状況は全く理解できないがとにかく非常事態であることだけは間違いないようだ。

先生は例のように針金のような棒をポケットから出して鍵穴に差し込んだ。すると急にドアが内側から開いた。先生はドアが開く勢いに飛ばされる格好になって通路の鉄製の柵に背中をぶつけた。

「先生！」

僕が先生に駆け寄ろうとすると部屋の中から衣類を右の脇に抱え左手には靴を手にした白いＴシャツ姿の男が猛然と走り出てきた。左手に掴んでいる靴で隠しているので顔は見えない。分かるのは背は低いががっしりとした体格で髪を短く刈り揃えた男だということだけだ。彼はこの寒さのなか裸足で脇目も振らずに僕を突き飛ばして階下に降りていった。僕は手すりに？まりながら階段から転げ落ちないように必死で身体を支えた。僕とぶつかったときに靴下が一足落ちたが男は全く顧みることもせずあっという間に飛ぶように走り去っていった。

「村石君！大丈夫？」

よろよろとこちらにやってきた先生も腰のあたりをさすりながら痛そうに顔を顰めている。
「何とか大丈夫です」
僕は弱々しく右手を上げて無事をアピールした。全く何でこんな目にあわなくちゃいけないんだ。
「とりあえず部屋に入ろう」
先生はそう言って３０６号に入っていった。
僕はドアの影でためらった。３０６号では売春が行われていたのだ。そんな場所に足を踏み入れるのは犯罪に加担するようでどうも気がひける。それにたった一度ではあるが盗聴した相手の顔を見ることになるかもしれないと思うと、あのときの興奮と嫌悪の気持ちが思い出されて気恥ずかしい。
それでもいつまでも寒い外にいるわけにもいかず仕方なく鼻をすすりながら僕は部屋の中へ入った。
何もないと言っていいほど殺風景な部屋だった。
間取りは僕の部屋と同じだが、およそ生活の臭いが感じられない。人間の出入りが少ないせいか空気が流れることなく澱んでいる気がする。台所には冷凍室のついていないタイプの小さな冷蔵庫が低い音で唸っている。奥の部屋にはテレビデオが卑猥なタイトルのビデオテープと一緒に床に転がっていた。ベッドだけが大きく立派でこの部屋の意味を暗示しているかのようだった。そのベッドの上に生きているとは思えないほど血の気の無い表情の裸の女が毛布に包まって座っていた。
ボーイッシュなボブカットの髪を今時の高校生らしく明るい茶色に染め顔には派手気味な化粧を施している。本当は童顔で可愛らしい子なのだろうが、きつめのアイラインや目に痛いピンクの口紅が彼女の纏っている雰囲気にすれたものを感じさせる。
シーツは乱れベッドの周りに彼女のものと思われる破れたセーラー服と赤い上下の下着が散乱していた。彼女は呆然と目を見開いたまま身を包む毛布の端をぎゅっと掴み小刻みに震えている。さっき

の男に指で絞められたのだろうか、首にうっすらと赤黒い痕が浮かび上がっているのが痛々しい。
「大丈夫ですか？」
先生の問いかけに女はこくりと力無く頷いた。全然大丈夫ではなさそうだ。乱れた髪も直さず毛布の隙間から陰部が覗いているのも気付いていないらしい。若々しく伸びる白い足の間にある黒く輝く茂みを直視できず僕は部屋の中を見回した。
ガスコンロもないのでは湯も沸かせない。
僕は先生に断って一端自分の部屋に戻った。一番大きいマグカップにたっぷりコーヒーを淹れて再び３０６号に戻り一向に震えの止まる様子のない彼女に手渡した。彼女は礼を言う余裕も無いようで飢えた子供のようにマグカップを僕からひったくると両手で挟むように持ち一口飲むと頬に当てた。
「温かい」
彼女はちびりちびりと半分ほど飲んでようやく呪縛から解かれたように大きく息をついた。少し顔色に生気が戻ったように見える。僕が下に行っている間に下着だけは身に着けたようだ。毛布の隙間から赤いブラジャーの肩紐が見える。透き通るような白く若い肌にはその生臭い血の色のようなラインが映えすぎて違和感があるように思った。
先生は自分と僕をこのマンションの住人だと彼女に簡単に紹介し、それから質問を始めた。
「あの男は知り合い？」
先生の問いに彼女は首を横に振った。
「知り合いじゃないけど、今日で三回目」
「前にも二度会ったことがあるんだね」
「会ったっていうよりも、やったっていう感じ・・・」
自分よりも若い女性が恥じらいもなく平然と「やった」と口にすることに僕は戸惑いを感じたが、先生はなるほどという表情で頷いた。

「彼について何か知ってることない？」
彼女はあっさり「さあ」とだけ答えた。深く考える素振りも見せずまるで他人事のように気のない返事をする彼女に僕は苛立たしさを覚えた。
「名前とか、住んでるところとか知らないの？思い出してみてよ」
僕が詰問口調で先生と彼女の間に割りこむと彼女は僕を馬鹿にしたような一瞥を寄越した。
「あのね、金を払ってセックスするのに名前とか住所とか教える馬鹿がいると思う？出来る限り自分のことを知られたくないと思うのが普通でしょ。毎回毎回乱暴で下手くそなのを我慢してきたけど、さすがに今日は頭に来て『その歳にもなって女の扱い方も知らないの？』って言ったら殺されかけたの。ただ、それだけ」
言い終わると彼女は僕の存在を無視するように僕から目を逸らしコーヒーを啜った。
僕は水の流れのように澱みのない口調の彼女に言い返す言葉を咽喉に詰まらせた。
浅はかな奴だ
苛立ち紛れに頭の中で彼女を罵った。考えもなく誰彼無しに肉体関係を持つからこんな目に遭うんだ。憤りから思わず口をついて出そうになる彼女への蔑みをぐっと飲み込んで僕は努めて冷静な声を出した。僕は何も喧嘩をするためにコーヒーを作ってきたわけじゃない。
「『それだけ』って言い方はないだろ。僕らが来なかったら君は今頃本当に死んでたかも知れないんだからさ」
僕が言うと彼女は眉根を寄せて僕を睨みつけた。
「そんな恩着せがましく言わないでよ。確かにこの人には助けてもらったけど、あんたは何かしてくれたの？」
そう言われれば何もしていない。犯人を捕まえることもなく無様に通路で突き飛ばされてひっくり返っただけだ。しかし風邪をひいて身体がつらいのに、自分の部屋とを往復して熱いコーヒーを淹れ

てきてやったのだ。そんな言われ方をされる筋合いはない。
「売春なんかしてるからこんなことになるんだろ」
僕は吐き捨てるように言った。マグカップを奪い取って自分の部屋に帰ってやろうか。
「まあまあ村石君、冷静に」
先生が僕をなだめようと笑顔で僕の視界に入り込んでくる。先生に間に入られては僕も何も言えなくなる。
「ったく、うざいわね。その売春を盗み聞きしてるのはどこの誰よ」
僕は顔が真っ赤になってカッと熱くなり全身から汗が拭き出すのを感じた。急激に頭に血が昇ったのか、身体全体がふわっと浮き上がったような感覚を覚える。気を抜くとその場にへたり込みそうだ。
盗聴のことを彼女はどうして知っているのか。先生もさすがに驚いた表情で彼女を振り返った。
「気付いてたの？」
先生は自分の膝に手をやり彼女の顔と同じ高さまで自分の目の位置を下げて問いかけた。
「何となく気配でね。下手な男とやるときはセックスに集中したくないからどうしても他のところに神経をもっていっちゃうの」
「そうなんだ。・・・怒ってる？」
「ううん。今日だって隣の部屋にいてくれたから助けてもらえたんだし・・・。エッチするのは気持ちいいし、その上お金までもらえるんだから止められないけど知らない人はやっぱり怖いの。今日みたいなこともあるしね。だから誰かが側に居て聞いててくれてると思うと安心なんだ。それに、聞かれてると思うと興奮して濡れちゃうの。私が興奮すればお客さんも喜ぶし一石三鳥よ」
彼女は男の僕でさえ耳を覆いたくなるような卑猥な言葉を平然と言ってのけると寒そうに毛布を掴みなおしてしっかりと全身を覆った。
僕は空恐ろしくなった。世の中何か間違っている。妹と同じ年代の高校生が快楽の手段として男の身体を求め、しかもそれを他人に

聞かれることでより快感を覚えていると平然と口にする。どうすれば自分が興奮するのか、興奮すれば自分がどうなるのかもしっかり理解している。彼女はこの若さで性欲と快楽を思うように操作できると誇示したいような口調だ。
「大分顔色が良くなってきたね」
「うん。温まってきた」
彼女は先生の言葉には素直に頷くようだ。どうして先生はこう人の扱いが上手いのだろうか。
「名前、聞いても良い？」
「ゆう。結ぶっていう字一字で結。いい名前でしょ。結構気に入ってるの」
そう言ってにっこりと笑う彼女はやはりまだあどけなかった。口元に出来る笑窪が思わず微笑み返したくなるほど愛らしい。しかし毛布の隙間から見える胸元にはしっかりと谷間が出来ている。身体は十分に大人なのだ。彼女になら高い金を払ってでもという男はたくさんいるだろう。
「結ちゃんか。結ちゃん、話は戻るけど、さっきのお客さんはいくつぐらいか分かる？」
「年？そうだなぁ。四十は超えてるかなぁ」
「背は高くないけど、結構がっしりしてたよね」
「そうだね。お腹は出てなかったし、特に足が引き締まってたよ。外回りの仕事なのかな」
「なるほどね。結婚してそう？」
「してないと思うよ。あんなに下手くそじゃ誰も結婚してくれないよ、きっと」
自分の子供と言っても良いぐらいの年若な高校生に軽い調子でこんなことを言われたら大なり小なり殺意を抱くだろう。彼女に掛かったら男の尊厳も意地もあったものではない。
「犯人捕まえたい？」
「ちょっと、先生」

僕は慌てて先生の肘を掴んだ。そのまま壁際に連行する。
「何、何？」
「いったい、どうするつもりなんですか？」
先生は結に「警察に通報するか？」とは訊かずに先ほどから犯人のことについて結から根掘り葉掘り聞き出そうとしている。何やらきな臭い。探偵の真似事でもしようというのだろうか。そんな危ないことをしてせっかく軌道に乗り始めた本業に支障を来たすようなことがあってはならない。
「犯人捜しもおもしろいかなって思ってさ」
「やっぱり。ダメですよ、そんな危険なこと。そういうのは警察の仕事です」
「だって、警察に通報なんてできないじゃん。そんなことしたら売春してた結ちゃんだって捕まっちゃうんだよ」
「だからって、先生が首を突っ込むことじゃないじゃないですか」
「乗りかかった船だろ。それに小説のネタにもなりそうじゃん。村石君も一緒に探偵ごっこしない？」
先生はもう完全に乗り気だった。目が爛々と輝いている。
「そんなこと言われても」
「見てごらんよ。あんなに痕がつくほど首絞められて。結ちゃんが可哀想だとは思わないの？」
僕は先生の肩越しに結を見た。確かに結の白い首筋に浮き上がっている指の痕を見れば僕だって犯人に対する嫌悪感を抱く。犯人をこのままのうのうとさせておくのは歯がゆいような気にもなってくる。
結は右手の人差し指をその小さな唇に添えて思案顔を浮かべている。悩む姿も可愛らしい。自分の魅力を知っていての素振りなら全く末恐ろしい。これからも彼女によって何人もの男が狂わされることになるだろう。
「やっぱ別にいいや。今日は運が悪かったと思うことにする」
「え？」

あっけらかんと笑う結に僕と先生は同時に驚きの声をあげた。
「運が良くって失神するほど気持ちいいときもあれば、今日みたいな日もあるわ。お金ももらってるわけだし。お客さんは大事にしないとね」
「それでいいの？」
半ば未練がましくすがりつくように先生が結の顔を覗き込む。
「うん。私が怒らしちゃったっていうのもあるし。結局今日は本番やってないのにお金はもらったままだからなんだか逆に悪いことしちゃったかも」
結の言葉は実に爽やかだった。彼女には彼女なりの商売観があるようだ。お金をもらった以上はその額に見合うサービスを施す。相手に満足させることにこだわりめいたものを持っている。結なりのプライドなのだろう。「何だか今日の売り上げは使いにくいなぁ」とつぶやく結が好ましくさえ思えてくる。
「あっ、雪だ」
いつの間にか窓の外では雪が降り出している。空から落ちてくる一ひら一ひらがかなりの大きさだ。天気予報を信じれば今晩中降り続くことになる。明日の朝、ドアの向こうにどんな景色が広がっているか楽しみでもあり憂鬱でもあった。
「私、そろそろ帰る。積もったら嫌だもん」
「帰るって言ったって、どうやって」
僕は部屋に散乱している結の衣服を見つめた。この破れたセーラー服では外に出られないだろう。
「朋子さんに服、拝借できないかな」
「でも、この状況をどう説明しましょうか」
「そうだなぁ」
僕と先生が思案に暮れている間、結は毛布に包まりながら制服をかき集め何やらごそごそやっている。毛布からルーズソックスを履いた足が伸びた。スカートも穿いたようだ。セーラー服は壁際に転がっていたプラダのリュックサックに突っ込んだ。

「私なら大丈夫よ。コートがあるから平気、平気」
結は裸の背中をこちらに向け、素早く淡い水色のダッフルコートを羽織るとこちらに向き直り、ほらねと得意そうに笑った。確かにコートを着てしまえばその中の様子は周りからは分からない。マフラーを巻けば首筋の痣も隠れてしまう。誰も彼女がコートの下にブラジャーしか着けていないなどとは思わないだろう。
「でも、きっと寒いよ。雪が降ってるし風邪ひかない？」
「大丈夫だって。若いもん。それにこの格好で外を歩いてたら刺激的じゃない？身体が火照ってくるわ。今、便秘中だからお腹が冷えて下痢になったら丁度いいし」
お腹の周りを大きく撫でる結に先生は大きな声で笑い出した。彼女のたくましさには笑うしかないという気持ちは僕にも理解できた。
先ほどまで生きているかどうか疑いたくなるようなひどい顔色でうずくまっていた彼女はもうどこにもいない。まかり間違えば今頃このベッドの上で彼女は息絶えていたかもしれなかったなどとは到底信じられない話だ。
ころころと笑う彼女は存分に人生を謳歌していて何の悩みもなさそうに見える。実際悩みのない人間などいないことは僕だって知っている。結だって見ず知らずの男に殺されかけたのだ。きっと心に深い傷を負ったに違いない。それでも気丈に振る舞い何事もなかったようににっこりと笑う彼女の強さは僕には真似できないと思った。彼女なら今日の出来事を明日には友人に笑い話として語っているかもしれない。
「握手してくれませんか？」
先生は右手を彼女に向けて差し出した。それが単に知り合った記念でも、高校生の肌に触れたいためでもないことは僕にも分かった。先生は彼女が対人恐怖症や男性恐怖症に陥っていないかどうか確認しているのだ。
彼女は差し出された右手に一瞬強張った表情を見せた。反射的に身をすくめたのが肩の動きで分かる。やはり男の手というものに対

して恐怖心が出来てしまったのだろうか。
しかし彼女はひるまなかった。すぐに右の掌を軽くコートの脇腹で拭うような仕草をして笑顔を添えて先生の手をとった。次いで彼女は僕に向かって右手を差し出して握手を求めてきた。これも単なる握手ではない気がした。彼女は自分から僕の手を握ることで生死の境をさまよった恐怖を克服しようとしているのかもしれない。
僕は結を真似て脇腹で掌を擦ってから彼女の手を握った。彼女は僕の仕草に笑って僕の手をしっかりと握り返してきた。彼女の瞳にはもはや微塵の曇りもない。その笑窪には若々しい生命力が漲っているようだった。
「この仕事続けるの？」
僕は敢えて「仕事」と言った。その言葉が結にとって一番しっくりくるだろうから。彼女は屈託のない笑顔で頷いた。
「当然。こんなにいい仕事、他にはないわ」
結はプラダの黒いリュックサックを肩にかけ鍵を手にして「出ましょ」と歩き出した。
「最後に一つ、聞いてもいいかな？」
玄関に向かう結の背中に向けて先生は最後の問いを投げかけた。結は玄関でローファーを履きながら「なあに？」と問い返した。
「結ちゃんって、何歳なの？」
そんなことを聞いてどうするのだろうか。確かに結は小柄で童顔ではあるが、胸の膨らみは十分で中学生には見えない。
「二十歳。大学二年生よ」
結は事も無げに言って玄関から出て行った。
僕は狐につままれたような感覚で開いたままのドアの向こうを呆然と見つめていた。そこから結は確かに帰っていった。しかし僕は幻を目で追っているようなあやふやな気持ちになった。今の今まで高校生だと思っていた女の子が実は僕と同い年のれっきとした成人の女性。俄かには受け入れがたい事実だった。大きなガムを飲み込めと強要されているような気分だった。どうにも喉の奥に入ってい

かない。
「やっぱりな」
先生は爽やかに笑って結に続き外に出て行った。
先生はいつから気付いていたのだろうか。この三人の中で知らないのが僕だけだとしたら何とバツの悪いことか。すっかりだまされている僕を二人は心の中で笑っていたのだろうか。
「閉めちゃうよ」
ドアの影から結が顔を出して鍵を鳴らした。その向こうから雪混じりの寒風が入り込んできて気付代わりに僕の頬を叩く。背中に悪寒が走り僕は風邪をひいていたのを思い出した。すっかり全身から力が抜けてどっと熱が上がった気がする。せめてもの救いはこれから朋子さんが看病に来てくれるということだ。
僕は再び這うような気持ちで二人に続いた。

# 10

いつものマンション前の坂道に差し掛かったとき僕が考えていたのは今朝の新聞の記事についてだった。今日はそのことが頭から離れなかった。

経済面の隅に母が経営する会社と他の食品会社との合併についての記事が載せられていた。

合併相手には主に冷凍食品を扱っていて一人暮らしの二十代、三十代を狙った「おふくろの味」シリーズがヒットして近年目覚ましい成長を遂げている食品会社の名前が挙げられていた。記事によればその会社は母の会社と合併して健康食品業界にも参入し、一気に押しも押されぬ国内有数の大企業に仲間入りしたい目論見のようだ。

記事を書いた人間は合併というよりは母の会社が吸収されるという表現がふさわしいと見ているようだった。母の会社は規模としては一日の長があるが合併相手の食品会社の方には現代社会の世相を反映した勢いがある。かつての成功の思い出にすがるだけのジリ貧企業にとってはその推進力にすがりたい一心だろうと記事は締めくくってある。

鵜呑みにはしたくはないが新聞が根も葉もないことを書くとは思えなかった。

父が興した会社は確かにかつて流行の波を掴んで急成長を遂げ健康食品業界の中ではある程度の地位は築いたが、やはり大手の食品会社と比べると知名度は低く、基盤も弱い。良くも悪くも強烈なリーダーシップを発揮して会社を軌道に乗せた父が急逝してからというもの、じりじりと売り上げが後退しているという情勢は否めない。母も父の後を継いで頑張ってはいるのだろうが、企業経営に特別の才覚があるわけでもなく、他企業の業界への参入や長引く不況などの影響で僕が思っている以上に会社の経営状態は悪化しているようだ。気がつけば今日の天気のように底冷えがして身動きのままなら

ない状態なのかもしれない。
今回の合併話が会社にとって良いことなのかどうかは僕には判断できない。しかし会社を他企業と合併させるという発想は母の意思ではないことは断言できる。あれだけ僕に社長就任を勧め、それがかなわぬと見るや自ら経営に乗り出した母だ。異常なまでに村石の名にこだわった母が吸収ともとれる合併話を持ち上げるとは考えられない。さしずめ母のことを良く思わない他の取締役達が勝手に合併相手を探し出してきて話題だけを先行させ母の一存ではどうにもならないところにまで既成事実を作ってしまおうとしているのではないだろうか。どうも今回の合併話には会社内部の権力争いが垣間見えてならない。
先日久しぶりに会った妹の言葉が脳裏に浮かぶ。
母が寂しがっている。
押し寄せる不況の波、冷たい重役連中の目、吸収合併の風説。この重荷はもともと虚弱体質の母の小さな身体では背負いきれるものではない。心労が重なって母の身体に悪影響を及ぼすことがないと良いが。
いっそ合併でも何でも進めて会社を他人に任せ母の身を自由にしてやりたいと僕は思う。しかしそんなことをすれば社長の座についてだけは妙に強情なあの母がひどく悲しむのは目に見えている。僕が母の代わりに社長に就任すれば母の背負う負担は軽くなるだろうが、僕の前にはまだ大学生活が二年残されていた。母にあと二年間耐える力が残っているだろうか。
ふと足元から目を上げるといつの間にかマンションのそばまで来ていた。そして僕は目の前の光景に立ちつくした。
マンションの脇にパトカーが2台と救急車が1台停まっている。一人の制服姿の警察官が難しい顔をして無線で何やらやり取りをしている。この寒い中一階の通路に人が集まっているのが見えた。人の輪は１０２号のドアを中心に出来ているようだった。
何があったのだろうか。回転するパトカーの禍々しい赤色灯がた

だならぬ事態を予想させる。毎日寝起きするマンションで警察が出張ってくるような事件が起きたとは。こそ泥なら僕の部屋は何も取るものがないので安心だが。救急車が来ているということは人の命に関わることが起きているのだろう。野次馬根性というには若干臆病な気持ちで僕は人の輪に向かった。

人だかりの中から先生が僕を見つけて寄ってきた。

「今日は帰りが早いね」

この事態に関わらず、やはり先生は落ち着いている。この状況でまさか開口一番いつもより帰りが早いことを指摘されるとは思わなかった。

「教授が風邪をこじらせたみたいで午後からの授業が休講になったんです。それよりも何かあったんですか」

恐る恐る聞いてみると先生は事の重大さを暗示するようにゆっくり一呼吸おいて口を開く。僕は先生の口の動きに意識を集中させ生唾を飲んだ。

「殺人事件だよ」

「まさか・・・」

思わずそう口にしていたが、先生の顔を見れば冗談ではないことは明白だった。

自分の住むマンションで人が殺された。しかも事件は僕の部屋の真下で起きている。誰が、誰を、何のために。聞きたいことはいくらでもあるのだが、あまりにありすぎて咽喉で渋滞して口まで出てこない。

「死んだのは１０２号の住人で酒井さん」

再び僕は驚いた。１０２号で起こった事件なのだから１０２号の住人が被害者で当然なのだが、顔を知っている人が殺されたという事実に僕は目を見張った。僕は先日すれ違った水商売風の年齢不詳の女性を思い出していた。彼女が何者かによって殺されたのだ。もう二度と彼女に「お帰り」と声を掛けられることはない。そう思うと不意に心の中にひんやりとした空虚なものを感じた。

「どいて、どいて」
部屋の中からドアを囲んでいた野次馬を煙たそうに睨みながら刑事らしき髪を短く刈り上げた男が出てきた。見るもの全てが鬱陶しいとでも言いたげに眉間に皺を寄せ、足元に唾を吐いた。まるでテレビドラマに出てくる刑事そのままのひと癖もふた癖もありそうな粘っこいいやらしい目つきをしている。
僕はその中年の刑事にどこかで会っている気がした。どこでだろう。刑事と知り合ったことなど生まれて一度もないはずだが。
彼の後ろから若干青ざめた様子の若い警察官二人が前後になって担架を持ちながらついてきた。すっぽりと全体に毛布を被せられた担架には酒井という名のあの女性が乗せられているのだろう。毛布の下で目を見開いてこちらを見つめているかもしれない。担架が僕の目の前を通り過ぎていくとき僕は毛布の下の青白い死体を想像して身震いした。
「大野さん、ちょっと」
部屋の中から若い刑事が顔だけを出し担架を見送る短髪の中年刑事を風邪気味のような鼻にかかった声で呼んだ。「おう」と返事をして大野と呼ばれた刑事は僕の前を通って部屋に引き返していった。大野のくたびれたスーツからは強烈なタバコの臭いがした。
「このマンションの住人の方は後ほどお話を窺いに行きますので部屋に戻っていてください。関係ない野次馬はさっさと帰った、帰った」
面倒くさそうにそう言い捨てると大野は僕の方に一瞥をくれ、寒い、寒い、とぶつぶつ言いながら１０２号のドアを思い切り閉めた。僕を見る大野の目に何か敵意のようなものが篭っていたようで僕は小首を傾げた。
「見つけたのはこのマンションの大家さんなんだって」
寒そうにコタツに両手両足を突っ込んで先生が事件の説明をしてくれた。

大家と言われても全然顔が思い浮かばない。それもそのはずで入居契約は斡旋会社が全てやってくれたし月々の家賃は銀行振込みなのでので大家とは一度も会ったことがないのだ。。
「酒井さんは二ヶ月間家賃を滞納していて、大家さんが今日催促に来て部屋の中で死んでる彼女を見つけたらしい。鍵が掛かっていないもんだから部屋の中に入ってみると奥の部屋で酒井さんが倒れていたと・・・」
僕は思わず身をすくめ先生に負けないぐらいコタツに入り込んだ。マンション内の各部屋は同じつくりだから丁度僕と先生が座っているこの真下あたりで酒井さんが死んでいたことになる。ひんやりとした空気の流れが僕の首筋を通って行った。
大家も大変だ。殺人事件など起こってしまったらマンションのイメージは最悪だ。気味悪がって新たな借り手などしばらく見つからないに違いない。僕も夜中になったら少し怖い気がする。１０２号はこれからどうなるのだろう。開かずの部屋として怪談話の一つでもできあがるのだろうか。
「誰が犯人なんでしょうか」
「部屋の中の詳しい様子は分からないけど、酒井さんは背中を何箇所も刺されて死んでたんだって。箪笥やら押入れやらは荒らされていたみたいだけど・・・」
「ということは」
「手口は強盗に見えるけど、顔見知りの犯行かもしれない。酒井さんの滞納は珍しいことじゃなかったみたいなんだ。家賃を滞納する人の家に泥棒に入っても何もないよね。部屋を荒らしたのは物取りに見せかけるためじゃないかな」
先生は眉根をひそめいつにも増して舌の回転が良く、事件を冷静に分析していく。先生のようにいつも落ち着いて行動できる人は刑事に向いているのかもしれない。先生には人を見る目もあるし、まさにうってつけの職業のように思える。
「ここ2，3日で、下の階からの争い声や悲鳴なんかなかったよね」

「えっ？殺されたのは今日じゃないんですか？」
「警察官が喋ってるのを盗み聞きしたんだけど、死後2，3日経ってるんだって。この寒さのおかげで死体の腐敗はあまり進んでなかったみたい」
つまり昨日、一昨日と僕は死体の上で生活していたことになる。僕は気が遠くなるような思いだった。先生が言うように殺人事件を連想させるような物音は聞こえなかったから気付かなくても仕方がないのだが、それにしてもこんな目と鼻の先で人が死んでいるのに何も知らずに暢気に暮らしていたとは、今さらながら気味が悪い。きっと酒井さんはもっと早く見つけて欲しかっただろうに。僕を恨まないでくださいよと思わず手を合わせた。
「運の良い方じゃない？大家さんが来なけりゃもっと発見が遅れてたよ」
大家さんが発見しなかったら・・・。僕は１０２号で酒井さんが腐敗していく中、何も知らずに生活している自分を想像した。そのうち下の階から生ゴミの腐ったような臭いがしてくる。変に思って最初に１０２号を訪れるのは僕かもしれない。鍵の掛かっていないドアを恐る恐る開けると強烈な死臭と共に腐りきって白骨化し始めた死体とそれに群がる無数の蛆虫を見つけることになる。
僕はそこまで想像して首を大きく横に振った。全身に鳥肌が立って酸っぱい不快感が食道を熱とともにせり上がってくる。口の中に唾液があふれてきた。
「村石さーん」
部屋のドアを無造作にノックする音が聞こえた。玄関に向かうと「先ほどの刑事ですが」と投げやりな感じの声が飛んできた。ドアを開けると先ほどの大野という刑事と若い刑事のコンビが立っていた。大野が背広の内ポケットからチラッと黒いものを見せる。はっきりとは見えなかったが警察手帳のようだ。善意の第三者に事情を聞くのならもっとはっきりと手帳を示して身分を証明すべきだと僕は思った。どうも大野という人間に好意を覚えられない。

「お前がやってみろ」
大野は後ろの刑事にそう言って僕と先生から顔を背けるように後じさりし向こうを向いてタバコに火をつけた。言われて若い刑事が手にした手帳に目を落としながら僕と先生に対面した。
「えーっと、２０３号、２０３号」
真面目そうな刑事だと僕は思った。彼の真っ直ぐ太い眉やきりりと引き締まった口がそう思わせるのかもしれない。ただ、目が充血していて何となく顔色が悪い。鼻にかかった声は風邪のせいだろう。僕は思わず一歩身を退いた。治りかけの風邪がぶり返したらたまったものではない。
「あなたが村石さんですか。こちらは？」
「２０５号の住人です」
「ということは・・・榊原さんですね」
先生はこくりと頷いた。ふんふんと刑事は何やらメモをとっている。その向こうで大野はこちらに背を向け西日に向かって煙を吐いていた。その後姿はやはりどこか見覚えがある気がした。
風の向きで煙が若い刑事の顔にまとわりつき彼は二度咳をした。それでも大野は全く気にする素振りを見せない。メモを取っていた刑事が一瞬手を止めて目の端で大野を睨むのを僕は見逃さなかった。この二人はチームワークが良いとは言えそうにない。
「この二、三日で下の部屋から悲鳴とか言い争う声なんか聞きませんでしたか？」
「特に何も」
僕はゆっくり首を振った。
「生前酒井さんとは面識がありましたか？」
「道ですれ違ったり、ゴミを出すときなんかに挨拶したりする程度です」
「榊原さんはいかがですか？」
「彼と同じです」
「特に親しくはなかった、と。他にこのマンションで酒井さんと親

しかった人って知りませんか？」
僕は水野君江が死んだ酒井さんと口論していたのを思い出していた。親しくはないがある種深い仲だとは言えるかもしれない。僕は口にはしていなかったが酒井さんが殺されたということを聞いてからずっとあの夫婦のことが気になって仕方がなかった。
「わかりません」
僕が黙っていると先生がはっきりと答えた。先生はわざと水野夫婦のことを黙っているのだ。あれだけの騒ぎを起こしたのだから彼女達の仲を警察が知るのは時間の問題だとは思うが僕も先生に従って頷いた。自分の言葉で大野に水野さんと殺人事件が結びつくようなことは伝えたくない気がした。
「何箇所も刺されていたんですか？」
先生が僕の前に身を乗り出すように出てきて刑事と向き合った。
「そうですね、背中に7箇所、腕にもちょっと」
「凶器は？」
「まだ見つかってないのではっきりとは言えませんが、どこの家庭にでもあるような果物ナイフじゃないですかね」
「おい、べらべら喋るな、横山」大野がタバコを足でもみ消しながら、からみつくような目で僕と先生を覗きこんできた。「おたくら本当に何も知らないんですね？何か思い出したらすぐに警察に連絡くださいよ。それじゃ、どうも」
横山と呼ばれた若い刑事は小さな声で大野に謝り、僕と先生に向かって「ありがとうございました」と軽く頭を下げてドアを閉めた。
僕はこれ以上大野という刑事に階を上がって欲しくないと思った。あの大野の毒々しい目に凝視され人の悪さの漂う口調で問いただされたら大人しい朋子さんは何も言えないだろう。やましいことがなくてもきっと後ろめたいような不快な気持ちにさせられてしまうに違いない。
僕は大野と組んでいる風邪気味の横山という刑事が憐れな気がした。あの大野と組んでいてはストレスがたまって風邪の悪化は避け

られそうにない。
「気になるのは１０１号の水野さん夫婦だね」
刑事がいなくなると先生はボソッと言った。やはり先生はわざと伏せていたのだ。あの場面で水野君江の乱心振りを話せば彼女が犯人だと示すようなものだ。あの夫のことを思い出すととてもそんな真似はできない。会社ではリストラにあい、妻は気がふれて殺人を犯したとあっては我が身の不幸を呪わずにはいられないだろう。
「実は一昨日から水野さん夫婦を見かけないんだよな」
先生は苦渋に満ちた顔でつぶやいた。先生も彼女の酒井さんに対するあの恐ろしいまでの嫉妬心が殺意に変わったとしてもおかしくはないと思っているようだった。仲直りを口実に酒井さんの部屋に上がり隙を見て酒井さんの背中にナイフを突き立てる。取り付かれたように何度もナイフを振り下ろす彼女を想像することは難くない。警察が水野君江に的を絞り捜索に掛かるのはそう遠くないだろう。
「そう言えば、あの大野って四角い顔の刑事、見覚えない？」
先生も同じことを思っていたようだ。とすると、大野はこのマンションに関係がある人間ということになる。
「僕もそう思ったんですけど、どこで見たのか全然思い出せないんです」
マンションの住人だったら顔ぐらいは分かっているし、この辺りで刑事の世話になるような事件が起きたこともない。テレビや雑誌に出ていたわけでもないだろうし。
「三階だよ」
僕はハッとして手を叩いた。数日前３０６号から飛び出してきて先生と僕を突き飛ばして逃げた殺人未遂犯の姿が頭の中にひらめいたのだ。背格好、あの短く刈り揃えた四角い頭は確かにそっくりだ。刑事なら身体が引き締まっていて当然だ。「外回りの仕事」と見切った結の目も確かだったと僕は感心した。
「あの男！あの男、刑事なのに買春なんかして、挙句に殺人未遂まで・・・」

「刑事も人間だからね」
人間という言葉で片付けてしまうには僕にはいささか抵抗があった。そんな理屈がまかり通ったらこの世に秩序など存在しなくなってしまう。しかし先生は「秩序が壊れるから面白いのだ」とでも言いたげに微笑を湛えている。
「法を守るべき刑事が欲に溺れて娼婦を買う、か。なかなかおもしろい」
先生は遠い目線になって物思いに耽り出した。先生の妄想の中であの大野という中年の刑事はどんな世界に堕ちているのだろうか。
「今日は晩ご飯いらないよ」
いきなり立ち上がったかと思うと先生は飛ぶように自分の部屋に戻っていった。
先生はこれから何時間か妄想を文字に具現化する作業に没頭するのだろう。僕は完全に自分の世界に篭りきる先生を想像する。ペンは氷の上を滑るように滑らかに踊り、命を吹き込まれた無数の紙は羽を広げて舞い上がる。僕は一度先生の執筆中の様子を覗いてみたいと思った。その背中には神が降り立つ様子が見えるような気がするのだ。

# 11

せいせいした

全身を使って大きく深呼吸をした横山隆は怒りを通り越した境地に入っていた。考え方を変え、気楽になったのだと思えば肩の力も抜ける気がする。常にしかめっ面で威張りくさったあの大野のぼやきにこれ以上付き合わないで済むのだから。

「しかし、寒いな」

言いたくなくても思わず口に出てしまう。背筋に冷水が伝ったような悪寒が走って横山は反射的にコートの襟をすぼめた。

世間は暖冬だと言っているが、いくら例年より暖かくても冬という季節はやはり寒い。おまけに今朝から体調が良くない。何となく身体が重いし鼻水が止まらなくて頭がぼーっとする。つまりは風邪なのだ。横山は昔から毎年冬になると必ず一度は風邪をこじらせて熱を出し二、三日寝込まなくてはならなくなる。今まで例外があった記憶はない。この調子でいけば間もなく何をするのも嫌になるぐらいに熱が出て身体が動かなくなるだろう。すでに微熱があることは体温計を使わなくても毎年の経験で分かっていた。一度ひいてしまえば免疫が出来るのかある程度無茶をしても平気なのだが、その年に一度の風邪がかなりつらい。

一人暮らしで彼女もいない横山にとっては病気で寝込むということは生死に関わる事態だと言っても過言ではない。何か食べなくては治るものも治らないのだが作ってくれる人がいない。寝汗をかくから着替えなくてはならないが洗濯してくれる人がいないから着るものがなくなってしまう。掃除もしないし、換気もしない。全く不衛生な生活になってしまうのだ。横山はいつ寝込んでもいいように帰りに買えるだけの食料を買っておこうと思った。

さっさとこの事件を解決させてしまわないと

そう思うと一度はおさまった大野への怒りが再び胸にふつふつと

こみ上げてくる。
大野と組んで捜査をするのは今日が初めてだった。
今年は全国的にインフルエンザが猛威を振るっていて最近署内でもみんな高熱を出してバタバタと音をたてるように次々と寝込んでしまっている。結局残った寄せ集めの人手で捜査に当たることになり、真面目な横山は風邪を押して仕事に出た結果、大野と組まざるを得なくなったのだ。
「お前も風邪か」
顔を見るなり大野は鼻水をすすっている横山に対して蔑みの色を浮かべた。
「すいません」
横山は素直に謝った。周りの人間は寝込んでいるところを使命感で身体に鞭打って出てきたのだから同情や優しい言葉の一つでも、などというものは大野の口からは全く期待していなかった。事実として風邪をひいているのだから健康管理が甘いと言われるのは仕方ない。それに大野という人間についての噂は耳にしていたのでこの程度の冷たい態度は予想の範囲内だった。無理をして出てきたら大野と組む破目になったのは運が悪かったと思うしかない。せいぜい大野にうつさないように気を配ってこれ以上嫌味を言われないようにしないと、と横山は思っていた。
事件は殺人だった。サクラビルという三階建てのマンションの一階に住む三十五歳の独身女性が何者かによって刺殺されたのだ。荒らされた部屋の形跡から強盗の線も無視できなかったが、被害者の刺され方から怨恨の可能性が高いように思われた。酒井という名の被害者は背後から果物ナイフのようなもので合計十一箇所も刺されていたのだ。
捜査はベテランの大野の指示の下に進められた。大野は現場の部屋の隅で椅子に腰掛けタバコを吸い、文字通り顎で横山を使った。大野は風邪をひいている横山の横顔に煙を吐きかけ、横山のやることに注視し、何か横山がミスをすると目ざとく見つけて「なっさけ

ない」と連発した。
横山はもともと体育会系の人間で学生時代には上下関係の厳しい環境で生活してきたので、就職してからも先輩の言うことには少々無茶でも従順に従ってきたが大野の嫌味は腹に据えかねるものがあった。それでも午前中は何とかこらえ、大野のためにタバコまで買いに走った。
昼に近くの中華料理屋で脂身ばかりのまずいチャーシューを使ったチャーシューメンと餃子を食べ、聞き込みを始めるころになると大野は何故かむっつり黙り込むようになり何か考え事をしている様子を見せ始めた。そしてサクラビルの二階の部屋を全部尋ね終わった後いきなり大野は「帰る」と言い出したのだ。
「腹が痛い、後はうまいことやっといてくれ」
そう言うと大野は大仰につらそうな顔を見せ意味ありげに脇腹をさすり、おー痛え、痛え、と呟きながら一人で階下に下りて行ってしまった。「大野さん」と呼んでも手を上げて見せるだけだった。寒風吹きすさぶ高台のマンションの二階から横山は小さくなっていく大野の背中を呆然と見送るしかなかった。
気がつくと鼻水が上唇の辺りまで垂れている。横山は慌てて手の甲でそれを拭った。するとすぐにくしゃみが出てまた鼻水が垂れてくる。「畜生」とつぶやいて横山は大野の後姿を思い出した。
他人の風邪にはうるさいくせに仮病を使って仕事をさぼりやがった。横山は大野の腹痛は嘘だと見破っていた。大野には仕事をさぼる理由が他にあるのだ。それが何かは横山には見当がつかなかったが、もうそれもどうでもいいように思えてきた。なんと言っても一人の方が気が楽だ。この状況は自分にとってラッキーなのだ。
犯人の目星はついていた。「１０１号の水野君江で決まりだ」と大野が偉そうに言っていたが、誰が見てもそう思うだろう。
これまでの聞き込みの結果、数日前に彼女が被害者と激しく口論していたことは分かっている。そのときの彼女の狂乱振りは尋常ではなく、精神的に病んでいたとの情報もある。一昨日から夫の明彦

と共に君江の姿が消えていることで犯人が彼女だということは決定的に思われた。令状をとって家宅捜索をすればはっきりするだろうが、捜査はすでに誰が犯人かではなく、水野夫妻はどこに消えたかが焦点になっている。

大野はこれ以上の聞き込みが無駄足だと思ったから現場を離れたのかもしれない。横山も１０１号の家宅捜索で全ての決着がつくと思っている。凶器やら血のついた衣服やら精神病関係の薬やら君江の犯行を裏付けるような証拠が雨後の筍のようににょきにょき現れるだろう。被害者の部屋から検出された指紋と君江の指紋が一致すれば確定だ。後は水野夫婦の過去を洗い交通機関や宿泊施設への聞き込みを行って二人の潜伏先を徐々に炙り出していくだけになる。しかし、だからと言ってこの三階の住人に対する聞き込みを放棄した大野の態度を横山は許せなかった。いくら大勢に影響が少ないといっても何らかの新たな情報が発見できる可能性がないとは言えない。可能性がある限りしらみつぶしにあたっていくのが刑事の職分だと横山は信じている。

横山は鼻をすすりながら次々と呼び鈴を押していった。しかしどの部屋も反応がなかった。平日の昼間である。普通の社会人なら仕事に出ていて留守が当たり前だ。仕方ないとは思っても横山は空気を掴むような手応えのない空しさを感じた。身体の重さが精神的な疲労を倍化させる。

高台にあるマンションの三階からは遥か遠くの天地の境まで街並みを一望できた。眼下に広がる冬の景色はどこまでも灰色で寒々とした感を抱かせる。不意に大野の行動が正解だったという考えが頭を掠める。仮病でも何でも使って今日は寝ているべきだったか。実際に俺は発熱という大義名分がある・・・。「いかん、いかん」と横山は頭を振った。そんなことができない性分だというのは横山自身が一番良く知っている。今日はついていないと諦めるのが一番なのだ。

大家によると３０５号は空室で、残りは３０６号だけだ。横山は

さっさと終わらせて暖かい署に戻りコーヒーをすすりたくなった。
不謹慎とは思いながらも、こうなったら居留守でも何でもいいから出てこないで欲しいと願いながら、形だけのつもりで３０６号室の呼び鈴を鳴らした。
「はーい」
すぐに部屋の中から若い女性の声がして横山の心は久々に感じた手応えへの喜びと帰るのが遅くなることに対する苛立ちがない交ぜになった。
まもなくドアが開いて出てきたのはセーラー服姿の高校生だった。確かこの部屋は岡田という三十歳の男性が借主だったが、彼女は何者だろうか。
彼女は幼さを印象付ける大きな目の可愛らしい顔立ちに、その若さに似つかわしくない丁寧な化粧を施している。ボーイッシュなボブの短い髪がその妙に色っぽい化粧とアンマッチに見えた。足元はこの寒いのにもかかわらず生足に紺色のハイソックスだ。きっと風邪とは無縁の存在なのだろうと横山は思った。
彼女は無言で横山を見上げた。彼女が何やら不機嫌そうなのは初対面でも分かった。
「あなた四角い頭の短足おじさんの知り合い？」
「えっ？ああ、大野さんのこと？知り合いと言えば知り合いだけど」
「名前なんか知らないけど、遅いじゃない。とにかく寒いからさっさと中に入ってよ」
大家から聞き間違えたのだろうか。女子高生が暮らしているなどという情報はなかったはずだが。
横山が手帳を探っているとその女子高生は強引に横山の手を引っ張って部屋の中に入れドアを閉めた。
「ちょ、ちょっと、君」
「何が、君よ。三十分も待ったのよ。それよりあのおじさんは？」
「君、大野さんを知ってるの？大野さんはちょっと腹痛で帰っちゃって僕一人なんだけど」

「ちょっと・・・三人でするつもりだったの？聞いてないわよ、そんなこと。客は選ぶことはしないけどこっちにも心の準備ってものがあるんだからちゃんと事前に言ってくれなきゃ困るわ。ったくあの親父ったらふざけるのもほどほどにしてよね」

彼女は呆れ顔で首を左右に振りため息をついた。眉間に皺を寄せて「さすがの私もキレるわ」などとぶつぶつ独り言を言っている。

横山は彼女が何を言っているのかさっぱり分からなかったが、それよりも彼女が大野を知っているのが不思議だった。それとも、大野と背格好の似た別人を待っていたのだろうか。

「まあ、いいわ。それよりもさっさと頂戴」

彼女は横山の前に手の平を差し出した。どうやら何かを請求されているようだ。何を出せば良いのか皆目見当がつかず横山は首を傾げた。

「とぼけないでよ。ただでやるつもり？」

みるみる彼女の顔が紅潮していく。大きくて可愛らしい彼女の目が少し吊り上った。横山は薄々事態が飲み込めてきた気がした。

横山は左の内ポケットを探った。その仕草を財布を探っているのと勘違いしたのか傲慢な女子高生はさらに手を横山の顔に近づけた。

「こういう者なんですが」

手帳を取り出して彼女に見せると彼女はさっと表情を強張らせた。心にやましいことのある人間特有の左右に落ち着かない瞳だ。彼女が売春していることは明らかだった。彼女が頭の中で必死に言い逃れる術の取捨選択を行っていることがよく分かる。

「そういうことなら仕方ないわね」

彼女は開き直った表情になったかと思うと身を翻して部屋の奥に戻っていった。

「こっちにどうぞ。ゆっくり話しましょ」

部屋の奥から暖かい空気が流れてくる。横山は彼女を追って自然に足を踏み出していた。

彼女は売春を認めたようだ。何でこんな日にと思わないでもない

が面倒でもこういう状況になっては彼女を署に連れて行くしかない。
部屋の中に入ると彼女はセーラー服のスカーフに手を掛けて横山を待っていた。
「ここじゃなんだから署の方に」
横山がそう言った途端、彼女はにこりと笑っていきなりセーラー服を捲り上げた。
「ちょっと、君！」
横山の目に白い肌と水色のブラジャーが飛び込んできた。童顔な顔立ちに似合わない豊かな胸の膨らみに横山の目は釘付けになった。横山は自分が上気して顔が赤くなっていくのが分かった。
彼女は止めようとする横山に脱いだセーラー服を投げつけ、横山が怯んだ隙にスカートのファスナーを下ろした。彼女が手を離すと横山の目の前でサッとスカートが床に落ち、彼女の裸体を覆うのは下着とハイソックスだけとなった。横山は彼女の白く輝く裸体に生唾を飲み込んだ。全身が重く熱かった。
「私の言うとおりにしないと大声出すわよ。刑事が女子高生をレイプしたって言いふらすからね」
横山は金縛りにあったように身動きがとれなくなった。彼女の言葉に尻込みしたわけではない。彼女の見事な裸身に目と心をすっかり奪われていたのだ。
横山は女を知らなかった。二十五年間生きてきて女性と付き合った経験は一度もない。友人の中に彼を風俗に誘う者もいたがそれも彼は頑として断ってきた。そういう場所に足を踏み入れること自体が恥ずかしくて耐えられなかったし、金を出して女体を求めるという淫蕩な行為を不健全で低俗なものと忌み嫌っていた。
横山は愛を伴わない性交渉など考えたくない古風なタイプの人間だ。極端に言えば互いに未来を誓い合う結婚という儀式の後に初めて交わるというのが横山の理想であり、この歳になってしまってはその方が潔いとさえ思っていた。
しかし、実際惜しげもなく瑞々しい肌を露わにしている女性を目

の前にすると横山は息が止まるほどの胸苦しい欲望を感じずにはいられなかった。今となっては禁忌も信念も風前の塵だった。横山は自分が刑事であることも目の前の女が法に触れる売春婦であることも完全に忘れてしまっていた。

「悪いようにはしないわ。必ず満足させてあげる」

彼女はねっとりとした口調で直立不動の横山の耳に「座って」と囁いた。女子高生に肩を押されて横山は催眠術に掛かったように何の抵抗もなくベッドに腰掛けた。横山の心臓は口から飛び出しそうなほど跳ね回っていたが身体は全く言うことを聞かず身じろぎ一つできなかった。彼の目は獰猛な獣のそれのように獲物である彼女を中心に捉えて逸らすことができない。彼女はその横山の膝の間に割って入り、彼をさらに挑発するように眼前でブラジャーを外した。乳房の先端に咲いた小さく可憐な乳首が軽く揺れるのを横山は網膜に焼き付けた。

彼女は腰を屈め横山に口付けた。彼女の唇が横山の硬く分厚い唇に重なると横山は全身から力が抜けていくのを感じた。そのまま彼女の甘い唇に押され彼女に乗りかかられると気が遠くなるようだった。女性の肌のふくよかさは想像を絶する快楽だった。

「舐めて」

彼女は横山の頬を挟むように乳房を垂らした。その依頼に横山の胸はさらに激しく高鳴ったが、喜びが大きい分二つの乳房を両の頬に感じてどちらの乳首を吸うべきか真剣に悩んだ。迷った末に彼女の左胸を選んだ。そちらの乳房の方が若干大きく見えたからだ。

口に含んだ蕾は得も言われぬ感触で、横山は乳児が母親の乳房を求めるように一心不乱にむしゃぶりついていた。

## 12

鍋がぐつぐつとおいしそうな音を立てている。そろそろかな、と先生が言うのを待って僕が鍋の蓋を開けた。

湯気が入道雲のように立ち昇った。わぁっ、とりょう君と朋子さんが嬉しそうに顔を見合わせている。鍋の中にはあふれ出さんばかりの野菜に囲まれて鳥肉の団子が美味しそうに浮かんでいた。

僕の風邪が完治したのを祝おう、と言ってくれたのは朋子さんだった。

３０６号で結の殺人未遂の騒ぎがあった後、朋子さんは電話での約束どおりに僕の部屋に看病に来てくれた。しかしそのときは薄着で騒ぎに駆けつけたせいか、はたまた結の裸を見てしまったのが原因なのか、僕は風邪をこじらせて三十九度を超える熱を出してしまい、せっかく朋子さんが側にいてくれるのにも関わらず完全に眠り込んでしまったのだ。目が覚めると朋子さんの姿はなく「りょうが拗ねますので今日は帰ります。熱が下がらないようでしたら電話してください。一分で来ますから。明日また様子を見に来ます。早く良くなってね。治ったら快気祝いをしましょう」と書いた置手紙があった。

手紙の言葉どおり朋子さんは翌日もそしてその次の日も僕の部屋に顔を出してくれた。僕の身体は朋子さんの顔を見るたびに元気になっていくようだった。完全に治るまでは時間が掛かったが徐々に体調が回復していくのが実感できてくると今度は治りきってしまうのが惜しいと思うようになっていた。

ようやく普通に食事ができるようになり、大学にも行けるようになると今度は階下で未遂ではない殺人事件が起こってしまった。同じマンションで何かを祝うということが不謹慎な感じがして快気祝いは一旦取りやめになったのだが、一週間が過ぎて、「もう、ばちは当たらないよ」と先生が朋子さんに声を掛けてくれて今日ようや

く開催されたのだ。
先生は「こっちももう大丈夫」とビールを持ってきてくれた。僕は特に今日は体調が良くいつもは苦いと思うだけのビールも麦芽の香ばしくて爽やかな味がした。
「あつ、あふ、ふ」
りょう君が朋子さんに取ってもらったものを悪戦苦闘しながら食べている。手にしたフォークがまだ上手に使えず、食べたいものをなかなか口の中まで運べない。それでも鍋がすっかり気に入ったようで脇目も振らず白菜やシメジと格闘しているりょう君の様子には思わず誰もが微笑んでしまう。
「えらいね、野菜もしっかり食べてる」
先生が目を細めて感心している。
「不思議とお鍋のときは何でも食べるんですよ」
そう言って朋子さんがりょう君の頭を撫でた。りょう君は母親の手にも気付いていないのか無心で鳥団子を口に運びその熱さに目を白黒させている。
僕はりょう君が脳震盪を起こして病院に駆けつけた日のことを思い出した。あのとき以来朋子さんがりょう君を折檻する声は聞こえなくなっていた。僕に頬を平手打ちされ、僕の膝の上でこれ以上出ないというくらいに涙を流して朋子さんは上手い具合にストレスが発散できたのだろう。少なくとも僕はそう思っている。朋子さんが過去の境遇を語ってくれたタクシーの中の様子を僕は心の中で甘い秘め事として押し花のように大切に保存し先生にさえ話していない。あのときのことを思い出すと僕と朋子さんが付き合うことになってもまんざら不釣合いではないように思う。酔いも手伝って思わずにやにやとしそうになる頬に慌てて力を入れて僕はさりげなく朋子さんを盗み見た。
今、りょう君を見つめる朋子さんは慈愛に満ちた母親の顔になっている。りょう君は満腹になって眠たくなったのか朋子さんの膝に寄り添う形で横になり執拗に目を擦っている。朋子さんは目を細め

てりょう君の頭を優しく撫でている。その顔を見ると朋子さんとりょう君の間に入るのは無理なようにも思えてくる。
朋子さんにはりょう君しか見えていない
そう思わずにはいられないほどりょう君を見つめる朋子さんの目には愛情が込められていた。その横顔はどこか神々しいくらいの輝きを放っている。僕は朋子さんに女を見ようとする自分の目が卑しく汚らしいように思えて俯いた。
顔を起こすと朋子さんと目が合った。彼女の目は僕の様子を体調が悪いと勘違いしたのか「大丈夫？」と聞いている。僕は朋子さんしか見えなくなり呆けた顔で頷き返した。朋子さんに心配されていると思うだけで僕はもう胸が一杯になっていた。
「誰か来たみたいだよ、村石君」
僕の淡い恋心に冷水を浴びせるように先生が僕を呼んだ。嫌なタイミングで声を掛けるものだと心の中で先生を睨んだが、僕も確かにドアがノックされたような気がしていた。
「こんばんは」
若く元気な女性の声がドアの向こうから聞こえてきた。僕の知っている人間でこんなに陽気な声を出す奴は妹の由紀ともう一人しかいない。
僕がドアを開けると案の定、結が立っていた。相変わらずコートの内側にセーラー服が見える。本当の高校生ではないことを知っているから高校生を演じている結が少し滑稽に思える。
よく見ると結の後ろの薄暗がりの中に見覚えのある男性が立っていた。
「刑事さん！」
結の後ろに立っているのは先日酒井さん殺しの事件を捜査のために僕の部屋にも事情聴取にきた太い眉の刑事だった。
「先日は失礼しました。自分は横山と言います」
寝入り端のりょう君が起きてしまいそうな大声での挨拶だ。彼も風邪が治ったようで今日は声が鼻にかかっていない。そのせいか先

日の聞き込みのときの頼りなさそうなイメージはなかった。背筋をしっかりと伸ばした直立不動の姿勢の彼は今にも敬礼をしてきそうだ。真っ直ぐこちらを見つめる視線に彼の硬派で真面目な人柄が表れている。
「ちょっと、助けてよ。お願い」
「何？どうしたの？」
「先生もいるんでしょ？ちょっと上がらせて」
結は僕の脇をすり抜けて勝手に部屋の奥へ入っていった。
「自分も失礼いたします」
結の後を離れるものかという感じで横山刑事も僕を押し退けて部屋に入ろうとする。僕は訳が分からず不承不承彼も部屋の中に入れた。
「あら？先生って結婚してたの？」
勘違いして当然だと僕は思った。しかし、結の目には朋子さんが先生の妻として映ったのが僕としてはやはり悔しかった。
「違う、違う。彼女は３０２号の橋本さん。彼はりょう君といって橋本さんのお子さん。俺とは血は繋がってないよ」
先生が説明すると朋子さんは結に向かって軽く会釈した。結も大げさに頭を下げて挨拶を返した。横山刑事も結に倣って深々とお辞儀をした。
「このマンションの住人ってみんな仲が良いのね」
「みんなじゃないよ。俺と先生と橋本家は特別なの」
「あら、私もみんなと仲が良いじゃない」
「結は住人じゃないだろ」
「かたいこと言わないの」
会うのは2回目だが僕は結に対しては驚くほど気兼ねなく話せた。同い年というのもあるだろうが、それよりも最初の出会いが強烈過ぎて今さら畏まる方が不自然だからだろう。僕にとってはこんなにフランクに話せる女性は家族以外で結が初めてだった。
「私、何だかお邪魔かしら」

急に割り込んできた二人の迫力に気圧されたのか朋子さんが所在無げに完全に眠ってしまったりょう君を抱きかかえて座っている。
「そんなことはないですよ。朋子さんが気にすることなんかありません」
僕は慌てて朋子さんをひき止めた。結のために朋子さんと一緒に居られる時間が削られるなんて僕には我慢できない。
「そうそう。どうぞ気になさらずに。かえって聞いてくれる人が多い方が良いわ」
朋子さんは「とりあえずりょうを寝かせてくる」と部屋から出ていった。僕は仕方なくテーブルの上を片付けて湯を沸かし全員分のコーヒーを淹れた。先生だけには例のごとくホットミルクだ。横山刑事は正座をしたまま固まっているので一応「楽にしてください」と声をかけたが「ありがとうございます」と言っただけで一向に足を崩そうとはしない。彼は何か意を決した深刻な顔つきをしていた。後には退かないという気合がその太い眉の辺りに漲っているように見える。容易な事態ではないことが分かって僕は心の中で身構えた。
「ちょっと聞いてくれる？」
結はコーヒーには手をつけず僕と先生の顔を交互に見つめた。
「聞いてるよ」
先生がホットミルクに息を吹きかけながら結を見た。
僕はこの二人が今から何を言い出すのかはさっぱり読めなかった。結は売春をやっている。その結が刑事と一緒に居るのはただ事ではない。しかし横山刑事は結を捕まえようとはしていないように見える。二人の様子を窺うと明らかに結の方が立場が上に見えた。
先生は興味津々と言った様子で二人に熱い視線を送っている。きっとこれから二人が話すことをヒントに官能を追求するのだろう。
「この人ね、私と結婚したいって言うのよ」
「結婚？」
驚いた声を出したのは先生だった。僕はあまりに突拍子もない話に飲みかけたコーヒーをまるで漫画のように吹き出してしまった。

「ちょっと。汚いわね」
「ごめん、ごめん。あまりに話が唐突だったから」
僕は謝りながら慌ててティッシュでコーヒーが飛び散ったところを拭き取った。幸い誰にも僕の放水の被害は及んでいなかった。僕は胸を撫で下ろして念入りにコタツ布団やカーペットをティッシュで押さえた。
本気なのだろうか
僕は訝って手は動かしながら結と横山の顔をチラチラと窺った。しかし横山刑事の神妙な顔を見れば結の言っていることが冗談ではないことが分かる。彼は真っ直ぐに結の横顔だけを見つめていた。
「結ちゃんはこの刑事さんと知り合いだったの？」
仕切りなおすように先生が口を開く。僕もそこが知りたかった。
「知り合ったのは一週間前」
結はそのときのいきさつを相変わらず惜しげもなくあけすけに話した。
横山刑事が聞き込みで結の部屋を訪れたこと。結がその横山刑事を客と勘違いしたこと。彼が刑事と知って開き直った結の行動。されるがままだった彼の様子。結の話は聞いているこっちが赤面してしまう。当の横山刑事は顔から火が出そうなくらいに首まで赤く染めて小さく俯いていた。僕は朋子さんが居なくて良かったと思った。こんな話はとても朋子さんには聞かせられない。
「本当に初めてだったんですか？」
先生は目を爛々と輝かせて横山刑事に質問している。横山刑事は顔を起こすことなく頷いた。とても相手の目を見て返事をするなどできないという様子だった。
「感動しました」
彼はぼつりとつぶやいた。その大きな身体には似合わない消え入りそうな声だ。さっきまでの威勢は完全に消えてしまっている。
「そんなに良かったんですか」
「はい」

即答する横山刑事に初めて結が少し照れた様子を見せた。はにかみながら横山刑事を流し見る結の潤んだ目が妙に大人の色香を醸し出している。

「そりゃあ、私が本気でサービスしたんだからね。感動もするでしょうよ。でもね、それは私が売春をやっていて、あなたが警察手帳を見せたからであって、あなたのことが好きだから丁寧にしてあげたわけじゃないのよ。分かる？」

結の諭すような声に横山刑事はさらに小さくなっている。主導権は完全に結が握っている。どちらが刑事で犯罪者なのか疑いたくなるような構図だった。仮に結婚したらと想像すると僕は横山に考え直すことを勧めたくなった。彼が結の尻に敷かれて彼女に毎日のように小言を言われている姿が滑稽なくらい鮮明に目に浮かんでしまうのだ。

「でも、自分は結さんに惚れてしまいました。もう結さんが他の男性に同じ事をするのは耐えられません。だから結婚していただくしかありません」

「これなのよ。私はまだ結婚なんて全く考えてないし、自分の身体を商売に使うのも好きでやってるの。ねえ。この人に何とか言ってあげてよ」

結は完全に呆れ顔だった。

きっと結は警察に捕まりたくない一心で横山刑事を組み敷いたのだろう。自分の経験と持っている技を総動員した結の奉仕はそのときは功を奏したかに見えたが免疫の全くない彼には効き過ぎてしまったようだ。

僕は横山刑事とコンビを組んでいた四角い顔の刑事を思い出した。横山刑事もまさか捜査の相棒が客として金で結の身体を買い、先日その結を絞め殺そうとしたなどとは夢にも思っていないだろう。この刑事のコンビは結の身体で繋がっている。仮にこの二人が結婚したらあの大野という刑事はどんな顔をするだろうか。

そこへりょう君を寝かしつけた朋子さんが帰ってきた。僕はどう

やって朋子さんに事の次第を話すか悩んだ。この二人の関係はオブラートに包みようがない。先生もどう説明したらいいか分からないようで僕としばらく思案顔で見つめ合った。
僕と先生の様子に痺れを切らしたのか結が大きな声で沈黙を破った。
「初めまして、結と言います。奉仕活動をしているフリーターです。こっちは横山さんっていう刑事さんです。一週間前一階で殺人事件が起こりましたよね。彼はその捜査をしてるみたいです」
先生が唸った。「奉仕活動」という言葉に一本とられたという顔をしている。
僕は結の言葉で酒井さんの事件を思い出した。後で警察が誰を犯人だと見ているのか彼に聞いてみたいと思った。水野夫婦はまだ姿を消したままで逮捕されたというニュースは見ていない。
「高校生じゃないの？」
朋子さんは「フリーター」という言葉に疑問を持ったようだった。
「違います。年齢は保君と同じ二十歳です。セーラー服は私のユニフォームのようなもので・・・」
「夜のお仕事っていうこと？」
「まあそのようなものです」
「へぇ。私も少し前まではクラブでホステスしてたのよ。でも結ちゃんはそれとはちょっと違うみたいね」
「私の場合は正確にいうと売春です」
「なるほど。それでこちらがお客さん？」
「そのとおり」
結と朋子さんは見つめ合って笑いだした。馬が合うというのか二人の会話はまるで旧知の仲のようにテンポよく弾んでいく。
僕は朋子さんが「売春」という言葉にも顔色一つ変えなかったことに驚いた。
僕と先生が気を揉む必要など何もなかった。よく考えれば朋子さんは僕なんかよりもはるかに人生の辛酸を味わっている大人の女性

だった。男女の惚れた腫れたどころか将来を誓い合った男性との離婚まで経験してる苦労人なのだ。
「で、どこで結ちゃんはこちらの二人と知り合いになったの？もしかして・・・」
朋子さんが意味深な目で僕と先生を交互に見る。彼女が何を考えているかは明白だった。
「違いますよ！」
僕は大きく手を振って否定した。
「その慌て方はますます怪しい」
朋子さんは疑いの眼差しだ。
「ちょっと、誤解ですよ。ねぇ、先生。結も何とか言ってよ」
朋子さんから疑いを掛けられても先生は顔色一つ変えず、まるで他人事のように僕を見て笑っていた。どうして平然としていられるのか分からない。
「そういう関係なんですか？」
横山刑事まで誤解している。腹に響くどすの利いた声で僕を圧迫する。目がすわっているから怖くて仕方がない。
「だから違いますって」
「二人は私のお客さんじゃないわ。この辺りで私が暴漢に襲われそうになったのを助けてくれたのよ」
結は先生と僕の盗聴を隠しつつ朋子さんと横山刑事の誤解を解いてくれた。朋子さんは最初から冗談のつもりだったらしくすぐに笑って謝ってくれたが、横山刑事は、襲ってきたのはどんな風体の人間だったかを何度も聞いてきて僕と先生を閉口させた。まさか、あなたのパートナーですよ、と言うわけにもいかない。
結は横山刑事の話を遮るように横山刑事との出会いを再び事細かに朋子さんに語って聞かせた。朋子さんは特に頬を赤らめるわけでもなく、適度に相槌を打ったり軽い質問を交えたりして結の言葉に耳を傾けていた。横山刑事はまた顔を真っ赤にして穴があったら入りたいという感じで小さくなっている。

「結婚かぁ・・・」
朋子さんは腕組みをして少し遠くに視線をやった。僕はその眼差しに歯痒い嫉妬を感じた。
朋子さんの目は前夫を見ている。今の形はどうであれ、彼女が一人の男を愛して、その結果結婚し家族となって子供を生んだ事実がある。その事実は僕がどれだけ朋子さんを愛しても拭い去ることはできない。万が一朋子さんと結ばれることになっても僕は彼に対する羨望と嫉妬を常に心のどこかに飼い続けるのだ。時おりその飼い犬に手を噛まれ痛い思いをすることになるだろう。僕は怖いような気持ちで朋子さんの次の言葉を待った。朋子さんが結婚についてどう語るのかは少なからず僕の恋愛に影響を与えることは間違いない。
「私ができちゃった結婚したのも今の結さんの年齢のときだわ」
結は「そうなんだぁ」と大きな声を上げて驚いた。結婚などしたくはないと言いながら結の目は結婚について語る朋子さんに集中している。横山のプロポーズがあまりにも突然だったがために驚いただけで結もまんざらではないのかもしれない。
「長続きしなかったけどね。二十歳で結婚して子供を生んで・・・。今思えば生活に余裕がなかったんだわ。毎日精神的に一杯一杯だった。今思えばやっぱり若すぎたのかもしれないわ。子供には申し訳ない結果になってしまったけど結局私たちが行き着く先は離婚しかなかったのよね」
そう言って朋子さんは苦笑した。僕も先生もただ聞いているだけだった。朋子さんの苦しみは朋子さんにしか分からないと思った。下手に慰めるのは薄っぺらく聞こえてしまう。
「無責任な言い訳ね」
いつの間にか結が怖いほど冷ややかな目になって朋子さんを見下ろしている。結の顔から血の気が失せていた。
「結！」
僕は小さく早く結を叱りつけた。「良いのよ」と朋子さんが僕を制した。一端青ざめた結の顔は逆に見る見る紅潮し目は怒りに満ち

ていく。
「りょう君はどうなるの。親のエゴで生まれて親のエゴで親をなくしてるのよ」
「結！朋子さんもすごく悩んだんだ。俺にもお前にも朋子さんの苦しみは分からないんだよ。他人が勝手なことを言っちゃいけない」
「確かに分からないわよ。でも私はりょう君の気持ちは分かるわ。親同士が勝手に憎みあって、父親が離れて暮らしていて、実の父親なのに会うのを制限されて、母親は精神的に不安定で、父親のことが母親との会話ではタブーになって・・・。そんな不思議な誰にも言えないような環境で生きていかなきゃいけないりょう君の気持ちが私には分かるのよ！」
結は目にうっすら涙を浮かべて声を張り上げた。それでも結は唇を噛み気丈にも涙を流すことはなかった。常に笑顔しか見せない結が目に涙をため顔を朱に染めるほど怒りを露わにしているのは信じ難い光景だった。結の両親が結がまだ幼い頃に離婚したということは容易に想像できた。結の心に両親の離婚によってできた深い傷が未だに癒えていないということも。
今まで黙って俯いていた横山が結の傍らに寄り結の背中に手を当てて「落ち着きましょう」と声を掛けた。
「うざいのよ！」
結は横山の手を叩くように払いのけて立ち上がるとそのまま走って部屋から出ていった。
「結！」
僕が立ち上がったときすでに横山は僕を制するように手を上げ結の後を追っていた。ドアが閉まる音と同時に冬の夜の冷え切った風が部屋に入り込んできた。
僕は二人が出ていったドアを見つめたまま朋子さんを振り返ることができなかった。結に最も痛い傷口をえぐるように叱責された朋子さんに何を言いどんな目で見れば良いのか分からなかった。
先生はさっきから一言も発していない。今も口を真一文字に結び

目を閉じて何か考えている。朋子さんに掛ける言葉を必死に探してそれでも見つからない僕とは違い、先生は何も口に出さない方が良いとじっと沈黙を守っているように見えた。
「結さんの言うとおりだわ」
朋子さんは明るく言った。しかし声は微かに震えていて、努めて明るく振舞おうとしながらも動揺を隠しきれていない様子が痛々しかった。
「きっと結も結婚したら朋子さんのつらさが分かると思います」
何度も何度も考え抜いて口にした台詞だったが、あまりに空々しく響いて僕は思い切り後悔した。これでなおさら朋子さんを見ることができなくなってしまった。
「ありがとう・・・。私、・・・結婚した事を後悔はしてない。ましてやりょうを生んだ事を悔いたことはないわ。彼のことはもう愛してはいないけれど、愛するりょうの父親だと思えば嫌いになったり憎んだりもしない・・・。今、私が思うのは物事には順番があって、その順番を乱すと物事はどうしても上手くは行きにくいってこと」
僕はぬるくなったビールをあおった。口の中に鈍い苦味が走り僕はそれを一気に喉の奥に送りつけた。
「空気を入れ替えよう」
先生は立ち上がって窓を勢いよく開けベランダに出た。鋭い冷気が重く淀んだ部屋の雰囲気を切り刻むように次から次へと入り込んでくる。僕も立ち上がってベランダに出た。先生と並んで見上げると街の明りのために星は少ないが黒く美しい夜空が広がっていた
「空がきれいです」
僕の言葉に朋子さんもベランダに出て空を見上げた。
「本当に」
見上げる朋子さんの真っ黒い瞳は冬の夜空のように凛々しく美しかった。僕はただじっと見とれてしまいそうで慌ててまた空に目を移した。朋子さんは何かを思いついたような顔で部屋の中に戻って

いった。
　朋子さんはいつか再婚するだろうと朋子さんの背中を目で追いながら僕は思った。朋子さんは「前夫を憎んでいない」と言った。それはきっと朋子さんの中で一度目の結婚と離婚を過去のこととして整理がつけられたからだろう。これからの朋子さんは恋愛を恐れることなく普通に人を好きになれる気がした。その相手が僕なのか先生なのかそれとももっと別の人なのかは分からないが朋子さんは遠くない将来再び誰かと結ばれて今度こそ幸せになるに違いない。
「あの二人どうなるでしょうか」
「村石君はどう思う？」
「結もまんざらではなかったように思いますが、大野という刑事のことが・・・。うまくいったとしても横山さんが可愛そうな気がします」
「知らぬは主人ばかりなり、か」
　苦笑する僕と先生の間に朋子さんが強引に割り込んできた。胸に缶ビールを抱えている。
「飲み直しましょ」
　朋子さんはまず僕に缶ビールを押し付けてきた。先生よりも先に僕にビールをくれたことが僕はちょっぴり嬉しかった。
　やがて静かな夜にプルタブを開く音と美味しそうな嘆息が三度ずつこだました。

## 13

由紀からの電話は全く要領を得なかった。しかし由紀のその金切り声と繰り返される単語の羅列が事の重大さと緊急性を如実に僕に伝えていた。

お母さんが、お母さんが、倒れて、どうしよう、お兄ちゃん、誰もいないの、お兄ちゃん・・・。

母の身に何か起きたことは間違いなかった。妹の拙い説明でも母が病院に運ばれたことは理解できた。どこの病院かを由紀に何とか吐かせると僕はすぐさま行動を起こした。

僕は不思議なほど落ち着いていられた。狂ったように取り乱していた妹と対峙したからかもしれないが、僕は母が倒れることをあらかじめ予測していたような気がしていた。携帯電話の画面に由紀からの着信が表示されているのを見たときにはこれから由紀が何を言うのか何故か僕は手にとるように分かっていた。僕は何度も予行演習をしていたかのように焦らず無駄のない動きをした。

電話を切ると僕は財布の中身を確認してから時計を見た。まもなく日付が変わる。終電はまだあるかもしれないが乗り換えや駅からの道のりを考えると初めからタクシーを使ったほうが速い。

僕は足早に先生の部屋に向かった。夜行性の先生は昼間よりも覇気のある様子だった。僕が事態を説明すると期待通りの飲み込みの早さで即座に僕に三万円を貸してくれた。これで僕の財布の中は四万円になった。これだけあればとりあえず困ることはないだろう。僕は先生に礼を言うと素早く自分の部屋に戻って厚手のダウンジャケットを掴み冬の夜の寒くて暗い道路に走り出た。吐き出した息がいつまでも白く宙に漂っている。鼻から空気を吸い込むと鼻腔の粘膜がちりちりと痛くなるほど深夜の気温は低かった。

大通りに出ると一台のタクシーが僕が止めるのを知っていたかのようにタイミングよく僕の目の前に滑り込んできた。

妹からやっとの思いで聞き出した病院はかなり名の知れた大きな病院だった。行き先を告げると運転手はただ小さく「分かりました」とだけ言ってアクセルを踏んだ。無口な昔気質の職人を連想させるその仕草に僕は安心して背もたれに身を委ねた。

窓越しに冬の夜の街に眺めていると僕は今日と同じようにタクシーで病院に向かったあの日のことを思い出さずにはいられなかった。

僕の隣には朋子さんがいた。窓の外にちらちらと舞い降りる雪ははかなく可憐で、肩には朋子さんの重みと温もりを感じ、あのときほど僕は時の流れの早さを恨めしく思ったことはなかった。反対に今日のタクシーは遅々として進んでいない気がしてしまう。外を見やれば吸い込まれそうな錯覚を覚えるほど深く気味の悪い闇がどこまでも続いている。僕は不意に背筋に悪寒を感じてダウンジャケットの襟を掴んだ。目を閉じてみたがそこにも闇が広がっていて得体の知れない嫌な予感が僕の全身を駆け抜けていった。

深夜の面会者に嫌な顔一つしない愛想の良い看護婦に案内されて薄暗い病室に入ると「お兄ちゃん」と涙をこぼしながら由紀が飛びついてきた。由紀は僕のダウンジャケットに顔を埋め、泣き腫らした紅い目で僕を見上げた。僕は由紀の細い背中を強く抱きしめ二度、三度と髪を優しく撫でた。微かにシャンプーの匂いがした。由紀は僕の胸の中で小さく鼻をすすった。僕はこのときほど妹を可愛いと思ったことはなかった。兄であることに緊張と誇りを感じた瞬間だった。僕はもう一度由紀を強く抱きしめた。

「大丈夫か」

「うん。もう平気」

「お前じゃないよ。母さんだよ」

「あ、そっか」

由紀は顔を起こし照れたように笑った。しかしその目には今にもはらはらと流れ落ちそうな溜め涙が浮かんでいた。ノーメイクにパーカーとジーンズというラフな格好の由紀は先日のセーラー服姿よりも幼く見え、泣き濡れて僕を見上げる面持ちは甘えん坊で泣き虫

だった小学生の頃と変わってはいなかった。
「今は眠ってる。痛み止めの注射を打ってもらったから、その影響で朝になるまでこのまま眠り続けるみたい」
久しぶりに見る母は予想外に変わった印象はなかった。しかしベッドの脇にあるわずかな明りに照らされた母の寝顔をよくよく眺めるとやはり白髪が増え皺も深くなったようだ。痛みや苦しみの様子は見られないが、顔色はあまり良いとは言えず、その表情の無さは能面を連想させる。微かな胸の上下の動きが無かったらあまりに静かで生きているのかどうかさえ不安になってしまうほどだった。
「安らかだな」
「縁起でも無いこと言わないで」
由紀が僕のダウンジャケットを叩く乾いた音が病室の中に響いた。
僕は脱ぐのを忘れていたダウンジャケットをパイプ椅子に掛けて由紀と並んで腰を下ろした。
「お母さんね、一端6時過ぎに帰ってきてまた出かけたの。そのときにはもう顔色が良くない気がしたから、行くのやめたらって言ったんだけど、どうしても抜けられない大事な会合だからって出て行ったの。それから帰ってきたのは十一時ぐらいだったと思う。私はリビングでテレビを見てて、いつまでたっても帰ってきたお母さんが顔を見せないからおかしいなと思って玄関に見にいったら、お母さんがうずくまってて」
「そっか・・・」
「顔色がものすごく悪かった。青ざめたって言うよりはここの壁みたいな色になってた。土色って言うのかな・・・。お母さん、背中が痛いって言ってそのまま倒れて気を失っちゃったの」
「背中？」
「うん。すい臓が悪いみたい。急性すい炎だって先生が言ってた」
「すい臓・・・」
口に出してみても何の感慨もない名前の臓器だった。胃や肺や肝臓だったら幾つか病名も頭に浮かぶし、心臓と聞けば即座に生命に

関わるという印象を持っただろう。しかし高校の生物の授業以来耳慣れないすい臓という臓器について僕が持っている知識はゼロに近かった。それだけに母の身体に巣食う病魔が何とも得体の知れない恐ろしいものにも思えてならなかった。母が今どれだけ危険な状態なのかは想像もつかないが楽観できないということだけは案内してくれた看護婦の妙に親切な態度から何となく察しがついていた。

由紀が睨みつけるような鋭い視線で僕を見ているのが気配で分かる。由紀が何を言いたいか僕には痛いほど理解できた。お兄ちゃんがもっとしっかりしてくれないからお母さんがこんなになるまで働かなくちゃいけないんだよ、と妹の薄紅い目が僕を責めている。僕はその眼差しを直視できなかった。

「お兄ちゃん・・・。帰ってきてよ」

「別に家出してるわけじゃないよ」

僕は鼻から息を抜くように苦笑した。自分でも不快な笑いだ。後ろめたさを感じている証拠だった。

「お兄ちゃん！お母さんはきっと頑張りすぎなんだよ。もともと身体が強いわけじゃないことお兄ちゃんだってよく知ってるじゃない。このままの状態が続いたらお母さん本当に死んじゃうよ！」

妹は上気した顔で僕の袖をぎゅっと掴み「それでもいいの？」と問いかけてきた。答えるまで離さないと言いたげな由紀の目にまたじわじわと涙が浮かんでくる。梨花一枝春雨を帯ぶ。由紀が唇を結んで涙をこらえる様子は兄の僕から見ても可憐で美しかった。

「いいわけないだろ！」

僕は強引に由紀の手を振りほどいて立ち上がった。

どうしようもないじゃないか

責められて当然だとは分かっている。このままの暮らしを母に続けさせるのは母に死ねと言うようなものだ。しかし、僕なんかに何ができる、という気持ちが何よりも激しく胸を揺さぶり僕はどうしても一歩前に進むことができない。

二十歳の僕に会社を経営できるわけがない。会社のことについて

何も知らなければ、名前と顔が一致する社員もほとんどいない。スタッフも親の七光りでしかない僕についてきてくれるとは思えない。取引先も僕が相手では頼りないだろう。合併話まで持ち上がっているような会社の浮沈がかかっているこの時期に僕が社長になったとしてプラス材料など何一つ生まれてくるはずがないのだ。

代われるものなら代わりたいとは思う。幼いころから僕を父の鉄拳から身を挺して守ってくれた母の身体を病魔が蝕んでいると考えただけで僕の心は焼け付くような熱い痛みを覚える。しかし僕はあまりに無力だった。やつれて健康を崩しベッドに横たわっている哀れなこの母よりも僕ははるかに非力なのだ。父が遺した会社のトップに立つと考えただけで足が竦み手は震え僕は全身が戦き強張るのを感じてしまう。

会社なんて無くなってしまえばいい

そう考えない日はない。父が遺したもの全てが僕にとってはプレッシャーだった。母がどうして社長の座にこだわるのか僕には未だに見当もつかない。この会社さえなければ僕は自由気ままに大学生活を謳歌し、母も安気に老いを迎えられるのだ。

母さん

大学を卒業するまでは僕を自由にしてくれると約束したじゃないか。僕はまだ自分の生活に充実感を見出せていない。先生と出会って、朋子さんを好きになってやっと人生というものの楽しい面が覗けたような気がしてきたところんだ。これ以上自分の人生を美しく彩ろうとするのは我儘だって言うのかい。

僕は問いかけるように母の顔を見下ろした。

眼下の母は相変わらず青白い顔で横たわっている。寝息も立てずに静かに眠り続ける母を見ていると時が止まったような気がしてくる。その側で由紀が鼻をすする音だけが病室に響いている。僕はいたたまれなくなって妹をおいて病室を出た。

先ほど病室を案内してくれた看護婦がナースセンターからほの暗い廊下に出てくるのが見えた。院内を見周りに行くのだろうか、手

には懐中電灯を持っている。僕は彼女に声をかけ母の病状について尋ねた。
その看護婦は急性すい炎という病気について僕に説明してくれた。
すい臓内のすい液がすい臓自体を消化してしまう、軽症でも入院しなくてはならない生命に関わる恐ろしい疾病だと聞き、改めて母は危うく死にかけたのだと思うと僕は身体が細かく震え膝の力が抜けていくのを感じた。彼女は母の急性すい炎の原因は過度のストレスとアルコールが原因だと言った。母が酒を飲んでいるということを僕は全く知らなかった。かつて母が酒を飲むところなど見たことがない。自分でも
「好きじゃない」と言っていた酒を呷って死にかけた母が哀れに思えて仕方なかった。
「今は鎮痛剤が効いてますのでお母様は明日の朝までは目を覚まされません。妹さんと交代ででもお休みになられた方がいいですよ。おそらく大丈夫だとは思いますが、急に顔色が悪くなったり息が荒くなったりしたらすぐに呼んでください。いつでも集中治療室に移れる準備はしてありますのでご安心ください」
彼女は僕に微笑みかけて僕の心配を払拭しようとしているのだろうが、「集中治療室の準備」と聞いて僕は余計に不安を募らせる形になって部屋に戻った。
由紀は僕を見上げて「さっきはごめん」とポツリと謝った。僕は俯いて兄を責めた自分を悔いているように見える由紀に何か言葉を返そうと口を開いたが適当な台詞が見当たらずそのまま妹の隣に腰掛けた。
「少し休めよ」
案の定、由紀はかぶりを振った。
「お兄ちゃんこそ」
小さく頷いたが僕ももちろん横になる気になどなれなかった。それから僕達兄妹はほとんど何も喋らず、皮肉にも久しぶりに家族水入らずの一夜を過ごすことになった。

太陽がよろよろと顔を出し、やがて南の低い頂点に昇りきっても母は目を覚まさなかった。鎮痛剤の効力は午前中には切れたはずなのだが依然として目を開く様子を見せない母に代わる代わる病室を訪れる医者や看護婦も暗い顔で小首を捻る。

僕は早朝に母の秘書に連絡を取って事の次第を説明し、入院の必要があるため当分母の出勤は不可能だと伝えた。鮎川という名のその秘書の声は不自然なほど冷静で抑揚がなかった。僕と彼とのやり取りは非常に無機質で、僕はロボットに向かって話しをしているような気分だった。受話器越しの短い会話だけで彼がいかに無駄無く全てを完璧にこなし秘書として非常に優秀なのかということが理解できた。母が死んだと伝えても驚かないであろう彼には一人の人間と言うよりも一つの機能という言葉がしっくりくる。この男には母は愚痴の一つもこぼせないだろう。軽い世間話すらできやしない。彼の存在も母のストレスの一要因であることは間違いない。

午前中パイプ椅子にもたれてうつらうつらしていた由紀は昼になると入院の長期化に備えて母の身の周りのものを取りに家に帰った。

「少し寝てくると良いよ」と声を掛けたが由紀は何も言わず疲れた顔を横に振って背中を向けた。

それから僕はベッドの脇に腰掛けてひたすら母を見つめていた。太陽があっという間に色を変えながら傾いていき、戻ってきた妹が変わらぬ母の様子に落胆の色をありありと見せても僕は黙って母の顔を眺め続けた。母は時折唸るように大きく息を吐くのだがそれ以外は相変わらず能面のような無表情を保って眠っていた。

僕は久しぶりに目の当たりにした母の顔をただ飽きることなく眺め続け、いろんなことを考えたようでそれでいて何も考えていなかったような贅沢な時間を過ごした。何も言わず、ぴくりともしなくても母はやはり母だった。母の傍にいるというだけで僕の心は静かに満ち足りていた。

「やっぱり私、ちょっぴり寝てきたの。お兄ちゃんも少し横になっ

たら？」
病院に戻ってきた妹は元気な素振りを見せて「仮眠室があるみたいだよ」と僕に勧めた。
良く見れば由紀の目の下には隈ができている。家で横にはなったかもしれないが眠ることはできなかったのだろう。健気な妹の言葉は胸が締め付けられるほど有難かったが僕は昨晩病室に入ってから不思議と眠気を感じることがなかった。あごに手をやるとざらつく髭の感触に長い時間の経過を悟るが、母の傍にいる間何故か僕は睡魔とは無縁だった。
「もし・・・。もしよ、仮にお母さんがこのまま目を開けることがなかったとしたら・・・。お兄ちゃんと私二人きりの家族になっちゃうんだね」
二人きり。その言葉は身震いするほど寂しく聞こえた。
「死なせるかよ」
離れて暮らしているということと、この世に存在しないということとの間には決定的な差がある。母のいない世界など考えられなかった。具体的に何ができるわけでもないのに僕は自分の手で何が何でも母を生き続けさせると心に決めた。そうしなければ自分自身が生きていけないという根拠の無い強迫観念に僕は迫られていた。もう一度母の笑顔を見たい。それさえ叶えば後は何もいらない。僕は純粋にそう思っていた。
僕はそのときむせ返りそうになるくらい息を飲んだ。母の目元がぴくりと動いた気がしたのだ。僕は由紀の手を引き寄せ二人で母の顔に視線を注いだ。気のせいではなかった。母は少し唸るような声を上げて首をゆっくり振った。僕は覆いかぶさるようにして西日に照らされて紅く染まった母の顔を覗きこんだ。由紀は母の手を取り「お母さん！」と叫ぶように呼びかけた。するとさらに母は口元を歪め瞼を震わせた。間違いない。母はこちら側に帰ってきたのだ。
僕と妹は水平線上に姿を見せた船に手を振る漂流者のように、次第に近づいてくる母の魂に向かって一心に呼びかけた。

俄かに騒然とし出した病室内の様子に看護婦が慌てて飛び込んできたかと思うとまた踵を返して出ていった。まもなく白衣を纏い聴診器をぶら下げた医者が病室にのっそりと現れ半狂乱の僕と妹に「そのまま呼びかけてください」と微笑みかけた。

僕はその医者の態度に腹の奥でむっとした。母の命を預かっている人間が何とも他人任せに思えたのだ。言われなくても生死の境をさまよう母のためなら僕と妹は咽喉がつぶれるまで呼びかけるだろう。善人ぶった微笑を浮かべながらも一歩離れたところから親子を芝居の役者を見るような視線で眺めているだけの彼の態度が僕にはとても冷ややかなものに思えた。

必死の呼びかけが功を奏したのか、やがて母は蕾が割れて花冠が開くようにゆっくりと瞼を開けた。薄く開いた目でぼんやりと虚空を見つめる母に僕は如来を連想した。生死の境をさまよって母は何かを悟ったのではないかと僕は思った。

「お母さん、分かる？私よ。由紀よ」

切羽詰ったような勢いで離しかける由紀とは対照的に母はスローモーションのようにゆっくりと顔をこちらに傾けた。

「私・・・、確か・・・」

聞く者がいたたまれなくなるほど細く心許ない声だったが確かにそれは待ちに待った母の声だった。

「お母さん、昨日の夜中に倒れたんだよ。背中が痛いって。救急車でこの病院に来て注射を打ってからずっと眠ってた・・・」

由紀はそこまで言うと布団に突っ伏して「良かった、良かった」声をあげて泣き出した。

「ありがとうね、由紀」

母は脇に顔を埋めて泣いている由紀を慈しむように見つめ、それからゆっくりと僕に目をやった。意識の戻った母の頬には幾分赤みがさしていて僕はもう大丈夫だという確信を持った。

「母さん・・・」

「ごめんね、保。迷惑かけたね」

そのとき母の目から涙がこぼれた。次々溢れてくる涙は母の乾いた髪と枕を濡らした。
久しぶりに会った母に最初に言わせたのが謝罪の言葉だったことに僕は自分の不甲斐なさを痛感した。死の淵に足を踏み入れかけるところまで行きながら何とか生きて帰ってきてくれた母に息子の僕は何を謝らせているのか。弱々しく首を横に振りながらもあまりに自分が情けなくて僕は目頭が熱くなった。僕はハンカチを取り出し濡れている母の目元を拭いながら親を泣かせる事の罪深さを痛いほど感じた。
「背中やお腹は痛くありませんか？」
母の足元に控えていた医者が愛くるしいほどの笑顔をのっそりと出して母に容態を尋ねた。母は鼻をすすって大きく息を吐き医者に向かって頷いて見せた。
「痛みはありませんが全身に感覚が無いような感じです」
「ずっと眠っていらっしゃいましたからね。まだ眠いようでしたらもう少しお休みください」
医者は母の言葉にうんうんと頷いてまた頬が崩れるほどの柔和な笑みを満面に湛えた。僕にとっては気味の悪い笑い方でも心細い病人には天使の微笑みに見えるのだろうか。母はまるで催眠術にでもかかったように白衣を着たペテン師に促されるまま再びゆっくりと目を閉じた。医は仁術ではなく忍術だと僕は思った。
「保、由紀ちゃん。ごめんね。もう少し寝かせてね」
すぐに母は眠りに落ちて静かに規則正しく寝息を立て始めた。それを見届けると医者は看護婦に何事か耳打ちしてそそくさと病室から出て行った。残された看護婦が何やらほくそえみ僕の視線を感じて慌てて表情を打ち消して逃げるように医者の後を追った。あの二人はできてると僕は直感した。看護婦はきっと今晩の待ち合わせを告げられたのだろう。こんな想像を膨らませるようになったのは榊原先生の影響だろうかと僕は思った。丸一日会わなかっただけなのに僕は妙に先生を懐かしく感じた。

再び病室には家族だけが残された。母を見つめる僕と妹の間には先ほどまでにはなかった弛緩した空気が漂っていた。
「何だか急に眠くなってきたわ」
由紀が大きく開けた口を手で押さえあくびまじりにそう言った。あくびでさらに目尻に浮かんだ涙を手の甲で拭う。
「仮眠室で寝てこいよ」
「そうする。お兄ちゃんは眠くないの？」
「俺か。俺はいいよ。お前が戻ってくるまではここにいる」
「分かった。じゃあ、2，3時間寝たら交代するね」
由紀が出ていくと病室は急に世界から取り残されたような静寂に包まれた。いつの間にかたそがれ時は過ぎ、外の暗さが余計に部屋の静けさを助長しているように感じる。
僕は改めて母を見つめた。不思議なもので目を覚ますまでは能面のように無表情だった病人の顔が今は別人のように血色がよく、僕の目にはうっすらと微笑んでいるようにさえ見えた。
母親と二人きりになるのは何年ぶりか思い出せないぐらいだと僕は思った。そう考えると不意に照れくささが背中をくすぐって僕は落ち着かない気分になる。僕は一旦病室を出て自動販売機でカップのコーヒーを買った。増量ボタンを押して砂糖とミルクをたっぷりにした甘いコーヒーだ。立ち上る湯気が僕を落ち着かせる。舌の奥にからみつくような甘さが疲れた身体に心地よかった。
父が死んで遺された家族は各々が急に色々なものに目がいくようになりここ数年互いが互いを見詰め合う時間など無くなっていた気がする。母の今回の急病で結果的には家族の大事さを認識できたのは怪我の功名だったと思う。僕も由紀も親の有り難味と兄妹の存在の大きさを痛いぐらいに味わった。僕がいなかったら由紀は気が動転したまま泣き続けていたかもしれないし、由紀が母と暮らしていなかったら僕は今頃自分の親不孝さに悔やんでも悔やみきれない事態に直面していたかもしれない。「私、看護婦になろうかな」と昨晩由紀は呟いた。毎日を淡々と送っていた由紀にとっては母の入院

は人生の大きな転換点になるかもしれない。
僕たち家族の前には大きな問題が横たわっている。父が遺し母が切り回している会社をこれからどうするか。僕は次に母が目を覚ましたときには母に社長の座から降りることを勧めるつもりだった。かと言って僕が母の後任に就く気も無い。今は何百人もの社員を抱えるような企業のトップを一家族が代々世襲していくような時代ではない。足の引っ張り合いの厳しい時代の流れの中では気概ある有能な人材がリードしていかなくては企業、社員延いてはその家族までもが路頭に迷うことになってしまう。母も今回の入院で自分の身体がこれ以上激務に耐えることはできないと悟っただろう。僕に継ぐ意思がないと分かれば母もどうしようもないはずだ。母にとってはつらい決断かもしれないが、結局そうすることが僕たち家族にも会社にとっても一番良いのだと思う。
病室にもどった僕は気付くとパイプ椅子の上で舟を漕いでいた。無理な体勢だったのか首と腰が重く痛かった。時計を見ると三十分ぐらい眠っていたらしい。僕は目を擦りながら椅子に座りなおした。
「あれ。起きてたの？」
いつの間にか目を覚ましていたらしい母は僕の方を見て微笑んでいた。こんなことでは仮眠室で寝ている由紀に怒られてしまう。
「私も今起きたところよ。久しぶりね。保の寝顔を見るのは」
そう言って母は小さく笑った。母の笑顔は優しく温かくて僕はいつまで経っても自分が小さな子供だということを知った。
「そうやって座って居眠りしている姿はお父さんそっくり。お父さんも忙しい人だったからよくそうやって椅子に座ったまま居眠りしていたわ」
以前の僕なら父と似ていると言われると良い気分はしなかった。僕はあの尊大で傲慢な父親とは鏡で映したように正反対の人間になりたいと思っていた。しかし今母に言われても不思議と悪い気はしなかった。少し懐かしささえ覚えていた。今回のことを経験してそう思えるようになったのだろうか。

「まあ、親子だからね」
僕は照れながらもそう言えた自分が少し大人になったように思えた。
「保」
「何？」
「あなたに言っておきたいことがあるの」母の顔は穏やかなままだったそのが声はいつにも増して真剣だった。「これから言うことがあなたにとってどう影響するかは、無責任かもしれないけど私にも分からない。ある面ではプラスだろうけど必ずマイナスに働く部分もあると思うわ。とにかくあなたにとって何らかの、それも大きな影響を持つ事実であることは間違いないと思う。・・・でもしっかりと保自身で受け止めて欲しいの」
言っているうちに母の眼の光は弱々しくなっていった。僕に対して何かを謝罪したげに見える。
会社のことだろうか。今回倒れたことで自分の健康に自信をなくし、いよいよ社長の座を誰かに譲り渡す決心でもついたのかもしれない。そういうことであれば僕に気兼ねなく決断してほしい。僕には母の会社に対して野心もなければ、責任感もない。何も僕に詫びることはないのだ。僕は少し頬を緩め母の次の言葉を促した。
「保。あなたとお父さんは血が繋がっていないの」
「え？」
僕は耳を疑った。母が搾り出すようにして口にした言葉そのものの意味は分かるが何度頭の中で反復しても内容が理解できなかった。「血が繋がっていない」という文字が僕の脳内を飛び跳ねる。跳ね回りつつその体積を増やし、すぐに脳全体に広がって僕の頭の中を内側から強烈な強さで圧迫し始めた。頭が割れそうに痛い。
母は救いを求める僕から目を反らした。
「由紀も知らないことだけど、由紀とあなたは異父兄妹なのよ」

# 14

病院を出るときにはもう立っているのがやっとと言うほどに僕は疲れ果てていた。まるで巨大な石塊を背負っているかのように両肩が重くだるかった。

すっかり日が暮れた今日の夜気は風がないために鋭さはないが湿り気を多く含んでいて肌をしんしんと圧迫するような寒さだった。久しぶりに雪が降るのだろうか。厚い雲にのっぺりと覆われた夜空は街の灯りが反射しているのかぼんやりと白っぽさを帯びている。

腹が減った

急に空腹感が襲ってきて、そう言えば朝からろくに食事らしい食事をしていないと気付いた。

しかし、今の僕は何もかもが面倒だった。身体が食事や排泄や入浴よりもまず睡眠を求めている。電車で帰る気などにはなれず、迷わずタクシーを止めて座席に身を委ねると僕は腰が果てしなく沈んでいくような錯覚に陥って肉体的にも精神的にも自分が腐った果実のように張りを失っているのを感じた。

由紀は言葉どおり三時間後に病室に顔を出した。完全に妹の存在を忘れ母の言葉に混乱していた僕はドアがノックされたときには椅子から飛び上がるぐらいに驚いた。部屋に入ってきた由紀は僕とは対照的で目元からは隈が消え表情が幾分晴れやかに見えた。

「お母さん、起きてたの？」

母は何事もなかったように愛娘に微笑を返した。

「お兄ちゃん、交代するよ。仮眠室使えば？」

「・・・いや、俺は一端部屋に帰って寝るよ」

僕は妹と目を合わせられなかった。母の爆弾発言にありありと動揺している自分の虚ろな顔を時々勘の鋭いところを見せる妹には見られたくなかったし、血の繋がりが半分だと知って妹のことが妹ではないように見えどう接して良いのか分からなかった。今まで兄妹

共通の父親だと思い込んでいた人物が自分とは血が繋がっていなかったという事実で全血の妹に対して引け目を感じてしまったのかもしれない。

「マンションに帰るよりも、家の方が近いよ。家で寝れば？」

何も知らない由紀が僕を気づかってくれる。

確かに病院から家までならタクシーで十分かからないぐらいだが、僕は由紀の言葉に素直になれず、背を向けたまま首を横に振った。今日はいつもよりも家の敷居が高い。慣れ親しんでいるはずの実家が見ず知らずの他人の家のように思えてしまう。

軽く手を挙げて「じゃあ、また」と言うのが精一杯だった。ドアを開け振り返ると母は何か言いたげな、すがるような顔で僕を見ていたが僕は顔を背け逃げるように部屋を去った。

とにかく寝よう。頭を休めよう。僕はタクシーに乗り込むと窓に頭をもたらせるようにして無理やり瞼を閉じた。しかし「血が繋がっていない」という母の言葉が耳の奥でいつ消えることなく鳴り響きやがて吐き気を感じて僕は耐え切れずに目を開いた。僕は窓に向かって大きくため息をついた。気が立ってしまってとうてい眠れそうにない。僕は息で白く曇った窓にベッド上の母の顔を思い出していた。

母は高校を卒業してすぐにある銀行に就職した。そして二十歳のとき、彼女は同じ職場の十歳以上年上の男に誘われた。妻とは別居中というその男は人恋しそうな目で離婚をほのめかし半ば強引に母に交際を迫った。男と女のことなど何もわからない無垢だった母は瞬く間に夜も眠れなくなるほどその男性を愛するようになってしまった。求められて断りきれずに始めた関係がいつの間にか盲目的に自分からすがりつくような形になって、気付いたときには母は妊娠していた。そのときに身ごもったのが僕だったという。

「最初はこれで結婚できるって思ったの」

当時、母は僕を妊娠したことをだしに男に結婚を迫ったのだと僕に正直に言った。母は手持ちのカードのように使われたことを僕が

怒ると思ったらしく深々と謝ったが、僕はそのことについて不快感はなかった。妊娠したから責任を取ってほしいと言う。それは卑怯なことではなく母の正当な権利だと思った。

妊娠の事実を知ると彼は人が変わったように冷たくなり、当然のように母に堕胎を要求した。

親も彼と同じだった。彼女の母親、つまり僕の祖母は早くに他界していなかったが、密かに母に見合い話を用意していた僕の祖父は烈火の如く憤り、彼以上に中絶を主張した。しかし母はお腹の中の僕を殺すという考えは毛頭なかったらしい。男に本妻との離婚の意思が全くないと分かり、その上親に勘当するとまで言われても僕を産むという母の決心は揺らぐことはなかった。

「今となっては何故かは分からないんだけど。精神的に追い込まれてたから意固地になってたのかしらね。その人のことはもう諦めてた。こんな人だったんだ、と思ってつらかったけど、その人との数年の結晶だと思うと中絶するなんていう気には少しもならなかった」

涙を見せ、土下座をし、金を積んでも母が中絶に同意しないのを知ると相手の男はとうとう暴力を振るおうとした。そして母は彼と祖父の前から姿を消した。

「孫の顔を見ればあなたのおじいちゃんも許してくれると思ったの。だからあなたを産むまでは必死だったわ」

当初は友達の家を転々としていたが、そうそう迷惑をかけることもできずお腹が目立つころにはホテル住まいを余儀なくされた。働いて貯め込んできた蓄えは見る見る減っていき出産どころか自分が寝起きする場所すら覚束なくなり途方に暮れ始めたころに母の前にある男性が現れた。それは祖父が進めていた見合い話の相手だった。彼は母にお腹の子の父親になろうと申し出た。僕が今日まで実の父親だと信じて疑わなかった人間がその見合い話の相手だったのだ。

嫌悪を通り越して憎しみさえ感じていた父親と血が繋がっていないと知って僕は複雑な心境だった。母の口から全てを聞いた直後、僕の心は驚きによって麻痺していた。しかし時が経ち落ち着きを取

り戻すにつれ様々な思いが僕の胸に去来している。
せいせいしたという気持ちはある。いつか自分もあんな最低な父親になってしまうかもしれないというＤＮＡの呪縛からは解き放たれた。それはどこまでも続くと思われた暗いトンネルから不意に抜け出して明るい場所に出たような解放感と安堵感だった。僕を覆うものは何もない。肺の奥まで思い切り空気が吸える。僕は自由の身になったのだ。しかし暗く長いトンネルも意外に暖かかったのだと僕はすぐに思い知ることになった。僕が一人ぽつねんと立っているのは陸の孤島。人っ子一人見当たらず四方から吹き付ける風の冷たさが骨身に沁みる。トンネルの中の陰湿な薄暗さを懐かしく思って明るみから振り返っている自分がいる。だけど、もうあそこには帰れない。
目の前の信号が赤になってタクシーは静かに停まった。隣の車線を走っていたワンボックスカーも同じように減速し、タクシーに並んで停車した。どこかへ出かけるのか、それとも家へ帰るのか。車内には家族向けに作られたその車に似つかわしく一組の夫婦と二人の子供が乗っている。
僕は突然その家族に激しい嫉妬を感じた。楽しそうに笑いあう家族の絵。昨日までは何も意識しなかったはずのその光景が僕に歯がゆい惨めさを味わわせる。
母は僕を見るときただ単に僕を見ているのではなかったのだ。今まで僕の成長をどういう思いで見守ってきたのだろうか。
由紀は何も知らない。しかし僕は知ってしまった。これからも妹は今までと同じ目で兄を見るだろうが、これからの僕はどういう気持ちで妹の前に立つことになるのだろう。
父は死ぬまで僕の中に他人を見ていたのだろう。父の僕に対する態度は何かの裏返しなどではなく、とどのつまりが仕方なく抱え込む羽目になった厄介者へのそれだったのだろうか。その冷たさには一滴の血も通っていなかったのかと思うと僕の胸の中にはぽっかりと穴があいてしまって悲しいことに涙も出てこない。

「鳴ってますよ」
タクシーの運転手に言われて初めて携帯電話が着信していることに僕は気付いた。慌てて電話を耳に当てると若い女の火花のような弾けた声が僕の鼓膜に襲い掛かってきて僕は思わず電話を少し遠ざけた。
「元気？風邪ひいてない？」
「ああ、元気だよ」
声の主は結だった。僕は言葉とはあまりに矛盾した覇気のない自分の声に苦笑した。
「何かおかしい？」
「いや、何でもないよ。それよりどうかした？」
「そうそう、この前はごめんね。あんな風に飛び出して行っちゃったりして。朋子さんには凄く失礼なこと言っちゃった。朋子さん、怒ってた？」
「別に怒ってないと思うよ。あの後もケロリとしてたし」
実際ベランダで三人でビールを飲んだとき朋子さんに落ち込んだ様子はなかった。以前の精神的に不安定な状態を知っている僕は結の言葉に打ちのめされて鬱々とする朋子さんを想像したが、彼女は逆に躁状態になるわけでもなく「言われちゃったわね」と軽く笑っただけだった。
「良かったぁ。言いすぎたなって思って気になってたの。今度朋子さんのところに謝りに行くわ。言いたいこともあるし・・・」
結は何か含みがあるような言い方をしている。わざわざ電話をしてきたのには何かもっと他に理由があるはずだと僕は思った。
「それで？」
「え？」
「何か俺に言いたいことがあるんだろ？」
「鋭いわね。あなたが相手だったらきっと上手くいくと思うわ」
不意に僕の頭を横山刑事の顔がよぎった。結の横で借りてきた猫のように小さく座っていたり部屋を出て行った結の後を追いかけて

いったりした彼の姿が次々と僕の目に浮かんだ。
「結婚するのか？」
「そんなつもりは全然ないわ。でもお友達として付き合うことにはなったの。だから当分奉仕活動も中断ね。情にほだされちゃったのかしら。あんなタイプ初めてだから一緒にいると何だかこっちも緊張しちゃうわ」
まるで処女みたいね、と結はくすくすと笑った。
要はのろけたいだけなのだ。しかしそれが分かっても僕は不快ではなかった。結の乾いた声は底なしに明るくて少しの間僕の濡れそぼった心の重みを忘れさせてくれる。結と話しているといつも自分の心が軽やかなリズムを刻むことを僕は知っていた。そんな効果を与えてくれる人は他にはいない。結は僕にとって貴重な存在なのだ。そう思うと横山刑事に対して微かにやきもちを焼いてしまうがその苦味もまた爽やかだった。
電話を切るとようやく僕はうとうととまどろみ始めた。電話をしているときからその兆候はあった。結の飛び跳ねた声が今日は何故か僕の心を温め落ち着かせてくれた。何年も一緒に生活して分かり合えていると思っていた家族の間の秘事を知って心の芯から疲れ果てたとき、つい先日あったばかりのどこの馬の骨とも知れない女性の声を聞いて心を救われるなんて皮肉な話だと僕は思った。軽く目を閉じ、シートに全身を委ねると今度こそ眠れそうな気がする。そう思ったときには既に僕の意識はどこか遠くに飛んでいた。
瞬く間に眠りに溺れながら僕は海の底に眠る難破船の宝箱のような一つの明確な答えを見つけた。それはまるで神の啓示のようだった。自信も根拠もないが僕は不思議とその決断を下しても後悔しないことを確信していた。

## 15

猛烈な空腹で胃がこれ以上ないくらいに窄まったような痛みに近い感覚に耐えかねて目を覚ましたときには昼前だった。ベッドの上で身体を起こし妙な動きにくさを感じて初めて僕はダウンジャケットを着たままであることに気がついた。もちろんその下は一昨日の夜に病院に向かったときの格好と何ら変わっていない。全身が汗でべたべたする。頭も痒い。熱い湯船に浸かりたいとは思ったが何回分かの食事を一気に済ませないことにはどうにも腹の虫がおさまりそうになかった。

とにかく僕は行動を開始した。蛇口を捻って浴槽に湯を張りつつ小走りで僕は冷蔵庫に向かった。

部屋に戻ったのが何時だったのか僕にはさっぱり覚えがなかった。タクシーの運転手に起こされて寝ぼけ眼で代金を払ってからの記憶が全くない。おそらく半分意識を失いつつ日頃の感覚だけでベッドまで辿りつき、そこでついに全身の力が尽きたのだろう。ただ、眠りに落ちる前にあの決断をしたことだけは明確に覚えていた。その決断を下したことでたった今まで何の頓着も無くまさに泥のように深い眠りに身を委ねることができたのだ。そうでなければこんなにすっきりとした目覚めを迎えられたはずがない。

母に社長を辞めさせる

母の身体を第一に考えるのが息子である僕の役割だと思った。半ば常識的な判断ではあるが、それが僕の一世一代の決意だった。

もうこれ以上母に社長職を続けさせるのが無理だということは明白だった。あの頑なな母を社長の重責から解き放つには僕が社長の役をやるしかない。当面は肩書きとしては母に社長をやってもらい僕は役員として母の代役を務める形が自然だろうか。そのために僕は大学を中退する。そしてこの部屋を引き払って実家に戻る。深い眠りに引きずり込まれながら見つけた答えはこれだった。

何か作ろうかと考えたが冷蔵庫に何もないことを知って僕は冷凍室からタッパーを二つ取り出した。一つは食べ残しのご飯で、残りは作り置きのカレーである。今日のような非常事態のために僕は常にカレーとご飯を常に冷凍保存している。

そのまま電子レンジに入れて五分後には僕はカレーライスを何の蓄えもない胃に流し込むことに成功していた。

カレーライスを食べると僕は必ず先生と出会った日のことを思い出す。あの日から僕の学生生活は一変したように思う。失望から絶望に変わりかけていた鉛色のキャンパスライフが急に色づき始め万華鏡のように七色に輝き出したのだ。

先生に出会って憧れの職業を目の当たりにした。自分が料理でストレスを解消できることも発見した。大人の女性を好きになり、子供嫌いも解消された。不法侵入から始まり盗聴、売春そして殺人と短期間でこんなに犯罪に関係することなど今後の人生でもう二度とないことだろう。そして、結の白く輝く裸身が目に焼き付いて未だに忘れられない。

たったの二ヶ月だが今までの人生でこんなに充実していた期間はなかった。毎日何が起こるか分からなかったし、何も起こらない日などなかった。終わりが来ることなど考えたくなかった。まさに青春だった。母のためなら仕方がないとは言え二度とやってこないと分かっている時間を自ら手放してしまうのは胸が押しつぶされる思いだった。僕はスプーンを銜えたまま不意に泣きたくなった。胸からせり上がってくる気持ちも一緒くたに咀嚼し飲み込むようにカレーライスを黙々と食べた。

食べ終わって一息ついたときに僕は初めて風呂のことを思い出した。行ってみると浴槽から湯がこぼれんばかりになっていて僕は慌てて蛇口を締めた。服を脱いで浴槽の中に立つと見る見る湯が溢れていく。今日ぐらいは、と僕は湯の中に思い切り身を沈めた。

ザッパー。流れていく湯の音は実に心地よかった。熱めの湯の中で徐々に全身を伸ばしていくとため息が出るほど気分がゆったりと

していく。
風呂から上がり髪を乾かし服を身に付けると僕は顔を叩いて気合を入れた。胸の高鳴りがドアにかける手を少し躊躇させる。しかし立ち止まっている時間は僕にはない。僕は意を決して先生の部屋に向かった。
僕は先生に挨拶をしたらその足で朋子さんに結婚を申し込むつもりだった。
二人ともさぞかし驚くに違いない。「好きです。大学を辞めて会社の社長になる僕と結婚してください」と言ったら朋子さんはどういう表情をするだろうか。彼女は僕の言うことを一つとして信じてくれないだろう。そして冗談でもはっきりと断るだろう。万に一つもない、とまでは思っていないが贔屓目に見ても朋子さんが今の僕と結婚してくれるとは考えにくい。何となくだが僕は朋子さんに男として見られていない気がしている。だからと言ってやけくそになっているわけでもなかった。成功するにしろ、振られるにしろプロポーズすることでこれからの人生に弾みがつくと僕は思っていた。万が一うまくいけばその嬉しさと責任感が、そして逆の結果になったとしてもその挫折感は僕の人生の分岐点において起爆剤となるだろうと計算したのだ。発想が自虐的かもしれないが、少なくとも自分の人生にここではっきりと節目をつけられると僕は思った。
先生は突然の僕の来訪を快く迎えてくれた。執筆中かと危惧していたが先生は「息詰まってたから丁度良かったよ」といつも通りの爽やかな笑顔を見せてくれた。この微笑が僕の日常となりつつあったのだ。しかしそれも僕は自分の手で過去の思い出にしようとしている。何でもないんです、とこの場で笑って引き返せたらと思わずにはいられなかったが僕は前に進んだ。自分でも分かるほど顔を強張らせながら僕は先生の部屋に足を踏み入れた。
よく考えると先生の部屋に上がるのはこれが初めてだった。聖域を侵すような罪悪感が一瞬胸を刺すが、一歩そこに足を踏み入れると先生の爽やかさからは想像を絶するほどの部屋の中の乱雑さに僕

は全てを忘れて唖然としてしまった。所狭しと本が積み上げられ、いたるところに紙くずが散乱し、何に使うか分からない道具が転がっていて、隅という隅に埃が溜まっていた。掃除をしようという気概を根底から失くさせるほどの散らかりようだった。人間的というよりは動物的、「部屋」というよりは「巣」だと僕は思った。先生という名の生き物がこの空間を縄張りとしてひっそりと生息しているのだ。

先生は鶉の卵のようなものにコードとボタンがついているものやら見たことがないほど太くて赤いろうそくやら口を大きく開けた女性の人形やらいろんなものを押しのけてテーブルの前に僕が座るスペースを作ってくれた。物を少し動かすだけで灰色の埃が舞う。僕は極力空気の流れを乱さないようにゆっくりと座った。しかし先生は頓着無く勢いよくテーブルの上の本を移動させ僕の前に緑茶を用意してくれた。

透き通った淡い緑が先生に似つかわしい。僕は先生に礼を言って埃が入らないように手で蓋をするようにして熱い緑茶を啜った。普段の生活で日本茶を飲むことなどほとんどない。湯飲みを手にしたのはいつ以来だろうか。久しぶりに飲む緑茶は僕の身体だけでなく心までも芯から温めてくれた。昂ぶっていた神経が撫で付けられていくように穏やかな気持ちになれた。

「先生」

「はい」

「今日は大事な話があって、ここに来ました」

「だろうね。こんなことは初めてだから」

先生も事の重大さを認識していつになく真剣な顔をして僕を見てくれている。その視線を正面に受け止めると僕は緑茶のおかげで落ち着いたはずの心がまた安物のおもちゃのようにぎこちなくせわしなく踊りだすのを感じた。

別れは告げたくなかった。これからもこのマンションで先生と不思議な関係を続けていくことができれば毎日が楽しいことは間違い

ない。
　しかしもう決めたことだった。これ以上先に延ばすことはそのまま母の生死に直結する。母のためなら日々の幸せを捨てることもやむをえない。父だって喜んでくれるだろう。
　父は亡くなるまで血の繋がっていない僕を跡取りにすると公言して憚ることがなかった。父にとって僕はどこまでいっても妻との間に生まれた他人の子供なのだ。それなのに父は自分が手塩にかけて育てた最愛の会社を僕に譲るつもりだった。つまり父は僕を愛してくれていたのだ。母はどれだけ勝手気ままに生きても僕を後継者にと言ってくれる父に感謝してやまなかったのだろう。母が死ぬような思いまでしても頑なに社長の座にこだわるのはそういうことなのだ。僕は昨晩の眠りの淵でそのことに気がついたのだった。
「僕は大学を辞めてこのマンションから出て行きます」
　僕は胸の詰まりを必死にこらえて僕の境遇を先生に包み隠さず説明した。先生に僕の気持ちを分かってもらいたいという気持ちが空回りして自分でも嫌になるほど話は要領を得なかった。途中で喉が渇き緑茶をおかわりした時にはどこまで話したか分からなくなってしまい、また一から順を追って説明しなおした。
「なるほど」
　僕の稚拙な説明を聞き終わって、つぶやくようにそう言うと先生は眉間に皺を寄せて頷いて黙り込んだ。
　意外だった。先生なら僕の決断を誉め新しい出発を爽やかに励ましてくれるだろうと高をくくっていたのだ。その激励をさらなる力に変えて3階の朋子さんの部屋に駆け上がろうとしていたのに。僕は先生がこれほど苦りきった渋面になるとは一分の想像もしていなかった。この重苦しい雰囲気が何を意味しているのか僕には分からなかった。
「昨晩、朋子さんにプロポーズされたよ」
　僕は驚いた。先生の言葉にびっくりしたのではない。その事実を知っても指一本震えることなく落ち着き払っている自分に驚いたの

だ。まるで幽体離脱をして後ろから座っている自分を眺めているような、遠くの国の小さな事件を新聞で読むような冷静さだった。つまりは心のどこかで朋子さんは先生のことが好きなのだと諦め、朋子さんには先生こそふさわしいと悟っていたのだろう。今度は僕が頷く番だった。

「お似合いですよ」

僕は精一杯の笑顔を見せた。決して表情を作ったわけではない。心から納得できた結果、二人を祝したいという気持ちが自然と顔に出たのだ。しかし先生は知人の葬儀で焼香をするような沈痛な面持ちで僕を見た。

「はっきりお断りしたよ」

「そんな・・・」

先生ははにかみとも苦笑いともとれる薄笑いを見せて僕から目を切った。僕は遠ざかる先生の視線を追いかけるように身を乗り出した。

「おかしいですよ、先生！先生も朋子さんのことが好きなんでしょ？」

「勝手に決めつけないでくれよ。俺は朋子さんのことは愛してないって前にも言ったじゃないか。愛していない以上結婚もできないのが道理なんだ」

先生の覇気の無い答え方は言い訳めいて聞こえた。道理などという似合わない言葉を口にする先生の煮え切らなさに僕は苛立ちを感じた。

「僕に気を遣うのはやめてください。朋子さんを幸せにできるのは先生しかいないんですよ」

気付いたときには僕は立ち上がっていた。こめかみの辺りで脈を打っているのが分かる。僕は本当に先生と朋子さんに幸せになって欲しいのだ。りょう君にとってもそれが良いに決まっている。

しかし先生は険しく強い目で僕を見上げた。僕は先生に睨みつけられて言葉を失い金縛りにあったように立ち尽くした。

「俺は朋子さんを幸せにできない」
「ど・・・」苦しくて咽喉から声が出てこない。しかし僕だってここで退くわけにはいかない。僕の大好きな朋子さんの幸せがかかっているのだ。「どうしてですか！朋子さんが先生を望んでいるんですよ！」
漸く吐き出せた僕の声は思いのほか大きく、先生は目の力を弱めて肩を落とした。
「俺には・・・妻も子供もおるんや」
開いた口が塞がらないとは正にこのことだった。完全に意表をつかれると人間は息をすることも困難になる。
僕が先生の過去について知っていることは「いろいろあった」ということだけだった。僕は先生のことをあまりにも知らなさ過ぎていたことを痛感した。一人でいきり立っている自分が恥ずかしかった。僕は膝に力が入らずに腰砕けになってその場に座り込んでしまった。僕の周囲の埃が一斉に舞い上がったがそんなことはもう気にならなかった。先生は何かが吹っ切れたような顔で時折関西訛りをつかいながら全てを僕に打ち明けてくれた。
「俺は自分で言うのもおこがましいんやけど、いわゆるエリートやった」
一流の大学を卒業し、国内で指折りの関西に本拠を構える大企業に入り、仕事の成績も優秀で周りからも信頼が厚く上司からも未来を嘱望される。先生はまさにそんなエリート中のエリートだったようだ。異例のスピードで係長から課長補佐に昇進、やがて社内恋愛の末に結婚、翌年には長男が生まれるという誰もが羨む順調すぎる人生を送っていた。
しかし先生はいつのころか毎日の生活に倦むようになっていた。良い父、良い夫、そして良い会社人。あるとき先生は自分自身を演じていることに気がついてしまった。自分が周囲の期待によって作られたロボットのように感じ、本当の自分というものが他にあるように思い始めた。あまりに遅い自我の芽生えだった。間もなく先生

にとっては奥さんや子供に対しても演じ続けている日々の暮らしが苦痛以外の何物でもなくなった。いつしか先生は仕事にも家庭にも興味を失っていた。

「息が出来なくなってしもうたんや」

先生はある日突然原因不明の眩暈、頭痛、吐き気を感じて動けなくなり病院に運ばれ入院した。すぐに退院できたが、どうしても会社に行く気にはなれず、奥さんや子供の目からも自分を遠ざけ、部屋に閉じこもるようになってしまった。口を開こうとしない夫に妻は苦悩し何かコミュニケーションの手段はないかと考えた。そして家族同士で手紙を交換するようになった。

鉛筆と紙を手に入れた先生は急に目の前が開けたように感じた。鉛筆が言いたいことを全て語ってくれる。紙の上なら何も演じることなく本当の自分を表現できる。底なしの湿地帯から突然風通しの良い空間に飛び出したような解き放たれた喜びがあった。先生が作家になりたいと思うのは自然の成り行きだった。会社に辞表を出した先生は水を得た魚のように次々と小説を書き上げ、社会に発信していった。

手応えがあった。懸賞に応募すれば入選し、投稿すれば雑誌に取り上げられ、もっと書いてみないかと依頼まで来るようになった。

息が出来る

先生は生まれて初めて生身の自分が他人に認められたという実感を味わった。言い知れぬ充足感が身体を軽くする。先生は生きている意味のようなものをようやく感じ始めていた。

しかし良いことばかりでは無かった。今度は奥さんの様子がおかしくなったのだ。

出来上がる作品はどれも人間の性が主題になっていた。外観ばかりを取り繕って生きてきた過去から脱却したいと願う気持ちがより深く人間の内面を見つめさせる。先生は人間の内側を探れば探るほど性に突き当たった。

「人間、昼よりも夜のほうが野蛮なんだ。昼間着飾っているものか

ら解放されるのは夜なんだよ。つまり夜の自分こそ本当の自分」
先生の言葉は力強かった。夜の人間を描くことが人間本来を表現することになる。だから先生が描きたいものは自ずとエロスに向かっていく。
「だけど、俺が官能小説家になることを妻は理解してくれなかった。妻の気持ちもよく分かるんだ。未来を嘱望されたエリートサラリーマンと結婚したと思ったら、すぐにその夫は病院に担がれ、仕事に行かなくなり、献身的に支えた結果ようやく元気になったと思ったときには官能小説家になっていたんだから。愛があればなんてきれいごとで妻を非難する気にはなれない。悪いのは周りを騙し続けた俺なんだ。『こんなはずじゃない、一緒には暮らせない』と出て行こうとする妻を引きとめ、代わりに俺が家を出たんだ。丁度その頃よくしてくれた出版社の人が、本社に転勤が決まったからお前も来ないか、いくつか仕事を回せるぞって言ってくれて関西から出てきてここに住み始めたんだ。こっちの方が大きな出版社がいくつもあって他の仕事にもありつきやすいしね」
官能小説にようやく生きる糧を見出した先生にとって「エロ作家と結婚したつもりはない」と半狂乱に叫ぶ奥さんと一つ屋根の下で暮らすことはもう無理になっていた。
しかし今でも三ヶ月に一度は関西に帰って家族で食事をする。離婚もしていない。子供は慕ってくるし、妻もその様子を微笑みながら眺めている。「互いに嫌いになったわけじゃないんだ」と先生は言った。
「作家として売れればも関西に帰ってもう一度家族三人でやり直したいと思ってるんだ。それが今の俺の夢」
先生の爽やかな笑顔の裏には誰も知らない苦悩があった。誰にだって生きてきた分の苦労があるのだ。それを微塵も見せない先生を僕は改めて尊敬の眼差しで見つめた。
「これからも俺の妻は彼女一人なんだ。朋子さんも最後は笑ってくれたよ」

僕は晴れ晴れとした気分で先生の部屋を辞した。
昼下がりの日差しは柔らかく眼下の街に降り注いでいた。綿のような雲が空の高いところに漂っている。じゃれつくような陽気が僕をくすぐる。吹きぬける風に棘も痛みも無かった。確実に冬は終わりに近づいていた。
僕はこの冬の間に何歩も大人に近づいた自覚があった。今までは持てなかった自信が不思議と僕の身体に漲っている。僕は足取り軽く坂道を下り病院の母の元に向かった。成功の春を予感していた。
結局僕は朋子さんの部屋には行かなかった。会いたい気持ちはあったがこらえた。お互いの失恋の傷をこれ以上深くはしたくなかった。
いつか会いたい。必ず会いに来る。朋子さんに、そしてりょう君に忘れられないうちに。
僕は何でもやってやるという気持ちになっていた。
病室に入ろうとすると中から花瓶と花を抱えた由紀が出てきてぶつかりそうになった。
「遅いよ、お兄ちゃん。どれだけ寝てきたの」
ぷいっと顔を背け、どいて、と僕にわざとぶつかって由紀はトイレに向かった。「これでやっと帰れるわ」と由紀はぶつぶつ文句を言いながら背中で怒りを表していた。僕は由紀と交代で母の面倒を見る約束をしていたのをすっかり忘れていた。由紀を怒らせると性質が悪い。怒りを金で清算しようとするのだ。役員になれば少しは小遣いが増えるのだろうか。まさか妹のご機嫌代では経費で落ちないだろう。
母がベッドの上に身体を起こして何やら雑誌を読んでいた。目が良いはずの母が眼鏡をかけている。いつの間にか母は老眼鏡に頼る年齢になっていた。僕が大人になればなるほど母は着実に老いていく。少し前までは親が老化していくなど思ってもみなかった。間に合って良かったと思った。
「遅くなったね、母さん」

母は顔を上げ眼鏡を外してにっこりと微笑み、ゆっくりと首を横に振った。僕はベッドの脇に腰掛け母の手をとって「もう、心配ないよ」と囁いた。母がもう片方の温かい手を僕の手の上に重ねて置いた。久しぶりに感じた母の温もりだった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3482i/

サクラビルを出て

2010年11月13日22時46分発行